
勇者の旅は終わらずに

ネキア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の旅は終わらずに

【Nコード】

N6353V

【作者名】

ネキア

【あらすじ】

がたん、ごん。

悪路に揺れる古びた馬車の荷台に座る、全身を黒いローブで覆った人物から不満気な視線が突き刺さる。

「……下手糞」

「ごめん」

手綱を握る勇者はそう言って困ったように苦笑した。

魔王がいなくなった世界で、勇者は何のために旅を続けるのか。

英雄譚は既に終わり、さりとして冒険譚というわけでもなし。
これが何なのかは己が眼で確かめるといい。

ネタバレ混じりなのに大した事は書いてないんで、「一昨日読んだ内容をもう忘れた」レベルでないと役に立たないと書いてから気付いた

簡易キャラクター紹介

最新話のネタバレを含みます

『勇者』

- ・ 物語の主人公
- ・ ある日突如として大陸に現れ、剣1本のみを抱えて単身魔王に挑み、世界に平和を取り戻した
- ・ その際、魔物であろうと決して命を奪おうとしなかった事から英雄を越えて半ば神聖視されている
- ・ 容姿はどこにでもいる温和な青年であり、直接会った事の無い人物相手では名乗っても信用されない事もある
- ・ 馬車馬として災害級の魔獣を使うなど、少し人間離れた感性を持っている
- ・ 大陸中最強の戦闘能力を保有している

『イヴ』

- ・ 物語のヒロイン
- ・ 黒いコート一枚のみを身に纏い勇者と共に旅をする謎の少女
- ・ 来歴不明、本名不詳、得手ではない体術で自分より体重のある野犬を傷一つ負わずに倒すかなりの実力者
- ・ 髪、瞳が黒でそれ以外は全て白という人間離れた容姿をしている
- ・ 2話にて衣装を変更。現在は修道服を着用している
- ・ 西の戦の折腹部に重度の火傷を負う

『農家の少年』

- ・ 第1話のゲストキャラ
- ・ 南西の国の西端側の農村に住んでいる少年
- ・ 目つきが悪く短絡的、一見にはまともな人間には見えないが根が

真つ直ぐなだけで悪人ではない

- ・ 故郷の失う事に怒り、嘆き、戦場で戦おうと決意するが、それよりも大事な物を知り思い直す

- ・ 教会の少女とは唯一の同世代の知り合いであり、同時に身内以外の唯一顔見知りの異性でもある

『教会の少女』

・ 第2話のゲストキャラ

- ・ 南西の国、国境の町の教会に住む少女

- ・ 古くに両親を亡くし、教会に引き取られたせいで家族の情を理解できない

- ・ いよいよ戦火が広がり始め、両親の思いを理解できないままそれらが消えるのを恐れ、一人で両親の眠る町に戻る

- ・ 農家の少年は最も知る事の多い異性であり、プラスかマイナスかはさておき少女の裡で最も比重の重い人物の一人

- ・ きつとそう遠くない内に理解する日がくるだろう

『オッサン』

・ 第3話のゲストキャラ

- ・ 南西の国、国境の町で兵士相手に商売をするオッサン

- ・ 卑猥

- ・ 感情のまま動いているのか兵士を罵倒して追い回される事もよくあり、真面目に商売をするつもりがあるのかは疑問

- ・ 正体は西王国出身、かつ王直属部隊を束ねる最強の兵。尋常ならざる迅さと剣技、反射神経と洞察力に加え、空中でも構わず自由に動き回る平衡感覚とあらゆる武器を手広く扱う戦術の多様性を持ち、全大陸は当然として有史以来で数えても人類最強格に選ばれるほどの腕前を持っている

- ・ 自分の行った事に対する言い訳を嫌う。むしろ己の非を自覚しているほどに口を閉ざす

『盗賊の頭』

- ・ 最終話のゲストキャラと見せかけたかませ犬
- ・ 登場の予定はなかったが作劇上いた方が話を進めやすいため急遽配置

- ・ ついでに読者を騙してやろうゲヘという下心が作用し無駄なキヤラ付けをされた
- ・ 性癖が原因で国を追われた経験がある

『軍服の男』

- ・ 最終話のゲストキャラ
- ・ 凄まじい豪腕を振るう、軍服を纏った長身の男
- ・ 勇者達が立ち寄った町で治安維持を自ら進んで行っているらしい

とある荒れた街路にて

がたん、と車体が揺れて目を覚ます。

馬車を操るその温和そうな雰囲気の青年は、眠そうに欠伸をし、目元を擦りながら辺りを見渡すが、相も変わらず果てのない殺風景な草原と、整地がおろそかな一本道しか目に入らない。恐らくは馬車の車輪が何かに乗り上げたのだろう

と、馬車の後ろを覗き込んでみると、彼はまた、大きく欠伸を漏らす。

と、そこで彼は人の視線を感じて振り返った。くたびれた幌馬車の荷台から、黒いローブで全身を覆った人物が目元だけを覗かせて恨めしそうに彼を睨んでいる。彼と同じように寝ていたのか、それとも単に揺れに気分を害していただけなの

かはわからないが、とにかく機嫌を損ねたのは確かなようだった。

「ごめんごめん。この陽射しがあんまり気持ちいいものだから」

困ったように笑いながら頭を下げる彼に、黒ローブはふいつと顔を背ける。彼は苦笑しつつ前を向き、空を見上げた。

「でも今日は本当にいい天気だよ。次の村に着く頃には日は落ちてるだろうし、君も今のうちに出てきてこの陽射を味ってみたらどうだい？」

「断る」

顔も向けず、不機嫌を隠す気もない声色でにべもなく即答した。

「そう、残念。でもまあ安心しなよ。場所が場所だけあって随分と道が荒れてるけど、ここからはちゃんと手綱を握ってるから」

と、言った傍から前方に結構な深さの窪みを見つける。彼は両手でしっかりと握った手綱をくいと引いた。

その結果、馬は進路を微調整し、車輪は見事に窪みに直行。がたんと大きな音を立てて馬車が跳ね上がった。

「……」

「ごめん、今思い出したけど、僕は馬を御するのが下手なんだ」

刺々しい視線が突き刺さるのを感じて、頬をぼりぼりと掻きながら乾いた笑いを上げる。荷台の黒ローブは、片手で頭を抱えながら、初めて彼に顔を向けて言葉を放つ。

「……しっかりしろよ、『勇者様』」

彼……『勇者様』は、困ったように小さな苦笑いを返し、黒ローブは呆れたように大きな溜息をついた。

今から8年ほど前……『その日』と同時滅びた、かつて大陸を統治していた大国の暦では538年の秋、2月目の半ば頃。世界に突如として魔王が現れた。

何の前触れもなく現れた彼に全世界の魔物は支配された。凶暴化した野獣、神話にしか出てこないような怪物、どこからともなく現

れた誰も知らない異形達は、土地の大小、人の多寡に構わず、手当たり次第に人を襲った。

当然、人間もそれらに対抗したが、生憎と人は魔物よりも弱かった。それでいて魔物は、いくら倒してもどこからともなく沸いてくる。その上、倒すたびに強く、賢くなっていた。

最後の希望とばかりに魔王暗殺に精鋭を送り出す事6度。その全てが体の一部分のみにされ、魔王の署名が刻まれた状態で、滅ぼされた大国に代わり当時戦を主導していた各国の王に届けられた日、人類は一度生存を諦めた。

その日に、滅びが何の前触れもなく現れたのと同じように、突然一人の青年が現れた。

彼は剣一つで全ての魔物は生きたまま捻じ伏せ、ただ一人、一匹の命すらも奪う事なく。現れてから僅か一月で魔王を討ち、人類を救った。

その武勇に、人々は彼を勇者と呼び崇め、その偉業を称えて彼の現れた日を新たな新年と定めた。

現在は新暦1年。世界を救った勇者は、一度も血を浴びた事のない剣と帰路で得た古びた馬車だけを持って、まだ旅を続けている。

とある荒れた街路にて（後書き）

あー、始めまして。身内ではシリアスラブストーリーとディフェンスに定評のあると言われているネキアです。嘘です。そんな評価された事ないです。というかシリアスラブストーリーとか書いたことないです。全部嘘です。下手したら名前も嘘です。普段は納豆混ぜてごはんにかけて日常を過ごしています。

そんな私ですが今日このたび、まだ短い拙作ではあるものの、晴れて小説家になろうデビューを果たす事ができ

面倒になったのでとにかくこれからよろしくおねがいします。

大陸南西の農村にて：1

体がどうしようもなく重い。疲れているわけでもないのに剣の支え無しには歩けない。

原因は解りきっているほどに解っている。

咽せ返るような血の臭い。

吐き気を催す腐った肉の臭い。

床も壁も天井もなく視界を犯す赤い血の色。

道の至る所に無造作に放置され薄ら黒く変色した人骨。

かつて魔王に滅ぼされ、そのまま支配された大陸中央の大国の廃城内。その全てに満ちる死の気配が勇者の精神を犯していく。その凄惨さは聞こえるはずのない犠牲者の悲鳴まで聞こえてくるほどだ。喉の奥から込み上げる嘔吐感に負け、既に黄色い液体だけになった吐瀉物を床にぶちまけながら、それでも前へ歩き続ける。

全ては成すべき使命のために？

いいや、それはきつと違う。違っていて欲しい。

肩を預け、寄りかかるように玉座の間への扉を押し開ける。軋む音を引き連れて足を踏み入れた先に、それはいた。

血の赤、空の青、草の緑、大地の黄。生命を宿す全ての色彩の悉くを否定するような、全身が白と黒の怪人。世界を滅ぼそうとするイーヴルキング悪しき者たちの王が、玉座からこちらを見下ろしていた。

「……ふむ、成程。ここまで一人でやってくるといふから何者かと思えば、やはりそういうことか」

漆黒の瞳でこちらを射抜きながら、口元を手で抑えて笑いを漏らす。何を思っているのかは想像がついても、何で笑っているのかは理解できない。僕はそこに立ち尽くす。

ひとしきり笑った後、魔王は小さく息をついて立ち上がった。玉

座の横に掛けてあつた剣を抜き、ぞんざいに鞘を投げ捨てる。

「だがまあ、試させて貰うぞ勇者。お前が正しく勇者であるなら、私は容易く討ち果たして見せろ」

からからと剣先をならしながら玉座を降り、ゆつくりと歩み寄ってくる。

「これで最期だ。精々愉快に踊ろっ」

剣の間合いから数歩分を残して足を止め、ゆつくりと上げられた剣の切っ先が僕を捕らえた。

止まず込み上げてくる吐き気を無理矢理飲み下す。そして僕は、剣を握った両手を上げ。

「いつまで寝てるんだよ！」

怒号。それと、頭部を引っぱたかれる小気味のいい音で目が覚めた。欠伸をしながら目元を擦り、目の前にいた少年に手を上げる。

「やあ、おはよう」

「おはようって言われてももうお早くないんだよ！ あんたを起した時に『すぐ行くから先言ってて』って言われてから顔を洗って朝食とって、遅いなーと思いつながら父ちゃんの仕事の手伝い始め

て、苛立ちを超えて何かあったんじゃないかって心配になって様子を見に来るくらい時間が経ってるんだよ！　それが何で二度寝だ！　謝れ！　無駄な心配した俺に謝れ！」

「ごめんごめん。でもさあ」

「でも？」

首元を両手で掴まれながらも、ゆっくりと窓に目を向ける。窓枠から飛び込んでくるのは、抜けるような空の青さと慎ましい小鳥の囀り。青々茂る草木の香りだ。

自然の気配を胸いっぱい吸い込み、笑って少年に目を向ける。

「窓から差し込む陽射があんまり気持ちよかったから」

側頭部に青筋を立てて歯軋りをする少年の右手が上がり、再びすぱーんと小気味のいい音が響いた。

大陸南西の農村にて：2

「僕が悪かったからさ、明日からは本当にすぐ起きるから機嫌直してよ」

あいつが三、四歩分ほど後ろから出来もしないことを言うてくるのが聞こえた。俺は振り向かず、今日の収穫物を詰めた麻袋を肩に担ぎなおし、進む足を速めて置いていこうとするが、あいつも置いていかれないようにと同じくらい速度を上げる。最初から追いつくつもりがないだけで、まだ随分と余裕があるようだ。鬱憤を舌打ちに乗せつつも、仕方なく応える。

「それを聞くのはもう今日で9回目だし、その事だけでイラついてるんじゃないよ」

「じゃあ何で？」

「……寝ぼけて遅れてやってきた奴が欠伸交じりで俺よりも作業が捗ってるのが腹立たしいだけだ」

言いつつ、肩越しにあいつを覗き見る。あいつはきょとんとした顔で、俺の担いでいるのと同じ重さの麻袋を両脇に二つずつ、平然と抱えて歩いていた。

「いやあ、もう随分と慣れてきたからね。それに任されてるのは単純な力仕事だけで難しい事はやってないし」

「物心ついてからずっと家の手伝いしてる身としては、たった10日で追い抜かれるのは結構な屈辱なんだけどな」

10日……そう、もう10日になる。このへらへら笑う得体の知れないひよろつちい兄ちゃんが村にやってきて、あんな事が起きた

せいでうちの仕事を手伝うようになってから。

ふと、空を見上げる。抜けるような空は、あの日と同じ透き通るような青色だった。

それは10日前の事。

俺が親父と一緒に村からちょっと離れた街道沿いで山菜を集めていたら、道の向こうからあちこち軋む音が聞こえてきそうなオンボロ馬車がやってきた。

そっちの方向から村にやってくる客は珍しいので、二人してその馬車を眺めていると、御者台で手綱を握ってる男が暢気そうな顔で寝ているではないか。馬車が進んでいく先の道は少し外れると結構急な坂となっている。

危ないと思い、親父が一言声を掛けた。御者台にいたあいつは目を覚まし、俺達に挨拶をすると握った手綱をくいと引いた。そうするとそれまで真っ直ぐ道なりに進んでいた馬が急に踵を返し、真っ直ぐに坂へと歩き出し、あいつの「あれ？」という間の抜けた言葉と共に、そのまま馬車を引き連れて落ちていった。

「……10日経って見ても、こんな風にしみじみと思い出すような事じゃないなあ」

肩に担いだ麻袋を倉庫の棚に積みながら溜息をついた。

その後、馬や咄嗟に飛び降りたあいつは無事だったものの、坂道から転げ落ちた荷台はあちこちが壊れてしまった。人のいい親父はそれを修理してやると言い、さらにその間うちに泊めてやる事にした。そこであいつが、そこまでして貰うならしばらく農作業の手伝いでもさせてくださいと申し出た結果が現状だ。

畑仕事なんかしたことがないと言っていたが、このご時世にたった二人で旅をしていただけあって、力があるのか要領がいいのか。今ではご覧の通り、悔しさを噛み締めさせられているというわけだ。と、10日ぶりに思い出してみた所で、ついでにその事も思い出した。

「そついやもう10日になるけど、あの真つ黒は本当に放つといいのか？」

転がり落ちた馬車の中から真つ黒な布の塊が出てきた時は酷く驚いたものだ。服装もさることながら、顔も見えていないのに全身から怒気が立ち昇っているのがありありと見えたから。親父が馬車を修理してやると言った時にも、礼の一つも言わずに、あいつに向かつて「馬車が直る頃に戻る」と、地獄の底で揺らめくような恐ろしい声色で告げたきり早足に村から出て行ってしまった。

それを問われて、さしものこいつも眉根を顰めた。

「んー。あんまり大丈夫じゃないかもね。今回は流石に何回も嫌味を言われるかも」

「いやそつじゃなくて、身の危険とかだよ。この辺は魔獣の類は出ないけど、野犬くらいはうろついてるんだからあんまり一人にしておくのは危ないだろ」

「ああ、そつちは全然大丈夫。万が一にも何も起こったりしないよ」

笑いながらパタパタと左右に手を振る。その仕草には本当に、僅

かな一片の不安もない。実は仲が悪くて、あわよくば消えてしまえ等と薄らぐらい思惑を持っているのか、あるいは……。

「……あの黒いの、そんなに強いのか？」

「んー。まあ、間違いなくこの大陸で彼に喧嘩を売る野生動物は一匹もないね」

と、腋に抱えていた最後の麻袋を下ろしながら、冗談染みた言葉をさらっと告げてきた。それが本当かどうかは知らないが、目の前のそいつが本気でそれを言っているのは理解できて思わず息を呑んだ。

そつえばあの転がり落ちた荷台の中にいたのに、服に埃はついていても怪我をした様子はなかった。成る程、こいつの言が本当かどうかはともかくとしても、そんな身のこなしが可能なら野犬如きは一人だろうが素手だろうが追い払うのは容易いだろう。

「……俺も、そんなくらい強ければ」

そんな事を考えていたからか、つい口からそんな馬鹿な言葉が漏れた。

「君は強くなりたいのかい？」

やはりというか、あいつが不思議そうな声を上げる。そりゃそうだ。強さなんて物は普通片田舎の農家の倅が求める物じゃない。そう、普通なら。

それを態々説明するのも面倒だと思い、適当に誤魔化す言葉を捻り出そうとする。

「あの」

と、そこで俺のでもあいつのでもない声上がる。話題を切るのに丁度いい、とほっと一息つきつつそちらを見る。

そして、目に入った物を見て息を呑んだ。

そこにいたのは人。それも、遠くを見れば10や20ではなく、2、300は下らないだろう大勢が列を成しているのが薄らと見える。老若も男女も問わないそれは、旅行者の一団では説明がつかない。

「あんたらその数、まさか……」

それが意味する所を察して、意図せず上げた声が震えを帯びる。先頭に立っていた壮年の男は、無言のまま沈痛な面持ちで頷いた。

眩暈を感じて、背を倉庫の壁に預ける。それを見ていて、蚊帳の外で呆けた顔をしていたあいつも事情を察したようだった。

彼らは皆ここから更に西にある唯一の集落、隣国との国境の町の住人達。

魔王討伐のすぐ後、戦後復興の混乱に乗じて俺達の国に宣戦を布告した西の国から最も近い場所に住んでいた奴等だった。

大陸南西の農村にて・2（後書き）

書くのにつまるつまる。見切り発車はよくないですね。

大陸南西の農村にて：3

昼間晴れていたはずの空は月も星も、雲で遮られ夜闇は限りなく真つ黒に近い。未だに話し合いの続く集会所から蠟燭の明かりが漏れ、薄らと照らされた広場の隅でぼうつと空を見上げていた。

西の町の住民達は、やはり戦火に巻き込まれぬように避難してきた奴等だった。数を揃えるため急ぎ兵として徴用された若い男だけを残して逃れてきたのだという。

今までも5人、10人という少ない数で度々避難してきていたが、最後に残っていた住民が全て逃れてきたという事はつまり、いよいよもって戦が始まるという事だろう。……いや、ここまで来るのにかかる時間を考えれば、もう始まっただけもおかしくはない。

「……っ！」

心中に得体の知れない感情が湧き上がる。腹の奥から込み上げてきたそれは、体中を駆け巡って心臓を締め付ける。恐怖？ 憤怒？ 憎悪？ わからない。ただどうしても気持ち悪くて、それを誤魔化そうと両手で頭を掻き毟った。

「なんで……魔王がいなくなつて、平和になつたんじゃないのかよ……」

そう口にしながらも、どこかこうなつても当然かもしれないとも思っていた。

元々、人間同士の大きな争いが無かつたのは、100年近くも前、乱世の時代の最後の勝者となつた大陸中央の大国が睨みを効かせていたからだ。その国が魔王に滅ぼされ、直後は魔物との戦いでそれどころではなかつたが、その問題も解決すれば残るのはかつて争つ

ていたほぼ対等の力関係の国々だ。またかつてのように、世界の支配を求めて争いあう関係に戻るのも仕方ないのかもしれない。

「そんなわけあるかよ……！」

そう心中に浮かんだ思いを、拳を地面に叩きつけて否定する。

「そんな……そんなくだらない理由でなんで……」

衝撃による痺れと地面の冷たさが宿った握り拳で2度、3度と地面を殴りつける。それでも気は晴れず、何度も、何度も。

大きく一度地面を殴りつけ、息を吐く。熱を帯びた拳を胸に抱くと、自然と涙が零れてきた。袖で目元を拭いても、視界の歪みが納まらない。

『正直、町が陥落するのは時間の問題だろう』

集会所の会話を盗み聞きしている時に、西の町の町長だという男の憔悴した声を聞いた。

国境向こうの国は鉱山と鍛冶で成り立っている国だという。世界的に有名な武器、防具から、伝説や神話など実在が怪しいものを除けばその9割以上がその国で出来たものだ。西の町の町長は言った。同時に、それらの武器を使いこなす人材も抱え込んでいると。

魔王との戦いでダメージを受けているだろうと言っても、それは世界各国どこも同じ話だ。ならば戦力で勝る相手に同じ条件での戦いで勝てるはずが無い。また、同じ理由で他国の救援も望めないだろう。単独で戦っても勝てないなら、他国と徒党を組んで数で押すしかない。おそらくは東側の国境の向こうや、西の国を飛び越えた北側の国々ではもうその動きに入っているだろうが、到底間に合いはしないだろう。それどころか、この国が攻められている間に立ち

位置を整える時間が出来たと喜んでいいのかもしれない。

それに、この国が滅びるまで攻め続けるとは思っていないのかもしれない。今のうちに領土を増やし、他国に対して優位に立とうとしているだけで、精々町や村の二つ、三つも攻め落として終わるつもりなのだろう。そう思っている可能性もある。いや、実際そうなのかもしれない。まさか、大陸中が不安定なこの状況で国を滅ぼす事はしないだろうし、そこまでくれば侵略の途中で他国も止めに入るはずだ。

なんてことはない。戦はそこまで激化しない。戦は止まる。

俺達の住むこの故郷の村を含む、いくつかの町々を消し去るだけで

「……つく、うう、うう……」

頬を熱いものが伝っていく。全身を巡り胸を締め付けていた途方も無い悲哀が目から溢れて止まらない。

おそらく明日、西の町の住民達と合流してこの村を捨てて逃げ出す事になるだろう。生まれ育ち、これまでずっと暮らしてきて、これからずっとそうだと思っていたこの村を。

毎日毎日、親父の手伝いをするだけで、同年代の知り合い一人いない、何も無いつまらない村だが、それでも俺が今まで生きてきた全てだった。

まるで体が半分に裂かれるようだ。憤り、立ち上がりふざけるなと叫びたくても、足はぴくりとも動かず、喉から出てくるのは呻き声だけだった。

わかってしまっているんだ。もうどうしようもない事を。

まるで全身がバラバラにされた様。これを今までずっと味わい続け、対に自分の故郷を捨てさせられた西の町の住民達の心は、一体どれほど擦り切れてしまっているのだろう。考えたくない。これ以上の苦しみなどわからないし、わかりたくない。

ただ泣く。泣き続ける。

それだけしかできない、そうするしかない自分の無力さがどうしようもなく憎かった。

その時、ざつ、と。座り込んでいる俺の目の前に誰かが立った。顔を上げるが、ただでさえ暗いのに涙で歪んで何もわからない。袖で目元を拭って、もう一度見上げる。

「あんた……」

「やあ」

枯れ果て、ガラガラと鳴る俺の声にそいつはすつと手を上げながら小さく返した。

暗闇に紛れて表情も見えない。それでもなんとなく、そいつは困ったように笑っている気がした。

大陸南西の農村にて・3（後書き）

1話分には足りないかも知ないーと思っていたらまだ終わらなかったでござるの巻

大陸南西の農村にて：4

「何だよ……何か用かよ」

そっけなく言ったつもりが、実際に上がったのはしゃがれ裏返った奇妙な声だった事に、自分で驚いた。重ねて言えば鼻づまり声でもありこういう場面でなければ相手が噴出してもおかしくない情けない声だ。顔に血が集まってくるのを感じながら、表情を隠すついでにと袖で思いきり顔を擦る。

「……すぐここを発つ事にしたんだ。まだ戻ってきてない彼の事も探さなきゃならないし、時間が余り無いみたいだからね」

「……他の皆に手伝って貰ったらいいのに」

「それは……無理かなあ」

「そうか。お前ってそういう奴だったよな」

ずずっと鼻を嚙りながら答え、納得した。この10日間の間も、こいつは決して人の助けを借りようとしなかった。わからない事を尋ねたりはするものの、一人では困難な事に対して手を貸そうとしても笑いながら断るのだ。

何故そうするのかはわからないが、それがこいつという人間の在り方なんだろう。……それで、結局一人でやり遂げてしまうから気に入らなかったのだが。

「じゃ、僕はそろそろ行くよ。今まで楽しかった。ありがとう」

「……ああ。じゃあな」

立ち上がり、無理矢理に笑う。
うまく出来ているかはわからないが。

この暗闇の中見えてるかわからないが。

きつとこいつは今、目の前で笑って去ろうとしてるだろうから。

俺は、ぎこちなくても笑って、そいつの差し出してきた手を掴み返した

……その時、ふと疑問が脳裏を過ぎった。

「そついやどうして俺がここにいてわかったんだ？」

親父達大人は今集会所で話し合っていて俺の居場所など知らないはずだ。まだ詳しい話を知らない子供なら日が落ちる前に外を歩いていた俺を見たかもしれないが、もう子供は寝ている時間だ。途中で話し合いから離脱してきた大人達か？ いや、そういう連中は皆子供の世話なり何なりの理由があって抜けてきたんだ。そんな忙しの中で俺がどこに行くのかわざわざみてる奴がいるだろうか？ それに、たとえ偶然で誰か見えて、それを覚えていたとしてもここは場所が場所だ。好き好んでこつち側に来る奴などいない、見間違いだろう。そう思うのが普通だ。

「あー……いやその、実はね。集会所で話を聞いた後から探してたけどどうにも見つからない内にこんな真っ暗になっちゃって。悪いと思っただけど、君のお父さんに伝言を頼んで出て行こうとしたんだ。それで馬車に乗って村から出ようとしたんだけど、すぐそこで人影を見つけたから君じゃないかと思ってここに来たんだ」

指差した方向に目を向けると、村を抜ける道の真ん中に馬車らしき大きな影がある。

「ああ、そう……」

なんて事はない。ただの偶然だった。

そう、納得しかけた。

「じゃあ、またいつか、どこかで会えるといいね」
「待てよ」

それは去ろうとするそいつを引き止める言葉ではなく、沸いて出た疑問に思わず口を突いたものだったが、結果的にそいつは背を向けたまま立ち止まった。

おかしい。それは理屈に合わない。

俺は、誰にも会いたくなかった。だから、わざわざ誰も来ない、来たがらないような場所を選んだ。そりゃそうだ。今の状況で、こっち側に好んで来たがる奴がいるわけない。ほんの少しでもこちら側からは離れたいはずだ。

そして、その誰もこっちに来たがらないのと同じ理由で、村を出ようとして道の途中で偶然俺を見かけるなんて有り得ない。

「待てよ、おかしいだろ。だって」

だって、ここは。
だって、そっちは。

「そっちは西に抜ける道、だ……」

はつきりと声に出した途端に、合点がいった。

『 そっちの方向から村にやってくる客は珍しい 』

それはそうだ。わざわざ安全な方から戦闘地域側に向かって来るような物好きはいない。商売目的の行商人ですら来なくなって久しい。なのにこいつは、東の街道を抜けて村に来た。

つまりこいつは……いや、こいつらは、最初からそのつもりで。

「西を……違う、戦場を目指してたのか、あんた達は……」

そいつは振り向かなかった。ただ、背を向けたまま小さく頷いた。信じられなかった。事実を目の前にしても、この男と戦という言葉がどうしても結びつかない。何時何処を思い返しても笑っていた記憶しかないこの男が、一体どんな理由で戦場へ向かうのか。

尋ねたい。だが恐らく聞いても答えないだろう。また困ったように苦笑して、そのまま去っていつてしまうのが目に見える。

黙っていると、あいつが足を踏み出した。あいつの背中が一步、また一步と離れて行く。

「待ってくれ！」

自分でもわけのわからぬ内に思わずそんな叫びが響いていた。足を止め、しかし背を向けたままの奴の後ろで俺は震える胸を押さえ込もうと唾を飲む。

「俺も一緒に連れてってくれ……頼む」

声の震えは上手く隠せた……と思う。

「一応聞いておくよ。君は、そこへ行つてどうするんだい？」

「俺も戦う。このままここを……他所の奴等の好きにさせてたまるか！」

「駄目だ。連れて行けない」

もう答えがわかっていたかのように……いや、この状況で俺が言

い出す事なんか誰でもわかるか。一息の間もおかずに奴は俺の願いを切り捨てた。

「どうしてだよ！ 俺が弱いからか？！ ガキだからか？！ そりゃ俺なんかが行っちゃったってどうにもならないさ！ でも何もしないで逃げ出すなんて耐えられないんだよ！ 考えただけでも悔しさと自己嫌悪で押し潰されそうだ！ 頼むよ！」

必死に食い下がる。声に嗚咽が混じるのも構わずに。情けなくともみつともなくても、とにかくじっとしているのだけは嫌だった。

「僕が君を連れて行かない理由はそんなんじゃない」

対照的に、あいつは静かだった。その声色には、奴の印象からは全く似つかない冷たさすら感じる。顔が見えなくても笑っているのが見えてた表情が見えない。

空気の変わる気配に息を呑む。そしてあいつはその先を口にする。

「僕は、殺すのが嫌いだ」

何を言っているのかわからず、おもわず呆けた声を上げそうになる。いや、実際上げたかもしれない。

そんな俺に気付いているのかいないのか、あいつは構わずにそのまま続けた。

「自分がやるのは勿論、他の誰かがそうするのも嫌だ。君は戦場へ敵を殺しに行くんだろ？ だったら君は僕の敵だ。だから連れて行けない」

はあ？ と、今度は確実に声が漏れた。

何を言っているのかわからない。思わず聞き間違いかと思うほどに馬鹿げている。

「そんな……バカな理由……じゃあお前は何で行くんだよ……」

「僕は嫌なんだ。人を殺さなくちゃ助からない人がいるなんて事はそんなのは間違ってる。誰も殺さずに誰もが幸せになれるはずだ。それが間違ってるなら僕が正しくしてやる。そのために僕は、まだ旅を続けてるんだ」

馬鹿げている。馬鹿げすぎている。「みんな仲良く、喧嘩しないで」なんて、そんな戯言を言うのは純真な子供くらいだ。いい大人が……それも、今から戦地に行く人間が本気で言う事じゃない。

でも、その戯言は今のあいつの雰囲気とは裏腹に、あいつの印象にこれ以上ないほど似合っていて、それを本気で言っているんだと確信ができた。

あいつが馬車に向かって歩いていく。声は出ない。足も動かない。あんな馬鹿げた、まるで世界を救おうとする勇者みたいな理想に押されて、身動き一つ取る事ができない。

とうとうあいつは馬車に乗り、手綱を握る。馬が小さく嘶き動き出した馬車の上で、最後にこちらに顔を向けた。

「……僕は村を出ようとする前に、君が言ったような事を君のお父さんに尋ねたんだ。あの人は凄い人だ。君も明日にでも話してみるといい。君ならきっと解るよ」

去っていく馬車の上で、あいつはそう言いながらたぶん、いつもの笑顔に戻っていた。

大陸南西の農村にて：4（後書き）

ちよつと（この勇者）何言ってるかわかんないです

大陸南西の農村にて：終

「……つと」

灼けるような陽の光の下、両手で抱えていた麻袋を馬車の荷台に置いて汗を拭った。

倉にある作物の中である程度日持ちするものはこれで最後だ。残りは今日使って、余った分はそのまま置いていく事になる。

「……やっぱり、納得はできねえなあ……」

心の内に靄がかかっているような不快感に、空を仰いで大きく溜息をついた。

やはりあの時、無理矢理にでもついて行くべきだったんじゃないだろうか？ 急いでいたあいつの事だ。荷台にでもかじりついていればその内諦めてそのまま連れて行ってくれたかもしれない。

「んな事今更行っても仕方ねーか……」

全く持つてその通りだ。一片の余地もなく完璧に正論だ。

それでも感情は言う事を聞かない。これで良かったのか、ともうどうしようもない事をいつまでも責め立て続ける。

「おい、何をそんな所でボーっと突っ立ってんだ。終わったなら母ちゃんの所行って飯の支度でも手伝え」

背後から聞きなれた野太い声が響く。親父の声だ。振り向くとそこにはやはり親父が似合っていない髭を弄りながらむすつとこちらを見てきている。一見睨んでるように見えるが、目つきが悪いだけ

でそんな事は別にない。

「ちょっと考え事してただけだよ。今行くって」

そう言つと親父の人相の悪い顔が更に怪訝そつに歪んだ。

「お前が考え事だ？ 似合わない真似すんなよ気持ち悪い」

「気持ち……言いすぎだろ！ 俺だつてたまには考え事くらいするわ！ 何でそこまで言われなきゃならねーんだよ！」

「だつてお前ほら、お前は俺の息子だし」

「……嫌に説得力がある事言つなよ」

馬鹿にしているのか自虐なのか……いや、口髭をいじりながらちよつといい顔しているのを見る限りは単純に事実を指摘しているつもりなのだろう。

俺は再度溜息をついた。この人はきつと、今この状況の事すら何も考えては。

『君も明日にでも話してみるといい』

そこで、去り際のあいつの台詞が脳裏に蘇る。

きつと解る。あいつはそう言っていたが、今こうして見ている限りではとてもそうとは思えない。だが、あいつが嘘を言うとも思えない。……勘違いしたり誤魔化されたりはするかもしれないが。

まあ、それでも何か減るわけでもなし。とりあえず聞いてみるのもいいかもしれない。

「なあ親父」

「ん？ どうした？」

「昨日、あいつと話したろ？ その時あいつに何て言ったんだ」

「あいつ……ああ、あの勇者兄ちゃんか」

急に聞き慣れない呼び方をする。あいつ、俺だけじゃなくて親父にもあんな話したのか？

「あいつがすぐ出てくつていうから馬を馬車に繋ぐの手伝ってやってたらよ、俺の態度が気になってたのか唐突に『この村がなくなるかもしれないのに平気なんですか』ってな。妙な奴だよなあいつ」
「妙っていつか……うん、まあ今まさに村を追われる人間にする質問にしては非常識だよな……」

とは言いながらも、少しあいつの気持ちもわかる気がする。一晩経つてようやく落ち着いてきて気付いたが、目の前にいるこの親父は余りにも平然としている。

俺よりも長くこの村で生きてきて、俺よりも深く愛着を持っているはずなのに……。

「どうしてそんな……平気なのか？ 悔しくないのかよ」
「んなわけあるかアホ。こちらら43年住んでんだ。目の前にお隣さんの兵士が立ってたらすぐにでも縊り殺してやるよ」

顔色一つ変えずにそう言った。その言葉に嘘はない……ように見える。

だからこそ余計にわからない。それほどまでに大事なのに、どうしてそんな……。

「じゃあ、なんでだよ？ ここを護ろうとか、戦おうとか思わないのか？」

「んー。まあ、これは人前で言う事じゃないから、この話は誰にもすんなよ？」

真顔で発せられた前置きに思わず喉がごくりと鳴った。俺はただ黙って頷く。親父は髭を弄っていた手を胸元で組み、ゆっくりを口を開いて

「俺は軍人じゃないからだ。以上」

そしてたった一言で口を閉じた。

逆に、俺は開いた口が塞がらなかった。

「何だよそれ、そんな理由で……」

「だってそうだろ。村がなくなっても、俺達は死なんし」

さらつと核心を突きつつ、更にそのまま続けていく。

「そもそも今戦ってる軍人だって、ありや国の土地を護るために戦ってるんじゃないよ。そこに住む人を護る為に戦ってた。そんな所に百姓が現れて『生まれた村がなくなるのが嫌でした！』とか言ってへっぴり腰で敵陣に突っ込んで死んだら飲んでるお茶噴出されちまうわ」

親父はそう言って笑った。確かにそうかもしれない。それが正しいんだろう。

けど、理解はできてもとても納得できるものじゃない。

そんな俺の顔を見ていたのか、親父は気まずそうな顔で溜息をつく。そしていくらか迷うように唸る。

「それともう一つ。これはまあ、ただの俺の感情なんだが……」

この場に及んでも、尚言い淀む。何とも言えないような顔を逸ら

し、そつぽを向きながら親父は言った。

「俺が人を殺すのを喜んで欲しくないんだよ」

もう何度も呆けさせられ、そろそろ慣れる頃かと思ったがそんな事はなく、むしろ今までで一番、親父が何を言っているのかわからなくなった。

「戦うつてのは、相手を殺すつて事だ。もしくは殺されるかだな。死んだら終わりだから、死ななかつた場合の話をするぞ。戦から帰つてきた俺をお前や村の連中は笑つたり泣いたりしながら迎え入れてくれるだろう。よく村のために戦つてくれたとか、さぞや盛大に持て成してしてくれるだろうよ。だけど、村を護るために戦つたつて事は要するに、村と人殺しを天秤にかけて村を取つたつて事だ。んでそれを賛美するつて事は凄まじく遠まわしにだが、殺人の肯定になる。毎日日の下で鋤もつて土を耕してた奴等が、血煙の中剣で首を刎ねてきた男を持ち上げるようになるのが、俺は怖い」

言葉が出てこない。

切羽詰りすぎて言われるまで考えもしなかつたが、そりや確かに村を護る……戦で勝つつてのは、相手を殺してくるという事だ。

俺が戦に行つて無事帰つてきた時、親父の言う通り、きつとみんな俺を歓迎してくれるだろう。よくやったとか褒めてくれるだろう。その時、敵憎しで戦に行つた俺は、皆の目を真っ直ぐ見返す事ができるだろうか。純粹に俺のやった事を褒めてくれる皆を、前と変わらずに見てやる事ができるだろうか。

「どつちかつて言えば、俺にとつちやこつちの甘つたれた我俣が本音だ。それを耐え忍んで戦つてる奴等がいるのに情けない事だとは思つが、俺はお前らに暢気な百姓のままできて欲しいんだ。村なん

かよりも、そっちの方が大切なんだよ。住処と違って、平穏な心の持ちようは取り返すのが難しすぎる」

そう言い、最後にあーっと苛立たしげに唸りながら俺に背を向け、片手で髪を掻き回した。

親父の背中を見つめながら、俺は酷く冷めた気持ちになっていた。静かと言い換えてもいい。何か、心の内でささくれだっていたものが抜け落ちたような不思議な、けして悪くはない気分。

『君ならきつと解るよ』

ああ、あいつの言う通りだった。

親父が何を考えてるのか、確かに解った。俺なんかと違って、大切な物の順番をちゃんとわかってるんだ。

「……くだらねえ事話してる間に随分時間が立っちまったな。もう出発の準備が終わっちまうぞ」

気恥ずかしいのか、顔を見られないよう背中越しに行ってそのまま足早に去っていく。

「親父」

それに声を掛けると、親父が立ち止まりその仏頂面を肩越しに半分だけ向けてくる。

俺は空を見上げる。いやに明るい空。雲ひとつない、眩い快晴。

「今日ってこんなにいい天気だったっけか」

朝から何も変わってないはずの、でもどこか変わって見えた空を

見上げながら、俺は親父にそう尋ねた。

大陸南西の農村にて：終（後書き）

やけに遅れたのは別に一話の締めくくりに時間をかけたわけじゃなくて、盆で怠けてたのと書くのに詰まっただけです。しかも前話のシメであんな事言っただのに何て言わせるのか細かいとこ迷いすぎでグダグダ。

2話はもうちょっとよく考えてからの投稿になるかもしれません。

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：1

町を捨てる。あの日の朝、神父様がそう言った。

あたしは信じたくなかった。そうしなきゃならない、そうせざるを得ないのはわかってるけど、あたしはこの町で生まれたか、絶対にここから離れたくなかった。

だから、抜け出した。町の皆のところへ一度行ってからこっそり隠れば、見当たらなくても他の人達と一緒にいると思うはず。移動の初日は魔獣の生息域を抜ける為に夜も休まない。1日半も気付かれなければ、もうあたしがいない事に気付いても戻ってはこれない。大勢では時間がかかり、町を攻め落とした敵軍に捕まる可能性が高くなるし、少人数なら道中で魔獣の餌食だ。

そんな危険を冒してまであたし一人を探したりしない。半日分ほど歩いた所で隙を見て森の茂みに入って、そのまま夜を明かした。更に半日、誰も探しにこないのを確認してから街道を戻り始める。馬鹿な事をしてるってわかった。いらない危険を被りに行ってるって。

でも、それは本当に頭でわかってただけで、実感としては理解できていなかった。

『ウオオーーン……』

「っ……！」

近い。逃げた時に臭いを覚えられたんだろうか。

今すぐ走って逃げるべき。そう解っていても、もう息が続かない。もう足が動かない。微かな希望に賭けて必死に体の震えを押さえ、息を潜ませるしかできない。

やっぱり、やめておけばよかったのかな。

怖い、怖い。怖くてたまらない。死が、すぐ背後に迫っているのが今なら解る。

ぼろぼろと、押し殺した泣き声の代わりに涙が止まらず溢れてくる。

死にたくない、まだこんな所で死にたくない。

お願いだから、あたしを見つけないで。

がさり。

そんな草木を掻き分ける音と、湿った獣の息遣いによって、祈りはあつさりと踏み躪られた。

野犬がいる。四足で立った背の高さが大人の腰元まである。くすんだ灰色の毛並みの間から餓えてぎらついた目と黄ばんだ牙が覗いている。

魔王がいなくなり大人しくなった魔物や魔獣に変わり、異常成長した体躯のままに魔王の支配から解かれ野生に戻される事により、現在における人類の最大の敵となったもの。

もう身を隠すとか息を潜めるとか、そういう段階じゃない。今逃げなきゃ、すぐ逃げなきゃ、殺される。

それでも、体は動かない。あたしと野犬の間には遮蔽物はひとつもない。背を向ける素振りを見せただけで、一呼吸もしない間に距離を詰められ息の根を止められる。もう、少しでも命を長引かせる方法は喉笛を噛み千切られる瞬間までそこでじっと立ち止まってる事だけ。それは同時に命を諦める事でもあったが、それでも動いて一瞬後に死んでいるのが怖くて、どうしようもなかった。

ぐるると唸り、口の端から涎を零しながら野犬が少しずつ迫ってくる。

一步、血に餓えた息遣いが辺りに響き。

一步、獣臭が鼻先を掠め。

そして一步。伸ばした鼻先が顔に触れた。

いよいよ、命が終わる。野犬の顎が粘ついた音を立てて開かれるのを聞き、耐え切れずきゅっと瞼を閉じた。

そして、首筋に鋭く暖かい牙が触れた時だろうか。

さわ、とほんの僅かな木々のざわめきが響いた。同時に、首に触れていた牙が離れ、獣の咆哮が轟く。獲物を追いつ立てる物ではない、殺意と戦意を滾らせたそれに思わず瞼を上げ、それを見た。

真つ黒な影が凄まじい速さで地面の上を滑っている。速すぎて形も掴めないが、たぶん四足の生き物で、後ろ足だけで走っているのだと思う。野犬はこれに反応して私から牙を退けたのだ。

体を伏せた野犬が、それに向かって駆ける。速い。目の前にいたはずのそれが、身を縮ませた次の瞬間にはもう五歩ほど先まで跳んでいた。僅か二歩目にして最高速に達した野犬が、その勢いを乗せたまま顎を開き、その黒い影の首筋を狙う。

その瞬間、影が消え、鈍い音と共に野犬の頭が少量の血を周囲に舞わせつつ跳ね上がった。

……いや、消えたというのは間違いだ。消えたはずの黒い影は、上体を起こされた野犬の前で足を振り上げている。たぶん、野犬と同じ事をやったのだろう。体を沈ませ、その反動で野犬の頭を蹴り上げた。目で追うのがやっとの野犬よりも速く、目にも留まらぬ迅速さで。

振り上げた足を引き、そのまま影は横に廻る。そのまま今まで隠れていた前足……腕？ を、浮き上がった野犬の胸元に叩き付けた。何かが碎け散る音と、苦痛に喘ぐ悲鳴を撒き散らしながら、野犬はあたしのすぐ横の太木に打ち付けられた。……のだと、思う。

曖昧なのは、つい数秒前に自分の命を奪おうとしていたそれがすぐ近くにいるというのにも関わらず、あたしは全く違う物を見ていたからだ。

影が翔ぶ。その勢いに反して、ふわりとでも形容されるような優雅さであたし……いや、あたしの横の野犬に迫る。それによって、

遠さと尋常ならざる迅さで目に映らなかつた黒い影の姿を、あたしの目はようやく捕らえる事ができた。

それは、頭から足先までを隠せるような黒いローブを被った人間だった。巨大な野犬を生身で吹き飛ばすとは思えないほど体は細く、ローブの隙間からは腰まで届くような黒い髪が伸びている。

宙を舞う黒がぐりんと体を捻る。先程野犬を吹き飛ばしたあの回転を、今度は飛びながら、縦にやっているのだ。その勢いで頭部を覆っていた布が外れ、漆黒に輝く絹糸が溢れ出した。

もうそれは私の眼前にまで迫っていた。黒色はローブから細く長い足を伸ばし、回転の勢いを全て載せられた右の爪先は轟風が吹き抜けるような音を立てて、野犬の鼻先を掠めた。外れた？ いや、違う。黒の動きに戸惑いがない。

「っふ」

小さく短く、息を漏らす音が聞こえた。

瞬間、黒い影はその場で体の軋む音を立てながら、更に一回転半廻り、雷鳴のような爆音と共に左踵が野犬の頭を砕いていた。

野犬の頭部から舞った血が頬を汚す。でも、あたしはそんなもの全く気にならずにただそれに見入っていた。

一言で言えばそれは、果てしなく漆黒くて、限りなく純白しろかった。腰より下まで覆い隠す真っ直ぐな長髪と、こちらを射抜いてくる冷たい瞳は煌く黒を。ローブから覗く細く艶かしい肢体は輝くような白を携えている。そして、その体の全てが、余すところなく完璧に均整を取り、現実離れして美しく、まるで最初から美しくなるように作られたよう。

そう、信じられない事に目の前で野犬の頭を踏み潰しているそれは、異常なまでに美しい少女だった。

「おい、娘」

「ひゃ、ひゃい！」

その、芸術品のような姿と砕かれた獣の頭部のアンバランスさ。そして脅威が去った事への安心に放心していたせいで妙な声が上がリ、急速に顔に熱を持つのが感じられる。俯くこちらにも全く構わず、その少女はすつと、純白の腕を伸ばしてくる。その肌の艶かしさに思わず息が漏れた。少女は血の気の通わぬ、白く艶のある唇を開き、やや低く、しかしよく響く声で言った。

「ここがどこだかわからん。村まで案内しろ」

チュンチュン、と小鳥の鳴き声が響いた。

……その、私の命を救ってくれた。

漆黒く。

純白く。

強く。

美しい、その少女は余りにも自信満々な迷子だった。

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：1（後書き）

1話も終わったのでややペースダウン

戦闘書くの（こんな短いのに）ちようつかれる……しばらくやらない……

誤字修正しました

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：2（前書き）

前話で付け忘れた残虐描写タグ付加
（追記：付け忘れてた…）

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：2

「この道か？」

「はい、ここをまっすぐ行けば着くはずです」

鬱蒼と緑の生い茂る森を抜けて、ようやく町と隣村を繋ぐ街道まで戻ってきた。あの野犬に見つかったときに無我夢中で走ったせいで方向感覚が狂ってしまい、空はもう夕暮れを越して夜闇に染まり始めている。

とりあえずは森で夜を明かす事にならなくて一安心という所だ。いくら助かったとはいえ、あんな事があった後で森の中夜を明かすのは流石に無理だ。今だって腰が抜けて、自分より背が低くて体の細い女の子に背負って貰っている有様なのに、そんな事をしたら抜けた腰がそのまま戻らなくなりそう。

「おい、そろそろ下ろすぞ」

「あ、はい。ごめんなさい」

やや疲れの色を含んだ声に、慌てて黒の背中から降りる。久々に地についた足はまだややふらつくものの、立って歩くくらいはなんとかできるみたいだ。

黒さんというのはこの女の子の事だ。名前を聞いたら『好きに呼べ』と言われたけど、何も考え付かなかったので安易にイメージの色である黒と呼ぶ事にした。そう言った時は凄く不機嫌そうな顔だったけど、思い返せばあった時から今までずっとそういう表情だったので、たぶん怒っているわけじゃないと思う。

今も尚仏頂面の黒さんは、ずっと荷物を抱えていてさすがに疲れたのか、両手の指を組んでぐっと伸びをしている。ずり落ちた袖口から露になった真つ白な腕や、髪の間から覗く首筋が眩しくて直

視できない。なんというか、女として自信を無くしそうになるし、女なのに妙な気分になりそうで。

「さて、今日はここで夜を明かすのだったな。それでは早速」

そう言いながら、黒さんはぐいつと掌に巻きつけられた木の蔓を引つ張り、その先に括られていた物があたしの目の前に躍り出た。これもまた、理由はまったく別だが、個人的には目を逸らしたい代物だった。

黒さんは蔓を外して地面に放り捨てながら言う。

「捌くか」

それはあの時にあたしを追い回して黒さんに蹴り潰された野犬の死体だった。

「……本当に食べるんですか？ これ」

「無論だ。森で過ごした数日の間、エサに夢中で私が近づく気配に気付かずにいてくれた生物はこいつだけだったからな。いい加減草や木の実だけの食事は飽きた。是が非でも肉を食う」

「エサってちょっと……」

あたしの些細な抗議の声も気にせずに黒さんは野犬……いや、でっかい犬肉の前に屈み込み、何か準備を始めた。ついさっき食べられそうになってた相手を食べるというのは、やはりなんとも言えない妙な気分になる。

「それで、どうやって捌くんですか？ 黒さんも刃物持ってませんよね。ていうか火もないし生で食べるんですか？」

とはいえ、それと空腹とは別の問題だ。1日半ほど前に慎ましい昼食をしたつきり、森の中でたまたま見かけた果物をいくつか食べただけの胃は目の前の食料を前に嬉しい悲鳴を上げていた。それに魔王が現れた8年前以来、獣が凶暴化したせいで獣が中々狩れなくなり、新鮮な肉が手に入る事はほとんど無くなって、値段も果てしなく高騰していた。魔王が倒れたという報せが入ったときのお祝いですら出されたのはお湯で戻した小さな干し肉のスープだったので、こんな新鮮で大きな肉は子供の時以来だ。

黒さんの横に屈みこんで手元を覗き見る。そして思わず眉を顰めた。黒さんは人差し指で地面にラクガキをしていた。ラクガキとは言っても、描いているのは複雑な図形だ。大きな円の中に一片を背中合わせにした二つの三角形……いや、これは二つの頂点から斜めに線を入れた四角形？ を描き、最初に描いた円の周りに一回り大きな円を描き、二つの円の間の空間に細かい図をたくさん書き込んでいる。文字のようにも見えるが、小さくて読みづらいのを差し引いても見覚えのないものだ。少なくともこの大陸で使われている公用語ではない……はず。読み書きが完璧というわけではないので自信はないが、多分。きつとそうだ。

「それ何ですか？」

「描画と古語を用いた術式による意味の強制付与、もしくは状態の再設定。そういう細かい区分は色々あるが、まあ大雑把に言えば魔法の一種だ」

そう言いながら指を地面から離し、完成した図形の上に手を翳して瞼を閉じた。

「えっ……」

目の前の光景に思わず声が漏れる。

地面に描かれた図形が剥がれ上がり宙に浮いた。浮かび上がった図形に黒さんが手を触れると、触れた部分から光が走り光沢を帯び、それが全体に回った所で触れている指をくいと捻った。輝く図形は捻れ、細く長く伸び一本の線となる。指先から伸びるそれを、横たわる犬の首筋に押し付ける。光は首をぐるりと回り円を描くと、そのまま首の中へと溶け込んでいった。

「え？ え？ どういうこと？」

何が起こってるのかさっぱりわからずに問いたさすが、黒さんは黙って光を失った指先を犬の首筋に当て続けている。

と、そこで犬の首筋に音もなく赤い筋が現れた。また何か不可思議な事が起こったのかと思えば、違った。ただ犬の首の皮がひとりでに、真っ直ぐ綺麗に裂けてそこから血が漏れ出てきただけだ。肉が裂ければ血が出るのは至極当然の事だ。

「な、ななな何がどうなって……」

が、そもそも裂ける理由がないのだからやはりこれは不可思議な事なのだろう。大いに取り乱しながら、裂けた首筋から指を突っ込んでべりべりと皮を剥がし始めた黒さんを問いたです。

「さっき言っただろう。切断を意味する図形に魔力を通し、実のないう形を作って流し込み『切れている』という状態を押し付けた。だから切れた。そういうことだ」

「そ、そんな魔法みたいじゃないですか！」

「最初に魔法だと言っただろう。そんな事よりこれはお前がやれ。私は火を起こす」

慌てふためくあたしに、黒さんはそう言って赤黒い胸筋を露にし

た犬肉を差し出す。潰れた頭部がこちらを向いているのが非常に気味が悪い。あたしはできるだけそれを見ないようにしながら生暖かい皮を掴んで引き剥がし始める。黒さんかというと、また地面に絵を描き始めていた。さっきの図形よりも二周りほど大きな円の周囲に、頂点が外側を向いた三角形が八つ。火を起こすと言っていたからたぶんあれは太陽なのだろう。ベリベリと犬の皮を剥がしながら

「……黒さんはあんなに強いのに魔法使いだっतんですね」

「別に魔導師というわけではない。ただそれも使えるというだけだ一番得手なのは剣だが、剣士というわけでもないしな」

「剣も使えるんですか？ 凄いなあ。逆に黒さんにできない事って何かあるんですか？ あ、一人で歩く事以外で」

「人を方向音痴のように言うな。ただ私の行く先に目的地がなかっただけだ」

そんな話を話しながらお互い作業を続けていった。魔法の完成前に火をつける先を用意するのを忘れたり、皮を剥いだ肉を切り分けるのに魔法が使えなかったり（このぶ厚さの物を切ろうとすると図形の大きさが凄い事になって、時間も真夜中までかかるらしい。だから不便でいざという時に役に立たないと愚痴を漏らしていた）で結局二人で力任せに引き千切ったりしていたおかげで随分と時間が掛かったが、それでも眠くなる前にはなんとか直火で炙った香ばしい腿肉を一つずつ手にする事ができた。

「いただきます」

まだ湯気の立ち昇るそれに恐る恐る歯を立て、噛み千切り咀嚼する。口と鼻に、むせ返るほど重厚な味と香気が充満する。そのなんとも言えない感覚に、思わず二人は息を呑んだ。

しばしの沈黙。そしてその後、先に口を開いたのは黒さんの方で

あつた。

「……血の味と血の香りと、更に血の味と香りがするな」

「血抜き……してませんでしたもんね……それに物凄く硬いです…

…」

「元々野生の猛獣だったからな……」

口内に残る血の塊のような肉片。それをどうしようかしばらく悩んでいたが……せつかくの食べ物を粗末にするわけにはいかず、どちらから言つともなく黙って食事を再開した。

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：2（後書き）

お料理教室とガールズトークで1話を消費して話が進まないでござ
るの巻

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：3（前書き）

中々話が進まなくて困る

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：3

その後、虫が湧くので残った犬肉を森の中へ放り込み、少し離れた場所で夜を明かした。『脳があつて野生に生きてる獣で私の近くに寄ってくる奴はいない』と言う黒さんの言葉は流石に少し信じ難く、寝るまでにずいぶんとびくつかせて貰ったけど、実際に朝起きるまで何も起こらなかった。それどころか野外で何の用意もなく寝ていたというのに虫刺され一つなく、一体人間以外にはこの人がどう見えているのか非常に興味をそそられた。

そして朝起きてからは昨日焼いた残りの冷めた上に凄まじい血の味のする肉を食べて町に向かって歩き出した。歩いて直ぐ見覚えのある景色だと確認して、およそ半日分の計算が合っていると確信した。

そして、そこから半日。……と、控えめにも少しとは言い難い時間を経ち。

「……おい、半日で着くんじゃなかったのか」

既に真っ暗になって久しい街道で、月明かりを頼りに先を歩いている黒さんが不満を大いに孕んだ声でそう告げた。苛立っているのか疲れているのか、こちらに顔を向けようともしていない。私はそれをちらりと見て、また視線を地面に落として言い返す。

「ええ、黒さんが道なりにまっすぐ歩いてくれればそのはずだったんですけどね」

「私は真っ直ぐ歩いていただろう」

「ええ、道が曲がっていろいろが迷わず構わず歩いて行ったり、獣道を街道と間違つて進んで行ったりそりやもう驚くほどまっすぐ歩いていましたね」

「他人のせいにするな」

「それそのまま返していいですか？」

久しぶりの言葉の応酬。その最後に二人がほぼ同時に溜息をつく
と、また辺りは静寂に包まれた。

疲労感が結構凄い。丸一日歩き通しというのが予想よりもずっと
大変な事だったが、それ以上に一連の騒ぎで無駄に使った体力と、
そのせいであと少しで着くのか、夜明けまで歩くような事になるの
か感覚狂ってしまったのがとても精神的に応えている。それともう
一つ重要なのは喉だ。街道を歩き始めてから森の中で果物を取った
りすることができないので水分を取る事ができない。空腹もないで
はないが、それよりもとにかく水が欲しい。乾いた喉を潤したいし、
血で塗れた体を洗い流したい。

町に着いたらどこかの家を借りて水を貰おう。町を出てから二日
と少し。水も腐ってはいないはずだ。大事を取って飲む用に少し沸
かして残りで体を洗い流そう。それで久しぶりに血の臭いを忘れて
寝る事が出来る。

「おお、開けた場所が見えたぞ。こつちだな」

そんな事を考えている隙に前からそんな声が響いてきた。

（また勝手な思い込みで適当な方向に進もうとして）

ややうんざりしながらそう思いつつ、声を掛けようと顔を上げた。
……が、言葉は喉に詰まって出てこなかった。自分の見ている光
景に思わず二度ほど目を擦り、よく見直す。

ざわめく木の枝の上に、塔のような物の影が聳えている。その高
さはかなり高く、それほどの建物をあたしは一つしか知らない。一
つしか知らないが、その分よくその事を知っている。だから、そ

の影の大きさから、それがどのくらいの距離にあるのかも解った。
喉の渇きも忘れ、草を分けてあらぬ方向に進み出そうとしている
誰かの横を抜けて駆け出す。

「はぁ、はぁ……！」

走るほどに影へと近付いて行く。疲労に震える足と眠気に霞む視
界に耐えながら走り続けた。

そして両脇の木々が途切れ、開けた場所に出る。木々から覗いて
いた影、それが微かな月明かりに照らされてその見慣れた姿を曝け
出している。

「教会……」

十字架を掲げ、その町で最も高い場所に備えられた鐘は大陸で最
も広まっている主教を信仰する証。とても見慣れた、私の家だ。ほ
つと安堵し、思わず視界が滲んで行く。

「ふむ、やつとついたか」

後ろから妙な方向に進んでったはずの黒さんの声がする。横を走
り抜ける音で気付いてくれたんだろう。

（そうだ、置いてっちゃったんだから謝らないと）

くるりと踵を返す。……いや、返そうすると、途端に膝から力が
抜けた。

（あれ？）

膝を付き、それでも止まらずに地面に体を投げ出す。起き上がる
うとするが、うまく行かない。それどころかどんどん目の前が暗く
なっていく。

意識がはつきりしない。瞼が落ちているのだと気付いて目を開け
ようとしてもどうにもならない。

要するには、ひどく眠い。どうやっても抗えないほどに。
まあ……それも仕方ない。

（少し……色んな事がありすぎたかな……）

頭上で黒さんが何か言っているのが聞こえるが、それを理解しよ
うと思う事はもうできなかった。

「う……」

目が覚めた途端、全身から漂う血の臭いが鼻に飛び込んできて思
わず喉から呻きが漏れる。鼻を摘みながら体を起こすと、足や腰を
中心に体中が悲鳴を上げ、裏返った甲高い呻きを上げた。

みしみしと軋む体を引き摺ってベッドを降りる。地についた足は
昨日とは違う震えを起こしているが、まあ歩けないほどではない。

「……？」

不意に疑問が頭に浮かんた。

振り返り、自分の寝ていたベッドを見る。昨日は確か、町についた途端に意識を失ったような気がしたのだが……。

「起きたか」

声と共に部屋の入り口から片手に水瓶と、もう片方に奇妙な紙束を持った黒さんが入ってくる。相変わらず全身が赤黒い血が固まって嫌な光沢を放つローブを身に纏ったままな所を見ると、あたしと同じように町について直ぐ眠ったのだらう。

「どの家も留守だったようなんで一番手近な家に運ばせて貰ったぞ。」

「

そう言いながら、水瓶を手渡してきた。ちやぶちやぶと鳴る水の音。喉の渴きに、少し興奮しながらくいつとそれを煽った。喉を抜けて行く少しぬるい温度が、まるで体に溶け込んでいくようで気持ちがいい。

一息に全部飲み干して、息をつきながら水瓶を下ろす。そして、喉の渴きという急場を凌ぐと自然と今度はそれに興味が移った。

「あの」

「何だ」

「それ何ですか」

おそろおそろ、と黒さんの右手を指差す。紙束かと思えば、それは一枚の紙を表、裏に交互に折っていった物のようだ。

「これは『^{ハリセン}覇裏閃』という。かつて大陸の遙か東の先から船でやってきたという民族が何らかの儀式に使っていたという由緒正しい祭具だそうだ」

「はあ」

その……『はりせん』という物で、黒さんは自分の左手をぺちんぺちんと叩いている。結構な音が立っているが痛くは無いのだろうか。

「それで、それは何に使うんですか？」

「まあ見ている」

そう言つと、黒さんはそれを空中で何度かぶんぶんと、振り心地を試すように振り回した。一度振る度にふむ、などと呟き、やがて満足したように息を漏らすと、それを振り上げたままの姿勢ですつと瞳を閉じる。

そして大きく息を吸い、かつと目を見開いた。

「ここは私の探していた村じゃないだろうが」

叫びながら振り下ろされた『はりせん』が、あたしの頭頂部ですぱーんと小気味のいい快音を鳴らした。

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：3（後書き）

誤字修正しました

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：4（前書き）

微妙にいやらしい描写が入ります

誤字修正

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：4

「……と、このような言語による意思疎通の不備を相手に伝える際に主に用いると言われている」

「それ、叩かないでただ口で言うだけじゃ駄目なんですか？」
「知らん」

そう言つて黒さんは手に持った『はりせん』をぽいと窓から投げ捨てた。

大陸外から伝えられた謎の祭具によつて盛大に叩かれた頭を手で摩る。音の割には痛くなかったが、快音と衝撃ですつかり眠気が全部吹っ飛んでしまった。

「大体、違つてどういふことですか。あの近くの村なんて言つても、一番近くて街道を馬車で丸三日、徒歩なら五日か六日はかかるくらい遠くにしかないはずなんですけど」

「恐らくはその村だな」

「……そういえば聞き忘れてたんですけど、一体どのくらい森の中で迷つてたんですか？」

「迷つてなどいない。目的地を見失つたまま7日ほど歩いていただけだ」

恐る恐ると尋ねた問いに、腕を組んだまま自信満々で即答する。

「道から外れてそれじゃ実質ほぼ最短距離をまっすぐ向かつて来てるじゃないですか。戻る気全然ないでしょ」

「自分一人の状況で己の確信を疑う事ほど愚かしい事はない」

頑固すぎる。彼女は省みるという言葉聞いた事がないのではな

いかと思えるほど凄まじく頑なだ。一切迷いの無い目で（道には迷うくせに）凜と立つ黒さんの前で、あたしは小さく溜息をついた。

「それでもちよっとはおかしいかなあ、とか思ってくださいよ。最初に言ってくれば気付いたかもしれないかったのに」

「何を言うか」

と、黒さんが不機嫌そうにふんと鼻を鳴らし、こちらを指差して口を開く。

「たとえ多少道が遠くとも、じきに戦場になるという場所に、野犬に追い立てられて泣いている弱々しい小娘が一人きりで戻ろうとしていると思うほうがおかしいだろう」

「っ」

どきり、と心臓が跳ね上がったような気がして、息を呑んだ。黒さんは指を下ろし、冷やかな目でこちらを見たまま、言葉を続ける。

「ここは国境の町だろう。西と睨みあい続けている……いや、もう始まつてるようだな。侵入者への警戒か、夜中に兵士が目をぎらつかせて町中を回っていた。そんな場所に、いくら腕が立つと言っても自分よりも小柄な女に対して、本当にそこでもいいのかと問いもなしに戦地まで連れてくるお前がどうかしているのだ」

言葉が何も出てこない。頭の中にすら浮かばずに、返す言葉がまるで無い。

それは、確かに……いや、考えるまでもなく正論だった。道に迷ってようやく出会った人間が戦場まで道案内をしたら、それはもう殴られても文句は言えないだろう。

そんな事は考えなくてもわかるはずだ。道案内を頼まれた時に真っ先に言すべき事のはず。

呆然と立ち尽くすあたしの前で、黒さんは呆れたように溜息をつく。

「随分余裕の無い顔をしていると思った。あの犬に襲われたせいかと思っていたが、違ったようだ。いよいよもって戦の幕が上がリ、故郷の危機に冷静さを欠いていたというわけか」

そう言っただけを返し、こちらに背を向けた。

あ、と反射的に（何かを言えるわけでもないのに）声を掛けようとした所を、黒さんの声が制する。

「何はともあれ、これからどうするにせよ水と食料が必要だ。町の様子を見るついでに集めてくる。お前はその間に少しは落ち着きを取り戻しておけ」

そう言い残し、黒さんは足早に去っていった。

伸ばしかけた手を胸に抱き、それから足の震えを思い出してベッドに腰掛け、勢いのまま横になる。

「少しは落ち着け、か……」

そうは言われても、これ以上は少し難しい。だって、正面からあれだけはつきりとぶつけられたら嫌でも落ち着かざるを得ない。

誰にも迷惑をかけなければ大丈夫。そう思っていた矢先のこの自分の有様に、胸の内で渦巻く自己嫌悪を吐き出すように大きく息を吐いた。

寝てる間に運び込まれたのはあたしが住んでいた教会だったようだ。おかげで置いてきた水や食物の場所、着替えを置いてある場所等、何が何処にあるかで困る事はなかった。また、日が落ちて暗くなっても蝋燭を灯さずに歩く事もできる。誰もいないはずの町で明かりを灯すわけにはいかないから、これは随分助かった。他の家に運ばれてたら、暗くなってから慌てておっかなびつくり夜闇と兵士に気をつけながら教会まで歩く羽目になる所だった。

まあ、つまりはとにかく便利でよかったという事。暗闇の中、しけたパンを明かりが漏れないようにびくつきながら沸かしたお湯で流し込み、温まった吐息を漏らして、そして呟いた。

「遅い……」

『少し町の様子を見に来る』。そう言って出て行って、まあ直ぐ戻ってくるとは思わなかったが、まさか日が落ちると思っていなかった。普段であれば外に探しに出ている所だが、外を見回っているという兵士に見つからないように、また帰ってきた時に行き違いにならないように、ここでじっと待っているしかない。暗闇の中ただ待つしかないという状況に、つい不安が脳裏を過ぎる。

まさかまた道に迷ったんじゃないか。

兵士に見つかって不審者扱いされて捕まったんじゃないか。

はたまたあの容姿、妙な男に目を付けられ、連れ去られてその肢体を……。

「……後ろ二つはないか」

凶暴な野犬を一方的に撲殺した勇姿が、身なりの汚い小太りの男に黒いローブを剥ぎ取られ両手を押さえられながらも、きつと強く相手を睨み、しかし目尻に滲んだ涙を隠せずにいる黒さんの姿を頭から叩き出す。

どうせまた町の中で迷ったに違いない。間違いない。

そんな失礼ではあるものの正直仕方ないと思える妄想をしていると、外から誰かの足音がした。音からして、鎧を着込んだ兵士ではない。

それでも細心の注意を払い、扉を少しだけ開けて外を覗き見る。両脇に荷物を抱えたような小柄な人影が道の真ん中を歩いているのが目に入った。

「誰かに見つかるとか考えないのかな……」

何はともあれ、扉を開けて手を振り、おーいと声を掛けようとして、固まった。その隙に、微かな月明かりに照らされるその人影……やはり黒さんだった……はこちらの姿に気付き、薄ら暗い中であたしの顔をじつと見つめてきた。

「ふむ、少しは落ち着いたようだな」

黒さんが脇に抱えていた荷物を手渡してくる。反射的にそれを受け取るが、未だに頭はまるで働かない。

そんなあたしの様子に気付いたのか、黒さんは怪訝そうな表情を浮かべ、申し訳程度に膨らんだ薄らとあばらの浮き上がる胸板の前で組み、首を傾げた。

「どうした？」

「こっちの台詞ですよ！　なんで全裸なんですか？！」

思わず叫びながら視線を逸らす。

まずい。妙な趣味に目覚めそうだ。月明かりに照らされて全身余すところなく真っ白なのを見てしまった。いや、黒と白以外にも胸元に二つだけ薄桃色に色づいている部分があるのを見てしまった。

とにかく血の気が昇っているのを気付かれぬよう、必死に背を向けてしゃがみこみ、両手で顔を隠した。

「いや何、服が余りにも血の臭いが酷くてな。兵士には気付かれなかったが不審者に見つかってしまった。不味いと思って帰り道に川で濯いできたが、もう駄目だなこれは」

言われて気付いたが、渡された荷物の中に湿った黒い布が一枚入っている。言われてみれば確かにまだ血の臭いがする。

「だ、だからって裸……え?! とうかこれの下何も着てなかったんですか?! これ一枚?!」

「丈の合うのがそれしかなかったからな」

「変態じゃないですか!」

「失礼な事を言うな。私は倒錯した性的思考によって服を着ていないわけではない。よって健常だ」

思わず振り返った隙に、両手を腰に当てて胸を張っているのを見てしまい、鼻から何かが入み上げそうになるのを必死に耐えた。

「ああもう、とにかく入ってください! あたしの服持ってきますから!」

「黒くない服は着んぞ」

「何ですかその大雑把な拘り?!」

急いで中に駆け込み、衣装棚を漁る。元々黒い服など数えるほどしか持ってなかったし、そもそもここを発つときに怪しまれないよう私物はほとんど荷馬車に詰め込んでしまった。そう都合よく黒い服なんて……。

「あつた！」

その都合の良い服を掴み、急ぎ黒さんの下へ駆ける。あたしのベツドの上で全裸で寛いでいるその姿を出来るだけ見ないようにしながらそれを突きつけた。

「これは修道服ではないか。襟元に白い部分があるし私はこの教会の信徒ではないぞ」

「そんなのフード下ろしとけば見えませんから！ いいからはやく着てください！ あと下着も持ってきましたからこれも！」

「黒くないぞ」

「どうせ外から見えないんだから気にしない！」

「どうせ見えないなら穿かずともよからう」

「うるさい！」

細かい理屈を全部置き去りに、有無を言わず力技で言い聞かせる。黒さんは不満そうな声でいくつか文句を言いながらも、『恩を受ける側なら多少の妥協は仕方が無いか』と呟き、気が乗らないといった風にのろのろと着替えた。

「……以前のローブに比べたら動きづらいが、仕方ないか」

口ではそう言っているが、実際は動きづらさよりも首元の白い布地のほうが気になっているのが態度から見え透っている。

ようやく刺激の少ない格好になって直視できるようになったが、

修道服を着た黒さんはそれはそれでまた別の意味で見づらくもあった。(くだらない事情にとはいえ) 憂いを秘めたその顔は、下手な神像よりも神々しく、思わず跪いて両手を合わせたくなる。

「それで、黒さんはどうするんですか？」

わなわなと震える両手を腰の後ろで組んで誘惑に耐えながらそう告げた。

「少し戦場に侵入して様子を見てきたが、既に戦が始まっているようだ。向こうの村へも報せが入っている頃だろうし、連れが迎えに来るのをここで待つ」

そこで、黒さんが一人旅をしていたわけではない事を知る。……何故だが、凄く嫌そうな苦々しい顔で溜息をついているのが気になるが。

「さて、それよりだ」

首元の布地を隠すのを諦めた黒さんが、ずっと視線をあたしに向けた。反射的にごくりと喉が鳴る。

「お前は どうして、今まだこの町にいる？ 何故出て行かない……いや、出て行きながら戻ってきた？」

とうとう訊かれた。答えたくない事を、答えなくてはならない事を。

言えはきつと馬鹿だと思われるだろう。自分でも馬鹿な事をする自覚があるのだから、他人から見ればそれ以上に馬鹿げて見えるに違いない。

視線を避けるように、天井を仰ぎ、瞼を下ろす。このまま黙っていれば、その内気が変わってしまったわないか？ 元からそこまで気になっていない様子でもない。多分、天井のシミでも数えている内にどうでもよくなるだろう。

「あたしの、父さんと母さん。この町で生まれたんです」

だから、そうならない内に語りだす。

馬鹿な自分の都合で人を巻き込んでしまった馬鹿の、最低限果たすべき責任のため。

「それで、この町で死んだんです。あたしが生まれた時に」

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：4（後書き）

本筋をスムーズに進める能力を誰かください

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：5

「母は体の弱い人だったみたいで、あたしを産んだ後に体を壊してそのまま死んだそうです。父は、一人になってもあたしを育てて行こうと、夜も寝ないで働いてある日仕事中に事故で死んだって聞きました。あたしが1歳になった少し後くらいだったそうです」

「やけに教会を我が物顔で歩き回っていると思ったが、実際にここはお前の家だった訳か」

首を縦に揺らす。黒さんの察した通り、両親が立て続けに亡くなって身寄りのなくなった私を神父様が引き取ってくれたのだ。ふむ、と頷き、黒さんが更に言葉を次ぐ。

「死んだ両親の生まれ育った町から離れたくない。それがお前の理由か？」

「いえ」

答え、迷わず首を横に降る。暗闇の中、黒さんがまた怪訝な表情をするのがなんとなくわかった。

「両親には感謝してます。命まで落として私を産んで、育てようとしてくれて。今こうしてあたしが生きているのは両親と、ここの神父様のお陰ですから」

そこから先を語るのに、人の顔を見ながら……いや、違う。他人に顔を見られながら話すのが嫌で、顔を伏せた。

「でもあたし家族とかそういうの、よくわからないんです。どうして母は、死ぬかもしれないのにあたしを産もうとしたのか。どうし

て父は母を殺したあたしを養う為に命が擦り切れるまで働いたのか。あたしがまだ未熟な内に薬でも何でも使って流していれば、父と母は二人で幸せに暮らせていけたはずです」

「……お前は、」

「ああ、あたしが死ねばよかったのに、とか思ってるわけじゃないですよ。ただ、物心ついた時にはもう家族がいなかったあたしには、どうしてもそこまでする理由がわからないんです」

その暗い声色から察した事はどうやら当たっていたらしく、黒さんは何も言い返してはこなかった。

「子供の頃、気になって神父様に何回も尋ねたんです。そしたら神父様は『時間が経てばいずれわかるようになる。それまでここで精一杯生きなさい』って。別に、命を捨てるほどの思い出がこの町にあるわけじゃないんです。でも、両親がどうしてあたしをそこまで大事に思っていたのか、あたしはまだわかってないんです。この町は、あたしと両親を繋ぐたった一つの場所だから、なくなったらそれが届かない場所まで行ってしまうような気がして」

胸の内に渦巻く思い。それを上手く言葉にするのはきっとできなかっただろう。聞く側からは随分理解に苦しむ言い方をしただろう。ただ、それでも思うままを全て吐き出した。一片残らず、全てを曝け出した。

静かに息を吸い、ゆっくり吐く。そして顔を挙げ、瞳を開いた

「それが嫌で、ここにいます。あたしの事馬鹿だと思いませんか？」

「知らん。寝る」

「あれえ?!」

目に入った黒い影は、まるで興味がないと言った様子で床に寝転んでいた。目を開ける前予想だになかった光景に、戸惑いを隠せず思わず裏返った声上がる。

「ちょ、ちよっどどういう事？ 何でそんな……だって、人に話せて言っておきながら……えー？」

「話したのを聞いたのだからもういいだろう」

「いや、何か言ってくださいよ。話すだけ話してそのまま寝られたらすっごく釈然としなくてこっちが寝れません」

そう言いながら、こちらに向けられた小さな背中を両手でゆさゆさと揺する。せっかくすつきりした胸の内に靄を残されたまま寝られたら不公平だ。

しばらくそれを続けていると、観念したのか、黒さんは眠そうに目を擦りながら唸るように不機嫌そうな声を上げた。

「……お前はお前の価値観を持ってそれをやろうと決めたのだろう。やれない事をやろうとしているのならともかく、やれる事をやっている人間のどこがおかしい」

そして出てきたのは予想していたのと全く違う、あたしの行為を肯定する意味合いの言葉だった。

思いがけないその言葉に呆けていると、黒さんは欠伸をしながら言葉を続けた。

「自分の行いの是非を他人に押し付けるな。お前の命も想いも、その価値はお前が決める物だ。自分が馬鹿なのかどうかくらい自分で決めろ」

肩に置いていた手を払われて、黒さんはごろりと床を転げ、瞬く

まに小さなかわいらしい寝息を立て始めた。そのままずっとそこに座っていても仕方ないので、のろのろとベッドに戻り、横になる。持ち上げた両手の甲で目を覆った。

少なからず、困惑していた。

こうなるとは思っていなかった。小一時間ばかり馬鹿にされると思っていた。

「自分の事は自分で決めろ、か……」

口からその言葉が漏れる。自分の行為を否定しなかったはずのその言葉が、妙に重く感じる。

小さく、しかし長く、溜息をついた。ああ、やる事が一つ増えてしまった。

『イヴ!』

外からそう叫ぶ若い男の声が聞こえてきたのは、翌日の昼だった。何事かと思わず身を竦ませたあたしに反して、朝の散歩から帰ってきて昼食を取ろうとしていたイヴさんは、いやに落ち着いた様子でやれやれと呟きながら立ち上がった。おそらく、その声の主が昨日言っていた迎えなのだろう。

「黒さんの名前、イヴっていうんですか？」

「あいつが勝手にそう呼んでるだけだ」

「……なんでそんな苦虫を噛み潰したような顔をしてるんですか？」

「私は奴が嫌いだからな」

「どうしてそんな人と一緒に……？」

「義務のようなものだ」

短いやり取りを終えて、イヴさんは……いや、やっぱり私にとっては黒さんだ。黒さんは、外への扉を開いた。そのまま外に出て、後ろ手で扉を閉める。

その扉が、閉まりきる寸前、僅かな隙間を残して止まった。どうかしたのかと不審に思っていると、そこから黒さんの声が飛び込んでくる。

「死ぬまでには決めておけ。後悔しないようにな」

ぱたりと音が鳴り、扉が締め切られた。その向こう側から、小さな足音が遠ざかって行くのが聞こえる。

黒さんが言ったのは、きっと昨日の事だ。『自分の事は自分で決める』。私がまだ迷っているのを察したのだろう。他人に興味がない素振りなどしておいて、親切な人だ。

自然と笑いが漏れ、腰を上げた。これだけ世話になったなら見送りくらいはしとかなないと。

大丈夫、兵士が町を出歩く時にどの辺を回っているのかは聞いておいた。今の時間なら、誰かに見つかるような事はないはず。

深く息を吸い、扉にかけた手にぐつと力を込めて……ぐつと押し開けようとした瞬間、扉が強く外から引かれ、それに引かれてつんのめった。

「きゃっ……」

「うわっ」

転ぶと思ったのが先か、誰かの慌てたような声と共に誰かの胸元に顔を突っ込んだのが先か、どっちが先なのかはわからないくらいほとんど同時だった。

何が起こったのかわからない。飛び込んでくるのは真っ暗な視界と汗の臭いだけ。とにかく、まともに地に足がついていないのが不安で、何か掴もうと両手をばたつかせていると、両肩をがしつと掴まれ、体を預けているそれから引き離された。

視界に再び光が差し込む。眩しさを覚えながら、人に見つかった事に今更ながら焦りを感じた。

どうしよう。見逃してもらえだろうか。なんとか誤魔化せるだろうか。そんな事を考えながら顔を挙げ、自分の肩を掴んでいるその人物の顔を見て、思わずえっ、と吐息が漏れた。

昔、何度か神父様に連れられて隣の村まで行った事がある。その1度目の時、同じ年頃の子が来ていると誰かから聞いたらしい男の子が期待に満ちた目をしながらやってきて、あたしを見るなり隠そうともせずに落胆した。それが気に入らなくてちょっと取っ組み合いの喧嘩になり、それが原因で以後村を尋ねる度にそいつと喧嘩をするようになった。友達……と言えるかはわからないが、知り合いとカウントしてやるくらいは許してやっている。

混乱して、そんな昔の事を思い出してしまったが、何があったのか、何が言いたいのかといえ、つまり要するには。

「……なんでここにいるの？」

今、あたしの目の前にそいつが立っているという事だった。

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：5（後書き）

前話で終わるかと思ったけど終わらなかったと思ったたら今回も長くなりそうなので分割する羽目になったでござるの巻

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：終（前書き）

重要な事項が抜けているのに気付き、慌てて追加

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：終

「それはこっちの台詞だこの馬鹿！ ふざけんな！ お前どうしてこんな所に残ってるんだよ！」

肩を掴む指の力を強めながら、怒気混じりの叫びでがなり立てる。何もかもが余りに唐突すぎて頭が回らず、目と口を開けて呆けてしまふ。彼はそんなあたしの様子を見ているのかいないのか、まるで構わず言葉を続ける。

「前から苛つく奴だけど馬鹿じゃないと思ってた。でも間違いだっただよこの馬鹿！ お前が馬鹿な事をしてるせいでどれだけ他人に心配と迷惑かけたと思ってるんだ！ わかってんのか！」

相も変わらず、自分の言いたいことだけ言ってきてくれる。その見るからに思慮の浅そうな顔と言葉に、ほんのついさっきまでまるで違うタイプの人間と話をしていたせいで感じていた戸惑いと違和感が少しずつ薄れていく。

……と、同時に胸中に込み上げてくるどろりとした赤黒い感情。

「おい！ 聴いてんのかよこの馬鹿女！」

「うっさいわねこのバカ！ あたしが何処で何をしようとあんたには何の関係もないでしょ！」

見知らぬ他人。尋常ならざる強さ。現実離れた美しさ。等等、黒さんの発する近寄り難い空気から身を護るために貼り付けていた外面が全て剥がれ落ち、本来の自分の地が顔を出し、胸中の苛立ちをそのまま目の前の相手に吐き出した。

「だいたい人の事バカバカバカバカ連呼して、あんたそれしか語彙がないの?! バカはそっちでしょ!」

「お前を構成する要素が馬鹿しかないんだからそう言うしかないだろこの馬鹿! いいから、もう行くぞ! 来い!」

「やめてよ! 離して!」

肩を掴む腕を振り払い、胸元を両手で突き飛ばす。久しぶりの大声に微かな喉の痛みと息切れを感じながら、目の前で険しい顔をしているそいつを睨み返した。

「勝手な事言わないでよ! あたしはあたしの考えでここにいるの! あたしがバカかどうかはあたしが決める! あたしが何を思っているかなんて知らないくせに、無関係のあんたが口出ししないで!」

つい先刻に言われた言葉を交え、思いの丈を全て吐き散らし、じつと瞳を見つめる。何か言えるなら言い返してみろ。そう目で訴えた。

その私の視線に対し、彼は……。

「五月蠅え!」

たった四文字で、こちらの主張を全否定してきた。

ただの勢いと声量に任せた、論理も筋も何も無いただの怒声に思わず体が強張り、腕を掴まれるのに抵抗するのを忘れた。

「お前が何考えてるかなんて知らねえよ! 知るつもりもないし知りたくもない!」

強く掴まれた腕が熱い。鋭くぎらつく眼が怖くて顔を伏せる。混乱していた。今までこんな口喧嘩なんて何度もしてきたはずな

のに、どうしてか体が竦んで、震えて、言葉が支えて何も出てこない。いや、そもそも口にする言葉が浮かばない。

何がなんだかわからない。でも、一つだけわかった。目の前の彼が、初めてあたしに対して本気で怒っているという事。それだけはなんとか理解できた。

彼が腕を掴んだまま詰め寄ってくる。反射的に後ろに下がるが、背中が扉にあたりそれ以上逃げられない。彼は血走らせた目で宙を泳ぐあたしの視線を捉えると同時に、その口を開いた。

「どうして俺がこんな所にいるかって聞いたな。お前、それがどうしてかわかるか？」

押し殺したような静かな声に、ふるふると弱々しく首を横に振った。

「昨日の夕方頃、この町の連中が俺の村に着いた。お前も知ってる、町の端が戦場になるから。まず勝てないだろうって事でな、俺の親父や村の大人達と話し合って一緒に逃げ出す事にしたんだ」

彼は言いながら苦渋に満ちた表情を浮かべる。だが、それが何だと言っただ。自分は故郷を捨てる決断をしたからお前もそうしろとでも言うつもりか？

もしそうなら聞く意味なんかない。彼自身の故郷の価値と私自身の故郷の価値は違うのだから、そんな的外れな指摘を聞く必要などどこにもない。

「出発の用意が終わって、さあ出発するぞって時だった。道中で怪我したらしい人が起きて騒ぎ出してたんだ。何でも、いきなり集団から飛び出して道に戻ろうとして大兎に襲われたらしい」

掴まれてる腕を引く。指がしっかりと絡まっており、抜けそうにない。振り払おうと自由な方の手を伸ばす。

「怪我事態は大した事なかったらしいけど少し血を流しすぎて丸一日寝てたそうだな。その人をなんとか落ち着かせて話を聞いてみたらその人が言ったんだよ。一人足りない。きつと両親の眠っているあの町に戻ったんだ。頼むから迎えに行かせてくれってな」

びたり、と意図せず動きが止まった。

何故だろう。何か、気に掛かる事を聞いた気がする。わからないけど、何か重要な事を。

腕を下ろし、口を開く。

「ここに」

喉から漏れた酷く掠れた声に驚き、一度唾を飲んだ。

「っ……あたしの他に誰がいるっていうの？」

「こんな危ないところに戻る馬鹿、お前以外にいるか」

疑念が確信に変わっていく。でも、そんなはずはない。あるはずないんだ。

「嘘言わないでよ。あたしのためにそんな事する人いないわ」

「それ、本気で言ってるのか」

「そうよ。だってあたしの家族は、両親はもう……」

言葉の途中で、腕の拘束が解かれた。変わりに、両手で襟元を掴み上げられる。

思わず悲鳴を上げそうになった。殊更近付いた彼の顔が、先程よ

りも更に強い憤怒の色に染まっていたから。

耐えるように奥歯を噛み締め軋む音を立てながら、彼ができる限り感情を押し殺そうとした、それでも隠し切れない怒りを込めた声が響く。

「嘘つくなんてのはこっちの台詞だ。お前にはもう頭ん中に浮かんでる顔があるだろう」

どくと心臓が跳ね上がる。

違う。違う。

自惚れるな。そんな事はない。

「嘘。あたしなんかをそんな風に思うはずない。だって、あの人があたしを気にかけるのはそれが仕事だから」

頬に衝撃が走る。何が起こったのかわからず視線を泳がせ、彼の右手が襟元を離れ開かれているのを見てようやく横面をはたかれたのだと気付いた。

「ふざけるなよ。あの人は立ってるのもやつの体で俺達に言ったんだ。『一緒にきてくれなんて贅沢は言わない。自分一人でも行かせてくれ。私の大事な娘なんだ』って」

叩かれた頬を押さえる。さほど強く叩かれたわけでもないのに痛みはなく、ただじんとした熱さが残っている。

なんとか堪えようと、掌で何度か頬を摩った。だけど、どうにも無理だ。

「お前、あの人の前でもさっきの言葉が言えるのか？ お前の抱えてる理由ってのは、お前をそこまで大切に思ってくれてる人の思い

を踏み躪るほどの価値が
「ない」

言葉を遮ると同時に、顔に添えた手が熱い液体で濡れた。顔を隠すように俯くと、ぐしゃぐしゃに歪んだ視界の中で零れ落ちた雫が地面に濡れた痕を残す。

体の奥底から込み上げてくる物が、目から溢れて止まらない。

自分が馬鹿なのかどうかくらい自分で決める。

あの人が今、耳元で囁いたような気がして、あたしは鼻水を啜り上げながらそれに答えた。

「あたし、馬鹿だった。ごめんなさい」

目から込み上げる涙で視界が見づらくて嫌。

鼻を啜る音が五月蠅くて不快。

止まらない嗚咽で息苦しい。

こんなみつともない顔を嫌な奴に見られて恥ずかしい。

でも、それ以上に人の思いを踏み躪った自分の行いで、胸が痛くて堪らない。

あたしは、馬鹿だ。どうしようもない。

あたしを引き取って育ってくれた神父様を、自分の事を家族だと思っていてくれた人を何の躊躇もなく裏切った。あの人そんな事を思っているなんて、考えもしなかった。そんな人間が、どうして両親があたしを思っていてくれたのかわかるはずがない。馬鹿丸出いだ。

そんな姿を見られたくなくて、顔を覆う手と逆の手で目の前のそいつを弱々しく押し返そうとした。でも、そいつはあたしの意志に抗うように、逆に手を振り払い、片手をあたしの首に回して自分の体に引き寄せた。

「わかったならもう言わないし、近くて何も見えないから。しばらくこうしてろ」

あいつは自分の胸をあたしに押し当てながらそう言った。
やっぱり、こいつは嫌いだ。人の嫌がる事を平気でする。

瞳からまた涙が零れるのを感じながら、あたしはそれを押さえつけるように、両手を彼の背中に回した。

「おー、見つけたか」

「ああ」

しばらくして、村の入り口で馬車の番をしている彼の父親の元へ連れて行かれた。彼の父は以前見た時と変わりなく、逞しい体付きをした人相の悪い、でも不思議と人の良さそうな空気を纏っていた。……が、重要なのはそこではなく、あたしはそれを見て顎が外れるほど口をだらしなく開いていた。

「手なんか繋いじまって、随分仲良しなところ見せ付けてくれるぜまつたく」

「五月蠅えよ。また勝手にどっか行かれたら困るだろ」

そんなあたしの様子には気付いていないのか、気付いていて知らん振りをしているのか、二人は普通に会話をしている。横にいるそ

れとは全く似つかわしくなくごく普通の親子の会話だった。
とそこであたしの様子に気付いたらしく、彼の父が怪訝な顔を
する。

「どうした？」

続いて、彼もこちらに目を向け、それと同時にああ、と声を上げ
た。

「馬の事だろ」

「あー、まあ珍しいからな。俺も始めて見たし」

「いやいや」

暢気な声を聞いてようやく頭が回り始める。軽い眩暈すら覚えな
がら、なんとか目の前のその馬……というよりも、その一点を指差
して、口を開く。

「珍しいって言うか、あの、その……それ、魔獣じゃないですか」

指差した先、その白馬の頭部には、立派な一本の角が生えていた。
一角獣^{ユニコーン}。魔王が降り立つ前には神として崇める村もあったと言わ
れる希少な魔獣。脚力は通常の馬の十数倍に及び、その角で水流や
雷雲をも操ると言われている極めて強力な怪物だ。

その怪物が、目の前で馬車に繋がれて気だるそうに干し草を食べ
ている。何が何だかわからない。

「いや、俺らも驚いたけどな。勝手に走り出したこの馬鹿追いか
けて、なんとかあのあんちゃんに追いついて事情を話した馬から角が
生えてくるんだもん」

「おい親父、余計な事まで言うなよ」

あのおんちゃん……というのはもしかして、黒さんを迎えに来た若い男の人の事だろうか。魔獣をこうまで飼いなすなんて、一体あの男の人は……いや。

「あなたは、何者なんですか黒さん……」

ぼそりと呟く言葉に応えるかのように、角の生えた白馬は大きく嘶いた。

大陸南西、国境の町及び町付近の森にて：終（後書き）

ようやく2話終わり。前座が終わってようやく話が進み始める頃か
と思いきや3話もそこまで重要な話じゃなかった事に気付き愕然と
するのであった。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：1（前書き）

丁度いい区切りが思いつかなかったので短めに新話の導入のみを

大陸南西、国境の町及び戦場にて：1

「まあたお前か……帰れ！」

重厚な鎧を身に纏った兵士の兄ちゃんは、門の隙間から俺を見るなりうんざりしたようにそう言っただけ試してみるつもりでさ！矢理鞆の端を詰め込んでそれを阻止し、開いたままの隙間に両手を差し込み、歯を食いしばってそいつと逆方向に力を込めながらにこりと引き攣った営業用の笑みを向ける。

「そんな事言わないでさ、ちょっとだけ試してみるつもりでさ！おっちゃん特別に安くしたげるから、ね？　今ならほら、西の国の名匠が鍛えた新品の両刃剣！」

押されそうになって慌てて捻じ込んだ足の脛の部分にげしげしと蹴りを入れられる痛みを堪えながら、隙間から柄にも鞘にも装飾の全く施されていない無骨な剣を差し込む。

「一本で金貨10枚の値打ちはあるこの剣がなんと金貨30枚！安い！」

「高いわ！　そもそも高いしむしろ更に高くなってる！」

「仕方ねーだろ！　俺だってこの剣騙されて金貨20枚で仕入れたんだから！」

「騙されて買った物売ろうとするな！　偽物だったらどうするんだ！」

「大丈夫大丈夫！　ちゃんと鑑定して本物だって証拠はあるから！鑑定料金貨8枚取られたけど！」

「お前それも騙されてるんだよ！　商売向いてない！　もう帰れ！」
「うるせー！　クッソ高エ武器買わせるまでは絶対諦めねーからな

！ 家に帰れば腹を空かせたガキが山盛りなんだ！ もう後には引けねーんだよ！」

「だから今でも十分装備は整ってるのに誰がわざわざ糞高い武器を買った諦める！」

ついつい口から本音を漏らしてしまいがら、必死に閉まろうとする扉と格闘していると、その向こう側からがしゃがしゃと金音が響いてくる。それとついでに、「交代の時間だ」とか、「なんだ、またか」とか、そんな声も。しかし俺はそんな雑音には全く気を取られずに、微かに力の緩んだ扉を開けるために門の外壁に片足を掛けて息を吸い……その時、丁度良く扉の向こう側から「せーのっ」という声が聞こえたので、それに合わせて……全身の力を込めて、それを引いた。

「うおおあああああああああ？！」

瞬間、今まで感じていた抵抗が消失し、俺の全力は無抵抗になった取っ手をずるりと滑り、幾許かの浮遊感を経て頭部に衝撃、口内に土の味が広がった。

どうやら、俺が力を込めるのに合わせて手を離されたらしい。地面に横たわる俺の前に商売道具の鞆がどさりと投げつけられ、次いでいそいそと扉を閉める音が響いた。

唾を吸って泥になった土を吐き出し、鞆を拾い上げて砂を払う。そしてすっかり締め切られた扉の前まで歩いていき。

「コノヤロー！ 下手に出てりや舐めやがってよーこの貧乏人がー！ いいからさっさと金よこせやコラァー！」

声を張り上げながらどすどすと靴の底で扉を何度も蹴りつけた。向こう側から何か怒ったような声が聞こえる気がするが、構わずに。

「ざっけんじゃねー！ 名剣だぞ名剣！ 男だったら心躍ってつい財布の紐が緩むのが当然だろ！ てめーチン ついてんのかー！ ついてたとしても使った事ねーんだろー！ この包 で早 の童野郎ー！ お前のカーチャンデーバーソー！」

と、考え付いた罵倒をそのまま順に吐き出していると不意に扉が開く。どうしたのかと首を捻る俺の前に、さっきの兵士とはまた違う、若い兵士が姿を見せた。……無表情の額に青筋を立て、手には抜き身の剣を下げた姿で。

それを見た俺は、黙って2歩ほど後ろに下がり、ふ、と薄く笑みを漏らす。そして、ちゃ、と鎧同士の擦れる音を立てて剣を構えたその兵士に、すぐさま背を向け地面の鞆を拾いながら全力で逃げ出した。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：1（後書き）

やっぱりこういう簡単にふざけてくれるキャラのほづが書きやすい
ような気がする

大陸南西、国境の町及び戦場にて：2（前書き）

いざ書いてみるとそんな長くなかった。最初からここまでで：1にすれば良かったと反省した。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：2

「あーびっくりしたー……ちょっとやりすぎたかもしれないな、うん」

先程まで居た国境側の砦の入り口からほどよく離れた民家の裏で、そう呟きながら抱えていた鞆を地面に置き、手の甲で額に浮き出た汗を拭う。少しばかり白熱しすぎた。あそこで斬られたら今までの苦勞が全てさっぱり水の泡、本末転倒もいい所だ。

「しっかしまあ……」

口をつけていた水筒に栓をして腰に戻しながら、もう何度も見て回ったその街並みを改めて見渡してみる。

「ここはいい所だねー」

率直な意見と共に、溜息が漏れた。

古惚けているが小奇麗で、町場所によつて貧富の差のようなものも無いようだし、それなら当然スラムもない。酒や暴力も、度が過ぎて問題になるような事もなく、違法性のある薬物や危険物など持つての外。緑に溢れ空気もよく、その気になれば水も生で飲めるかもしれない。人の消えた街並みを見るだけでも、それだけの事柄が読み取れた。自分の故郷とは大違いだ。

「あー、やだやだ戦なんて」

大きく息を吐き出しながら、石畳の地面に構わず身を投げ出して空を仰ぐ。仕事とはいえ、こんな所に来たくなかった。この街並み

が崩れ去るのを想像すると軽い吐き気すら覚える。

「……でもま、それがなくちゃ喰いっぱぐれちまう奴が言っている事じゃねーよなー」

ちらりと仕事道具の詰まった鞆に眼を向け、自分がこの町を食い物にしようとしているのを思い出して、重ね重ねに積みあがった自己嫌悪の誘うままに、横たわったまま大きく息を吐いた。

その時、ふと遠くで微かな気配を感じた。

（何者だ？）

寝転んだ姿勢のまま足で勢いをつけ、立ち上がる。今まさにここに居る俺が言っている事じゃないが、この町の住民は十数名の志願兵を除き、もう数日前に避難が済んでるはずだ。

兵士ではない。どの兵士がどのルートで町を見回るのはここ最近の隠遁生活で大体覚えた。

なら俺と同じ怪しい者か？ いやいや、俺は怪しくないし、そんな怪しい奴がわざわざ今から滅びようとしている場所に来る理由はない。

西国の隠密……も、ない。

となれば、さっぱり検討がつかない。腕を組み、しばし考え込む。

（んー、妙なのに絡まれても困るし放つとくか？ それとも接触してみるべき？ こいつの動きによっちゃようやく把握した兵士の兄ちゃんたちの動向も変わるかもしれねーし。でもそれは顔を合わせても同じ事か……）

考え込んでいた時間はそう長くはなく、組んでいた腕を解き、鞆を拾い上げるとその気配のする方向を確認し、前へ足を踏み出した。

理由は単純、知らないよりは知っているほうがお得だから。

少しずつ近付いて行く内、選択をちよつと後悔し始める。この追つてる先の奴から、尋常じゃない血の臭いがする。まだ随分離れているはずなのに、鼻先を鉄の臭いが漂っている。

（血を浴びたまま一昼夜以上過ごしてるんじゃないのこれ？）

脳裏に浮かぶ、生きたまま野獣の腹を食い千切り豪快に笑う、禿げ上がった頭部以外がもつさりとした体毛に塗れた巨漢の姿。きつと今までに8人くらい殺してそんな極悪な面をしていて、それに反してとても友好的に血と汗の臭いに塗れた体で友好的に抱きついてくるに違いない。経験上、そういう奴はだいたいそうだ。

（会いたくねえー）

心中で全力で叫びつつも、足は止めずに進み続ける。一度決めた事は曲げずにやり遂げるのが信条だ。

溜息をつき、路地の角を曲がる。その瞬間、突然血の臭いが一層強まり、嫌な予感を感じて身を縮ませる。

「うおお?!」

それが幸いしたのか、角の向こうから凄まじい迅さで襲い掛かってきた爪先を、地面に仰向けに倒れる事で間一髪交わす事に成功した。

「……偶然もあるようだが、不意をついて避けられるとは思わなかったな」

目標である俺を逃した足を民家の壁に預けながら、鈴の鳴るよう

な美しい声が凜と響く。俺はそんな言葉も耳に入らないほど、目の前のそれに見とれていた。

腰まで届く長い黒髪、日を浴びながら一切の穢れを許さない真っ白な肌、整いすぎて恐ろしささえ感じる端整な顔立ちに、それとは似つかわしくない鮮烈な血の臭い。想像していたむさいオッサンとはまるで正反対の、美しい少女の姿…… などではない。全くない。全然。

地面に横たわり見上げる俺の視線が注がれている先はそれ。自身の胸元のあたりまで真っ直ぐ上がる美しい脚線美。それによって必然的に持ち上がる裾の、その中身。石畳に反射した日の光が照らすそこは、光が足りずに影がさしているがはっきりと白く美しい素肌が脚の先から可愛い臍と腰のくびれの辺りまで見えてしまっている。

そう、脚の先から腰の上まで、一切の邪魔なく真白い肌が覗いている。

つまりそう、この少女は！

はいていない！

「大王陛下万歳あああああい！」

無意識の内、滾る熱い感情に突き動かされ、俺の口から全身全霊の咆哮が漏れ出ていた。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：2（後書き）

それにしてもこのオッサン、ノリノリである

大陸南西、国境の町及び戦場にて：3

路地から恐る恐る顔を出すと、苛立った顔つきの兵士がいつもより多めに町を巡回している。やはり町中に響き渡るほど大声で叫んだのがまずかったようだ。

『あの野郎、今度という今度は見つけ次第縛り付けて森に放り込んでやる』とでも言いたそうな殺気立った兵士達が去って行くのを眺め、肺腑に溜まっていたものを吐き出した。

「いやー、正に間一髪だったねー」

「誰のせいだと思っている」

可憐だが低く怒りの籠る、どこか獣の唸り声のような印象の声が投げかけられる。振り向くと、血塗れの真つ黒なローブ1枚だけを身につけその下は全裸の美少女が眉根を寄せてこちらを睨んでいる。あのまま勝手に出歩かれて兵士にでも見つかられたら困るので、半ば無理矢理抱えて逃げてきたのだ。

俺はその少女を横目で見ながら、ふっと笑みを漏らした。

「確かに兵士に見つかったのは俺のせいだ。だがあんなものを見せられて大王陛下万歳と言わない男がいるだろうか！」

小声で叫びながら、その額にびしっと指をつきつける。そして片手の甲で鬱陶しげにぺしっと払いのけられた。

「普通の人間が大王陛下万歳と叫ぶのは大王を讃える時だけだろう」
「それはそーかもしれないがそんな事はどうでもいいんだ！　これの前にはそんな事はどうでもいい！」

座り込み、おもむろにロープの裾を両手でがばつと捲り上げ中に頭を突っ込む。

「血で汚れた漆黒のロープとそれを身に纏ったまだ幼さの残る美少女！ およそ世界の常識では結びつかないアンビバレンスな両者が織り成す魔性の色気！ 更にはそこから覗く白く細くハリのある脚線の根元はなんとまだ毛がふこつ！」

鼻の頭に硬い物が捻じ込まれ、喉の奥に鮮烈な血の味が広がった。暗くてよく見えなかったが、恐らく膝を叩き込まれたのだらう。豚のような嗚咽を漏らしながら地面をのた打ち回る。

「……今までさほど気にした事はなかったからわからんが、貴様に見られるのは特別癪に障る気がする」

「何だと……この後に及んで羞恥心。幼い少女に訪れた初めての性の芽生えとか、まだ戦闘力が上がるってのか……！」

立ち上がった瞬間、真っ直ぐ伸びてきた踵が鳩尾に突き刺さり、鼻から血の塊を噴出して再び地面を転げまわった。少女は蔑んだ目を一度俺に向け、背を向けて町を中心に向かって歩き出す。

「あ、おーい待って待ってー！」

腹を摩りながら立ち上がりその背を追った。追ってくる俺の気配を感じたのか、少女は振り返らず無言のまま露骨に足早に遠退く。それを追ってこちらも足を速めると、それよりも更に。

「待ってってさー、えーつと……名前なんてーの？」

だがまあ、体格が全く違えば歩幅も違う。意地でも張っているの

か、俺相手に走って逃げるつもりはないようで、振り切れないと悟った少女は速度を緩める。

「……貴様の好きに呼べばいい」

「あ、じゃあさ『貧乳』と『美脚』と『痴女』と『生えてない』どれがいい？」

「今の言葉は撤回する。貴様は二度と私を呼ぶな」

横顔にも声色にも現れていないが、ぎりりと力強く握られた小さな拳の甲に薄らと血管が浮き出ている辺りに多大な怒りを堪えているのが見て取れる。たぶんなんとなくわかつているのだろう。まともにも相手をしたら負けだという事を。

「それでさ貧ちゃん」

「呼ぶなと言ったのが聞こえなかったのか」

「痴ーちゃんはこうしてこんなとこいんの？」

「呼び方を変えろと言ったわけではない。何処となりに消え失せて二度と私に関わるなと言ってるんだ」

「おお、はっちゃん怒った顔も可愛いねえ」

かけられる言葉も向けられる感情も全てオールスルーしていると少女は不意に立ち止まり、大きく溜息をついて振り返った。普通なら怒り一色に染まっているはずのその顔は、むしろ当惑の色が濃く自分で自分がどう思っているのかわかっていないように見て取れた。自らの恥部を他人に晒して顔色一つ変えなかった事から予想はついてはいたが、恐らくはあまり人と関わらずに生きてきたのだろう。彼女には感情の表現方法がよくわかっていないのだ。どこのお嬢様だかは知らないが、かなり浮世離れた生活を送ってきたと見える。

「……黒と呼べ。この前会った奴はそう呼んでいた」

「えー、でも」
「呼べ」

苛立ちをぶつけるような強い語気。これ以上遊んでこじらせても仕方ない。底の無い闇のような瞳から目を逸らす。少女はそのまましばらくこちらを睨んでいたが、また視線を前に戻して歩き始めた。

「んで、くーちゃんは一体何しにこんな誰もいない町にいの？
逃げ遅れ？」

「……道案内をさせた相手が行き先を間違えたんだ」

その呼び方にまだ納得しかねるものを感じたのか、少女は一泊遅れてそう答えた。その回答に俺はぷつと吹き出す。

「あつははは、ばつかでー。こんなご時世に行き先も確認しないと
かどんだけ世間知らげふう」

どうやら感情表現の方法として口ではなく手を出す事を思いついたらしく、少女のローブの下から伸びた爪先が脇腹に突き刺さり、俺は腹を押さえ奇声を発しながら地面をのたうつ。

「お、お腹はやめて……産めなくなっちゃう……」
「貴様は男だろう」

「うぐう、痛い所を……あ、そっちは今の時間見回りの兵士さんが
いるから通っちゃ駄目よ。町からつまみ出されちまうからね」

よろよろと立ち上がりながら大通りに出ようとした少女に注意すると、少女はぴたりと足を止め、振り向いた。その目には今までと違い、色濃い警戒の色を浮かべている。

「そう言う貴様こそ何者だ。誰もいない、戦地のすぐ隣の町で兵士の動向まで把握して何を企んでいる」

ただ振り向いただけに見えて、その実は重心をやや後ろに残しこちらから見える面積を減らすために体を斜に構えている。まだ子供に見えて、中々に場数を踏んでいるようだ。

脇腹から手を離し、はあと溜息をつく。まあ、こんな所で（自分で言うのも何だが）不審な男に会えばそうなるだろう。むしろ逃走後でゴタゴタしてたのを踏まえても遅かったくらいだ。

視線を少女に向けると、見た目はそのまま僅かに重心が落ちた。下手な事を言えばその瞬間に蹴りが跳んできそうだ。瞼を閉じ、ふふと笑いを漏らす。

「それはほうら！ 見ての通り！」

そして商売道具の詰まった鞆を開き、その中身の剣や槍（嵩張るので穂先のみ）、弓や投擲用のナイフを曝け出す。

少女は、ぐっと右手の親指を天に向けて立て歯を見せて笑う俺の姿と、その鞆の中身を何度か見比べて口を開いた。

「家無くし家族からも捨てられて行き場を無くした浮浪者か」
「あれえ?!」

あまりにもあんまりな言葉に気が抜けて、ずるつと足元が滑り大事な鞆の中身を地面にぶちまけた。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：3（後書き）

書きやすいと思ったら今度は勝手に暴走を始めてまともに進んでくれません

どうしたらいいの……

大陸南西、国境の町及び戦場にて：4（前書き）

構成のミスに気付き少しでもごまかすために無理矢理台詞を修正

大陸南西、国境の町及び戦場にて：4

「この荷物に出で立ち！ 今正に戦の真つ最中の町に残つて兵士さんらに交渉吹っ掛ける姿とどっからどう見ても武器商人でしょーが！」

「商売云々は知らん」

涙ながらに熱弁する俺をよそに、少女は屈みこんで一切の遠慮なしに鞆の中身を遠慮なく物色し始めた。一つ一つを手に取り、その度にほうと呟いたり、眉を寄せたり様々な反応を見せる。そしてその中の一番の目玉を手に取り。

「なんだ、玩具が混じっているぞ」

「どおわああああ？！」

いきなりその先端をこちらに向けてきて、思わず奇声を発しながら地面に体を投げ出す。

「何をしている」

「オモチャじゃないからこれ！」

見下した視線を投げかけてくる少女の手から、その黒光りする、親指と人差し指をぴんと伸ばし残りの指を内側に折り曲げたような形と大きさをした物体を取り上げ、胸を押さえて深く息を吐いた。心臓が跳ね上がって全身の毛穴が開くほど焦ったのは久しぶりだ。袖で顔の汗を拭いつつそこはかとなく冷めた視線を向けてくる少女をきつと睨みつける。

「これは鉄砲よ。知ってるテッポー？ 火薬を使って鉄の弾を飛ば

すやつ。 危ないから人に向けちゃ駄目絶対！」

「鉄砲？」

こちらの説明を聞くと、少女は顎に手を当て、瞳に懐疑の色を濃く映しながらじつとこちらの手の内を覗き込み、口を開いた。

「確かに言われてみれば似てる気もするが馬鹿を言うな。そんな小さな鉄砲があるか。第一それには導火線すらないだろう」

「プツ。うわーくーちゃんふっるーい。おっくれってるー」

「……」

「ひ……！」

無言でゆっくりと振り上げられた握り拳を恐れるように両手を頭上で組んでぶるぶると震える。

「……貴様は人をおちよくっているのか」

「失礼な事言わないでよ。たしかにおちよくってはいるけど本当にこれは鉄砲なんだって」

「ちよつと待て」

「ふふふ、何を隠そうこれは西の国の最新技術が使われた……」

「おい」

「弾丸自体に火薬を込め、取り外し可能、4発まで一度に装填可能な弾倉に予め詰めておき更にはそれを回しながら撃つ事により速射性を、銃身を極限まで短く小型化する事により携行性を高め……」

「……」

物言いたげな少女を無視して説明を続けていると、すたすたとこちらのすぐ横まで歩いてくると、だんっと思いきり地面を踏み抜いた。いや、地面というよりはどちらかというとまあ俺の脚というか、つまりは小指なのだが。

「どうした。もう説明は終わりか」

「は、はい……そうですごめんなさい……」

頭上から北の雪山を思わせるような寒々しい声が降って来て、痛む足を押さえ裏返った声を上げた。

「しかしどうにも信じ難いな。西の新技术で作られた新兵器をどうしてお前のような浮浪者が持っている」

「いやね、この国境がこうまでこじれる前に捨てられてたの見たのよ」

「……何故新兵器が捨てられる」

訝しげにこちらを見る少女に、こくりと頷く。

「使ってみてわかったんだけどこれ、やっぱり銃身が短すぎて弾が全然まっすぐ飛ばないんだ」

「玩具どころかガラクタではないか」

「火薬込めるから弾だからただ丸くすりゃいいってわけじゃない上にほんのちよつとの歪みが原因であらぬ方向に飛んでいくんだ。自分で試した時は斜め前の木陰で昼寝してた野犬の尻撃っちゃって危うく食い殺される所だったな」

しみじみと語るも、既に少女は興味を無くして落胆を隠し切れなといった顔で鞆の残りを漁っていた。

と、その時少女の動きがぴたりと止まる。大体予想はつくが目を向けてみてやはりそうだと確認する。

少女の手には先程兵士にも勧めたあの剣があった。それを抜くでもなく、構えるでもなくただ柄に指を絡め、じっと見下ろしている。

「何？ その剣氣に入った？ なら護身用にでも一本どう？」

正面に屈みこんで軽口を叩くが、帰ってきたのは至極真面目な視線だった。

「貴様、本当にただの商人か？ この剣は尋常な物では無い。それとも、お前が仕入れる先ではこのような剣がゴロゴロと転がっていると言うのか？」

問いかけてくる瞳には目一杯の疑心。その審美眼につい目を見開いてしまう。

「うん、まあ転がっちゃいないね。それは西の名匠が作り上げた最後の剣、さっきの色物とは違って掛け値なしの最高級品さ。まあ普通はこんな物どうやったって手に入らないだろうね」

「そんな大層な剣を何故貴様が持っている。どうやって手に入れた」「いや、普通に買った」

ぴきつ、と音が響いたような気がして、気付けば少女のこめかみに青い筋が浮き出ている。俺は両手を前に出し慌てて口を開く。

「いや本当だつて！ 夢で神様に『武器を売りなさい』ってお告げがあった日の朝に変なオッサンの口車に乗せられて売りつけられたんだよ！」

「……色々と言いたい事はあるがそれは置いておくでしょう。仮にお前の言う通りに怪しい男から話を持ちかけられたとして、どうして貴様如きが買う事が出来る。これは世が世なら一国の王が持つていてもおかしくはない代物だろう」

……よくもそこまで見抜ける物だ。

向けられる視線から目を逸らし、ふと空を見る。目に痛いその青さを仰ぎながら、臍に溜まる鬱屈した空気を吐き出すようにそれを口に出した。

「まあ、世が世だからね」

少女は一瞬臍に落ちずに口を開くような素振りを見せたが、すぐにそれに気付き、納得したように空きかけた口を閉ざした。本当に妙に察しが良い。

もう、剣なんて物は需要が無いのだ。いや、剣に限らず、槍も、弓も、大筒もいらない。何故なら、もうそれを振るう相手……魔王がいなくなってしまったから。加えて、先の戦乱で秘蔵とされていたはずの武器が大量に出回り、西の剣という物の価値は大幅に下落してしまっただ。

改めてそれを思い出し、胸に去来した寂しさから目を背け、ははっと小さく笑いながら少女の手から剣を受け取る。

「で、どうする？ これ買う？」

「誰が買うか。そんな物を買う金はない」

「大丈夫大丈夫、くーちゃんならちよつと娼館に堕ちれば軽ーく稼げるって！」

「……護身具を買う為に身売りをする馬鹿がいるのか？」

予想通り手厳しくあしらわれ、剣を鞆に詰めなおす。少女はすつと立ち上がりこちらに背を向け歩き出した。

「もう行くのかい？」

「ああ。貴様という人間の事は大体わかったからな。これ以上語る事もあるまい」

「くーちゃんがここで何したいのかわからないけど、その服遠くか

らでも気付くくらいすっごい臭うから洗った方がいいよー」

その背中に向かって手を振るが、少女は振り返る事も声を返す事も、足を止めることもせずに行く道を進んでいく。羨ましいほど真っ直ぐな人間だと、思わず笑みが顔に浮かぶ。

……と、そのままどこかへ去って行くと思っていた少女だが、何かに気付いたかのように足を止め、こちらに真っ直ぐ戻ってきた。何事かと様子を見てみると、おもむろに俺の鞆の中に手を突っ込んでそれをつかみ出し、俺の顔の前に突きつけて口を開いた。

「お前、これも売るつもりか？」

「いんや、それはいつのまにか混じってたガラクタだけど」

「そうか。では貰って行くぞ」

それを懷に収めると、またこちらに背を向けた。

「……くーちゃん、それが何かわかるの？」

その価値が全くわからなかった俺は、わざわざ戻って来てまでする事かと気になり尋ねてみた。少女はああ、と頷き、端的かつ明瞭に、その幾重にも折り畳まれた白い紙切れの概要を説明した。

「外洋から伝えられた、意思疎通の不備を指摘する際に用いる祭具だ」

大陸南西、国境の町及び戦場にて：5

翌日。俺はまた街中を駆けていた。いつも通り仕事の途中で罵声を吐いていたらとうとう門から出てきた兵士に殴りかかれそうになり急いで逃げ出してきたのだ。

追跡を撒くのは慣れたもので、屋根の上に伏せて駆け抜けていった兵士の背中を見送り、そこから地面に飛び降りた。

「うーん、これなら次あたりいけるかなー。怒ってたけど剣は抜かれなかったし」

腕組みをして、確たる根拠のない呟きを漏らしながら町を歩き始める。さすがに追い立てられてすぐに出向くような真似はできない。どこか適当に時間を潰せる事はないか考えながらぶらついていると、ふと身に覚えのある気配を感じた。丁度いいのでそちらに向かって行くと、やはり昨日出あった全身黒尽くめの少女がいて、こちらの顔を見るなり眉根を寄せた。

それに向かって手を振って声を掛けようとして、全身が硬直する。少女の背中越しに見えるそれを目にした瞬間、掌がじつとりと汗ばみ心臓が大きく跳ね上がった。

動揺するな。心中で何度も何度もそう呟いたが、それはとうとう押さえきれず、わなわなと震えながら声を張り上げる。

「くーちゃん誰よその男?! ひどいわ! アタシとの事は遊びだったのね!」

そして、少女の背後にいた穏やかな顔つきの若い男をびしっと指差した。

当の本人達は、片や曖昧な笑みを浮かべながら首を傾げ、片や無

表情のままにつかつかところちらに歩み寄り、遠慮の無い前蹴りで俺の腹部を蹴り抜いた。悲鳴も上げずに前のめりに崩れ落ちると、背中に強い圧力を受けて喉から潰れた蛙のような呻き声が漏れた。

「お前が何を言っているかはさっぱりわからんが、とりあえずこうするのが正しいと判断した」

「ご、ごめんなさい……」

「こら、イヴ。暴力は駄目だよ」

遠くで呆けていた若い男がそう言いながら慌てて近付いてくると、少女は見るからに苦々しい表情を浮かべ不機嫌そうにふんと鼻を鳴らすと、背中に乗せられていた足をどけた。

背中を摩りながら起き上がろうとすると、目の前にすつと掌が差し出される。視線を上げるとその若い男はにこりと暖かな笑みを浮かべた。その余りの眩しさに、その手を掴みながらも思わず目を伏せた。

「こつした細かい気配りがモテる秘訣……そうやってくーちゃんの事を手籠めにしたのね畜生羨ましい……ていうかくーちゃんそんな名前だったんだ」

「何を勘違いしているかわからんが、私とそいつとはお前が考えているような間柄ではない」

俯き目元を拭う俺にやけに嫌そうな顔をした少女の声が届く。視線を向けるとやはり非常に不機嫌そうに腕を組み、壁に背を預けてつんとそっぽを向いている。目の前の若い男は何がどうなっているのかわかっていないようで、情けなさすら感じる弱々しい笑みを浮かべながら頭を掻いた。

「てつきり昨日のうちに二人で式を挙げて熱く激しいやらしい初

夜を過ごして少女から女になったからそんな貞淑を絵に描いたような服装してんのかと思っただけ、違うの？」

「貴様はやはり昨日の内に縛り上げて兵士に突き出して置いたほうが良かったようだな」

血塗れの黒いローブからやや丈の余った修道服姿になっていた点についての考察はさっぱり外れていたようで、最早殺意すら籠った禍々しい視線が飛来してくるのを気付かぬ振りして視線を逸らす。

その俺達のやりとりを見ていた若い男は、何度か互いの顔を交互に見てから合点が言ったという風に手を打ち、口を開いた。

「昨日……ってことはイヴ、この人がさっき言ってた浮浪者の？」

「浮浪者違う？！ くーちゃんどんな説明したのさ！ 冗談はいから本当の事教えてあげてよ！」

「冗談も何も事実貴様は浮浪者だろう」

「ち、違わい！ 確かに住所不定だけどちゃんと職を持った立派な大人だ！ ほら！」

寒々しい侮蔑の視線を受けながら慌てて鞆を開き、覗き込んでくる若い男に対し、昨日少女にした説明をそのまま繰り返す。

「というわけで俺はさすらいの武器商人なのさ！ お兄ちゃんも一本どうだい？！」

「いえ、僕剣とかよくわからないんで」

僅かな間すら挟まずに向けられたその言葉に、思わず希代の名剣が地面に落ちて乾いた音を上げた。それを追って膝から崩れ落ち、地面に四つんばいになる。

「うう……男だったら……男だったら剣に心躍らせてしかるべきだ

ろうよう……ぐすつ……」

「あの……なんかすいません……」

「いちいち相手にするな。放っておけ。お前は先を急ぐのだろう」

少女が疲れた声色でそう言つと、俺の前に屈み込んでいた若い男は一度こちらに視線を向け、申し訳なさそうに目を逸らしてすつくと立ち上がった。

「何？ 兄ちゃんどっか行くの？」

少しばかり気になつて、小芝居を中断して尋ねてみる。少女は背を向けたまま無視したが、若い男は振り返り、ええ、と頷く。

「ちよつと、あの向こう側まで」

それに視線を向けながらそういつた。

思わず、眉を顰める。その若い男が指し示した方角は、国境側。ようするに戦場だ。今の時期にそこに向かうという事は、やる事はひとつ。

「ちよつと正気なの？ やめといたほうがいいんじゃないかなー。兄ちゃん、どう見ても戦う人じゃないよ」

口から飛び出したのは少なからず本心から飛び出した言葉だったが、若い男は何も言わず、ただ黙って困つたような笑みで頷き、先を歩く少女の背を追って駆け出した。

一人ぽつんと取り残され、地面に大の字になつて空を仰いだ。濁つた青色を目に映し、先程別れた男の顔を思い浮かべる。少女よりも一回りは年上のはずのその顔が、どうしてか幼い無邪気な子供のようになんか思えず、脳裏に自分の故郷にいたそれらの顔が次々と過

ぎつては、考えたくない光景を連想し、堪えきれずに溜息が漏れた。

「あーもう、やだなあここ。やなもんばかり見てる気がするよ」

ずっと胸の内で留めていた事がついに喉から漏れ出て、空に放たれた。しかし胸が軽くなることはなく、むしろ更に澱みを増して気分が陰鬱な翳りをもたらす。

「ああ、嫌だ。あんなのの戦うとこなんか見たくないわ」

体を起こし、鞆を掴んで立ち上がる。予定よりもずっと早い仕方が無い。それよりはずっといい。

重い足を引き摺って、またいつもの場所へ歩き出す。そして口には出さずに心中で呟いた。

もう、この仕事を終わらせて、早くここから立ち去ろう。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：5（後書き）

グダグダやがな……

次回の投稿はちょっと時間がかかるかもしれません

大陸南西、国境の町及び戦場にて：6

「はいはいごめんくださーい！ 毎度お馴染みハンサム商人さんのお出ましだよー！」

もう見慣れた門の前、いつも通りの大声を張り上げながら鍵の閉められた扉に握り拳を叩きつける。扉の向こうから苛立つ声が聞こえるが、構わずに開くまで何度も何度も。我ながら利口な方法とは思えないが、これしか手段が思いつかないのだから仕方が無い。

と、そこで思ったよりもだいぶ早く鍵の開く音がして、扉に僅かな隙間が開く。

「また……いや、もう来たのか」
「よっ」

怒りを通り越してもはや呆れしかないといった顔のその兵士に俺はびつと手を上げて笑いかけた。まあ半日も経たずに再度顔を会わせるのは今まで何度もこういったやり取りを繰り返してきて初めての事なので、そういう反応も仕方が無い。

「お前なあ、いい加減もう諦めるよ。わざわざお前の武器を欲しがる奴なんてどこにもいないんだ」

「何をう！ そうとは限らないだろ！ 戦おっ始めようってくらい大勢の兵がいるんだ！ 中には一人くらい実家が大金持ちでいくら金を積んでもいいから凄い武器が欲しいっていう物好きな刀剣収集家だっているかもしれない！ その可能性がある限り諦めないんだ俺は！」

眼前で拳をぎりりと握り締めながら力説し。

「お前があんまりしつこいから、西の剣に金貨30枚出せる奴いるかどうか兵士全員に聞いてみたけどそんな奴は一人もいなかったぞ」

言った直後に否定されてその場でこけた。まあ無理だろうなとは思っていたものの、はつきり真正面から言葉にされるとやはり傷つくものだ。

「ぐぬぬ……なんて世知辛い世の中なんだ……」

「わかつたろ、もう帰れよ。それで、そんな商売やめて田舎で畑でも耕してろ」

「ま、待って！ 後生だかギャー痛えー！」

閉められそうになった門の隙間に捻じ込んだ指を挟まれ、思わず叫びながら地面をのたうちまわる。何故だか最近のたうちまわってばかりのような気がしないでもない。向こう側にいる兵士は扉の隙間を少しだけ広げて顔を出す。

「急に手を出してくるなよ、危ないだろ」

「知らん仲じゃないんだからもうちょっと心配してくれてもいいんじゃない？」

「知らん」

挟まれた手を殊更ぱたと振って見せながらの主張があっさり受け流されて地面に座り込みながら溜息をついた。

「……お前さあ、ふざけてばかりで何処から何処までが本気なのかわからないけど、もうやめとけて」

溜息をつきながら若い兵がそう言うてくる。とりあえずは門前払

いは避けられたようだ……が、その声色に今までにない哀れみの色を感じて、おもわずむっと表情が強張る。

「なんだようっせーな」。確かにこのご時世じゃもう剣なんか売れないだろーさ。だからこそここを逃したら……」

「お前、そこまでわかってるなら本当は気付いてるんじゃないか？」

こちらの言葉を遮って発せられたその台詞が少しばかり核心に触れられて、思わず息を呑んだ。顔を伏せ、髪の切れ間からそいつを見上げると、やっぱりな、とでも言いたげな顔をしている。

「あんまりしつこいから教えてやるけど、ここの連中の装備はほとんど西から貰った奴を使ってるんだよ。先の魔王討伐の際に各国に大量にばらまかれた奴を」

「……」

別に驚きはない。たぶん、きっとそうだろうとは思っていた。黙り込んでる俺を見かねたのか、兵士は気まずそうに顔を背けながら言葉を続ける。

「そりゃ、確かに西の武器は凄いよ。訓練で何度か打ち合ったけど、硬くて重くて、それでいて鋭い。訓練の間、刃毀れした剣はあつても折れた剣は1本もなかった。1本売れば家が買えるなんてただの比喩だと思つてたけど、確かにあればそれだけの価値はあつたさ。

でもな、それだけの価値があつたのは、剣としての出来以上に手に入りづらかったからだ。モノも職人も国の内側に囲い込んで、他国でそれを手に入られるのは精々王侯貴族くらいのもんだつた。今じゃ魔獣退治のために大量に作られた物がどこの国にもあるし、それを修繕するための職人もちよつと頑張つて探せば見つかつちまう。お前は剣なんか売れるのはここだけって言つたけどさ、『西の剣だ

から『買っなんて奴は、ここだけじゃなくもつどこにもいないよ』

全て聞き終わり、奥歯をぎりりと噛み締める。長々とゆっくり、解り切ってる事を長々とよく語ってくれた。

しばしの静寂の時間が過ぎ、俺はゆっくりと立ち上がる。そして伏せていた顔を上げて、目の前のそいつをきつと睨みつけ。

「うるせーばーか！」

余りにもあんまりな捨て台詞を残して踵を返し。

「あっ」

背後に置いていた大事な商売道具の詰まった鞆に足元を掬われて顔面から地面に突っ込み、前に1回転した拳句にもう一度顔面を地面に埋めるといふ無様なまでに滑稽な姿を晒した。

「……大丈夫か？」

「こ、腰が……」

顔を土に埋めながら腰に片手をあてて痛みを訴える。

「何をしてるんだお前は……」

「い、痛……ひぎい……あ、あの……もうわかりましたから、少し休んだらもう帰りますんで、よろしければ休める所まで肩を貸してくれませんか……？」

我ながら奇怪だと思える呻き声を上げながらそう懇願すると、その兵士は大きく溜息を吐きながら一度門を閉めた。見捨てられたかと思っただ、中からぎいと鉄同士の擦れる音が響いた。恐らく内側

の門を外しているのだろう。

「……ここを勝手に開けたの、誰にも言うなよ」

その予想はやはり当たっていたようで、開いた門の中から現れたその若い兵士は苦笑しながら、俺に向かつて手を差し出してきた。

俺はその手首を握り、すつくと立ち上がりながら左手で懷の短刀を取り出し、そいつの甲冑の隙間を縫って喉元にすつと突きたてた。

「……？」

その表情と口元の動きから見て恐らくは、え、と声を上げたつもりだったのだろう。氣道を完全に塞いでいる短刀をすつと横にずらすと、広がった傷口から心臓の拍動に合わせて勢い良く血が噴出し、避けそこなった左の袖が血に染まった。

音も無く力尽きたそいつの体を抱いて地面にそつと横たわらせ、甲冑を脱がせて腰元を漁る。そう時間もかからぬ内にじやりと音を立てる鍵束を見つけ、それを取り上げた。残った死体はすぐ見つかったはずいので、担ぎ上げて適当な民家に放り込み、来た道を戻る。

幾度も通い、じつくりと時間をかけて警戒心を薄め続け、ようやく開け放たれた門の前に立つ。先程俺が蹴り倒した鞆を開き、その中に仕舞って置いた、いままで幾度ももの仕事を共にした大切な商売相棒道具を取り出した。

いよいよ、という所に来たからか、ふとさっきの兵士の呆然とした死に顔が脳裏を過ぎった。そして、俺がそいつに言った言葉も。嘘は言っていない。俺は確かに今から帰り道を辿って行くのだ。ただ、ちよつと道すがら仕事を片付けるものの、完全に嘘であるとは誰も言えないはずだ。だから俺は謝らない。今更謝っても意味が無いからではなく、自分の行いを是と決めうち、確固たる意志を持つ

て謝らない。

すうっと大きく息を吸い、鼻腔に漂う微かな血の臭いを引鉄に、長らく止めていた歯車が胸の裡で回りだす。

「さ、仕事を片付けますか」

愛剣の柄をしっかりと握り、最後にそう呟いて敵国の砦へと、同時に西の故郷へと一步を踏み出した。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：6（後書き）

時間がかかると言ったが、スマンありやウソだった
じゃなくて、時間がかかるのは次回のことでした、すいません

あと主観視点キャラつかって読者を騙そうとするとか無駄にこった
事はもう二度とやらない……能力不足で文章滅茶苦茶になる……

幕間：鬼神降臨（前書き）

今までで一番長いけど特に読まなくてもだいたい話は通じます

幕間：鬼神降臨

「おいダニー、いくらなんでも気抜きすぎじゃないか？」
「ん、悪り」

戦時下。かつ最前線の基地内。この状況でソファーに横になって本を読み、あまつさえ欠伸までしている同僚を咎めると、気の抜けた声で返事が帰ってきて溜息をついた。そんなこちらの様子が気になったのか、同僚は本を閉じて体を起こす。

「でもさあ、いくら戦争中つつてもこんな場所まで気を張り詰めとく必要はないだろ？」

「それはそうだけど……」

それにしたって気を抜きすぎだ、とは何度も言っただけで今更口にせずともわかってるだろう。

確かにここは戦地の最前線だが、その中では最も戦火から遠い場所。町側へ出る裏口前の警備室だ。まかり間違っても何の連絡もなしにここが襲われるような事はないだろう。

「それでももしかしたら町側から密偵が忍び込んできたりさ」
「あるわけないだろそんな事。西は城砦が崖まで続いてるし、東の切れ目は央国跡地で未だ魔獣の巣だ。そんでもってばれないように海を渡るにしても遠洋は潮の流れが複雑すぎて、名高い東端の国の船と航海士でも揃ってない限りはとてじゃないが渡ってこれない。地続きに東から回ってくるのはあるかもしれないが、時間がかかりすぎるしそれならわざわざこんな所じゃなくて首都に侵入して暗殺

でも企てるだろ」

はつきりと言い切られ、反論の余地なく黙り込む。はつきりと正論でぐうの音も出ず、それでも今神経を削って戦っている仲間がいる以上、最低限の緊張は共有しておくべきだという感情を飲み下した。

「それよりジョニー、もうそろそろ交代の時間だぜ。さっきあの子のバカの声がしたから早いとこ労わってやんねーと可哀想だろ」
「……気が抜けるから本名で呼んでくれ」

言いくるめられた直後で気が乗らず。どこか重い足を引き摺ったのたとダニーの後に続く。

「……そうだ、ひょっとしてあのバカが西の密偵だったりしてな」
「それはないだろ」

ははっ、と申し訳程度に笑う。あまりに気落ちしているのを氣遣ったのだろうが、さすがにその冗談は有り得なさ過ぎる。

いつものバカ、あのバカ、というのはこの基地では有名な人間だ。戦が始まる少し前辺りから町に現れ、法外な値段で武器を売りつけようとして当然の如く突っぱねられ、泣きながら罵声を吐いて兵士に追われて去って行くのを日課にしている。いや、それが日課なのではないだろうが、結果としてそうなっているのだ。密偵のやる行動にしてはあまりに突飛すぎる。

「お？」

扉に手を伸ばした同僚が、妙な声を上げながら腕を引く。体越しに覗き見ると、扉がひとりでに開き始めていた。

風の流れて開くような扉ではないはず、と怪訝に思いながら様子を見続けると、扉が開いた隙間をするりと抜けて現れる人物が一人。ついさっき話題にしていたそのバカだった。そのバカは足早にダニに近付き、通り際ゆっくりと、しかし一切の無駄と迷いのない動きでぽかんと口を開けて立っていたダニの首筋に右手を撫でるように這わせた。同時にダニの首から赤いものがぶわっと噴出し、ごぼごぼと水泡の立つ音を発してダニが床に倒れた。

「だっ……」

ダニ。と、剣に手を伸ばしながら名を呼ぼうとしたその瞬間に、無手のそいつの左手親指がこちらの喉に突き刺さった。激痛と喉の違和感に咳き込みたい衝動に襲われるが、突かれた喉は指が放された後もまだそれが残っているかのように空気を一切通さない。柄に添えていた手を離し、喉を押さえながら体が前に折れる。

その瞬間に、とても不思議だと思った。視界一杯に広がるはずの床板が目に入らず、かわりに人の膝がどんどん近付いてきたのだから。

「おい、そこのお前」

「あ、はい！」

廊下を歩いている所を呼び止められ、そちらを向き直立して敬礼

する。4人からなる相手の一団は見る限り全員が自分と同じ一般兵だが、それでも僕から見れば上の立場だ。しかし、その事情がわからない相手はこちらの様子を見て怪訝な顔をした。

「なんだその態度。俺は別にお前の上官じゃないぞ」

「はっ、しかしその、自分は1週間前に徴用されたばかりですから」
「ああ、町の志願兵か」

リーダー格らしい一際いかつい男が、納得がいったように顎に手を当て頷いた。

僕は言われた通り、元々この町に住む一般人だった。戦う事には全く興味がなく、街が戦場になるかもしれないと言われてもいざ避難が始まるまでは兵になる決心も決められなかった。そのくせ、今でもたまに怖くてその選択を後悔している腰抜けでもある。

だから、その前から自分の意思で戦いに赴いた兵士達には敬意を払いたいやら、情けなくて申し訳ないやらでつい体が固くなってしまふのだ。

そんな意志を見透かされたのか、全員がにやにやと口の端を歪ませている。

「くだらない事気にする奴だな。貴族連中や亡失国の騎士団でもあるまいし、入ってから時間で露骨に差別するような奴はここにはいないぞ」

「ひゃい」

囁んだ。

一瞬の静寂の後、どつと笑い声が沸きあがる。羞恥で真っ赤に染まる顔を隠そうと伏せた頭に分厚い掌がばしと叩きつけられる。

「はっはっ、は、ひい……それで、どうした。ここらには今はわし

らと裏門警備の連中しかおらんぞ」

「その、アーノルド殿を知りませんか。クレスト隊長殿から隊に一人加えたい者がいるから来るようにとのお達しがあって」
「ああ、それはわしだ」

4人のリーダー格のいかつい男……いや、アーノルド殿が己を誇示するように胸を張って腕組みをした。

「そうでしたか。では隊長の元へ……」

「そしてお前が新たな隊員というわけだな」

「……へ？」

どう反応したらいいのかわからずに適当に流そうとした瞬間に放たれた言葉に、思わず素っ頓狂な声を漏らす。敬礼すら忘れて口を開いてぼうつとする僕にアーノルド殿は言葉を続けた。

「お前は知らなくて当然だが、うちの組では新入隊員の通達にはその隊員を向かわせる事になつとるんだ。本人に知らせないのはまあ、その人間の人となりを見極めるためにな。これから肩を並べる事になるとわかっていると媚を売ってくる奴もいるんだこれが」

「だいたい奴はお前みてーにえって顔して終わりなんだけどな、昔いたんだよ面白い奴が」

「ああ、『何で俺が使いつぱしりみてーな真似しなきゃなんねーんだ』って言いながら来た奴ね。下級貴族の次男で腕もそこそこ立つてんですっげえ調子乗ってた奴」

「うむ。隊長殿の部屋についた途端に口調が変わって礼儀正しくなったと思いきや、自分の配属先を聞いて顔を真っ青にした奴だな。あれは傑作だった」

「あの、その時の事はもう勘弁してください本当に。若かったんですよ俺」

はははは、と4人が身内同士にしか通じない笑い声を上げた。
話はさっぱりわからなかったが、とにかく僕はこの人達と共に戦うことになるということはなんとか理解できたので。

「あ、アーノルド殿」

「ん？」

「フレッドです。これから、よろしくお願いします」

敬礼をやめ、深々と頭を下げた。

「おう、礼儀正しい奴だのう誰かと違って」

「もうやめてください！ 泣いてる子もいるんですよ！」

「それお前の事じゃねーか！」

ふたたび大きな笑い声上がる。先程は混じれなかったそれに、今度は僕も自然と釣られて声を漏らした。

その時、笑い声に紛れてきい、と戸が開く音が聞こえた気がした。気のせいじゃないかと思えるほど小さいそれが妙に気になり、視線をそちらに向けるとそこには若い男が立っていた。若いとは言っても僕よりはずっと年上で、30を過ぎたかどうかという風体の男が、無表情に立っている。

その男と目が会った。瞬間に全身が総毛立つ。あれは危険な生き物だと本能が叫び出している。

男が音もなく駆け出す。そこで初めて男が剣を持っているのに気付き、震える体を押さえつけながらそいつの方へ指を向け、声をあげようとする。

しかし、声を上げる前に一人が気付いた。その男に一番近く、僕から一番遠かった「泣いてる子もいるんですよ！」の人が振り向き、血相を変えて柄に手を添える。

「かつ」

が、遅かった。男の抜き放った剣は、彼の刀身が鞘から抜ききれぬよりも先にその切っ先を喉元に突きたてていた。彼の体が崩れ落ちる。

それと同時に、他の全員もそれに気付いた。彼らは混乱するよりも、怒るよりも早くに剣を抜く。

横に並んでいた二人のうち、長身の男が刀身だけで己の背の半分ほどもある長剣を抜き、走ってくる男に向かって突き出した。狭い通路でそれしか選べない選択肢ではあるが、中肉中背である相手に間合いで挑むのは決して間違ではないだろう。突き自体も無駄のない動きで速く、狙いも正確だ。

が、男はその正確さを逆手に取り僅かに頭の位置をずらすだけで、握っていた剣を捨て勢いをまったく緩めずに走りながらそれを回避した。体勢を低くし、驚愕する長身の男の膝裏に懷から取り出した短刀を突き立てる。重心を取る軸足を傷つけられ体を揺るがせながらも、彼は倒れこまずに突き出した剣を逆手に握りなおし、足元へいる男を穿とうと二の突きを放つ。男の脇腹辺りへと向かった剣先は、しかし空を切り床の床に突き刺さった。

男は剣先が迫るより先に両手で自身の体を跳ね上げていた。上下が逆さになったまま、己の背中に隠れて敵を見失った長身の男の首へと片足を絡ませ、全身の力で体を回す。ごぎり、という嫌な音に続いて長身の男の体は、首を折られた勢いのままにその後ろで剣を構えていた男に投げつけられ、その胸を味方の剣に埋めた。地面を転がった男は、死体の重さに倒れこんだもう一人の男の体に飛び乗ると親指を目に突っ込む。悲鳴を上げようとする男の髪を空いた手で掴み上げ、勢いを付け更に親指を深々と突き入れると、裏返った喘ぎ声を漏らしたきり一切の動きを止めた。

全部あつという間だった。3人が瞬く間に、傷一つつける事もで

きずに死んでしまった。殺されてしまった。みんな強かった。突然の襲撃にも、仲間の死にも戸惑わない強い戦士だった。それが、一瞬でみんな。

かちかちとけたたましい音が鳴り響き、体を竦めたところでそれが自分の奥歯の音なのだと気付く。意識すればするほどに震えはより強くなり、両手で体を押さえても押さえる事はできない。

ここで、僕は死。

「フレッドオ！」

絶望が過ぎつた頭に力強い叫びが割り込んできて、体の震えが弱まる。目の前にはアーノルドの巨大な背中があり、僅かばかりの落ち着きを取り戻す。

そうだ、たとえ相手がどれだけ強かろうとも戦いもせずに諦める事は許されない。僕はもう兵士なのだから。

からからの喉に唾を無理矢理流し込み、腰に下げた剣に手を伸ばして。

「今すぐ逃げろ！」

次いで放たれた言葉に耳を疑った。

怯えているのを見抜かれ失望されたのか。情けなさで涙が滲みかけるが、腰を深く落とし微動だにしないその背中を見てそうではない事に気付く。それと同時に剣から手を離し、踵を返して駆け出した。

彼は、アーノルドは死ぬつもりだ。

どうやっても勝てないのを悟り、あそこでただ立っている事でできる限りの時間を稼ぐつもりなのだ。その間に逃げると、逃げて仲間知らせて、自分の死を無駄にするなど、彼はそう言っている。

ならば、一刻も早く逃げ出すのが自分の役割だ。彼の予想よりも

ずっと速く逃げて仲間の下へたどり着けば、もしかしたら予想外に彼の命まで助かるかもしれない。

視界を滲ませる涙を指で拭い去り、強い決心とともに足を踏み出す。

そして突然に胸を襲った熱さに気を取られ、踏み出した足は床を滑り転倒した。

「ひゅっ、」

おかしい。息が苦しい。熱いのは胸なのに、痛いのは倒れた顔なのに、動かないのは足なのに、どうにも息が苦しくてたまらない。膝をついたまま、熱い胸に手を当てる。ぴちゃりと湿った音がして、ぬめりけのある液体が掌にこびりついた。目の前に持つてくると手が真つ赤に染まっている。どうやら、胸に穴が開いているらしい。

わけがわからなかった。あの男との距離はまだ遙か遠く、矢が飛んで来たわけでもなく突然に胸に小さな穴が開いた。痛みからして背中から胸に突き抜けたようだが、その物品すら見当たらずに僕はただ胸から掠れた音を漏らして戸惑うしかなかった。

「あゝっ」

短い悲鳴が聞こえてくる。目の前が真つ暗になってきてよくわからないが、きつとアーノルドが死んだのだ。音の濁ってきた耳にかつかつとこちらに向かう足音が入ってくる。

目からぼろぼろと大粒の涙が零れた。

痛みのせいではない。恐怖のせいでもない。

ただ哀しくて悔しくて、情けなくてたまらない。

僕は戦うためにここにきたのに。

僕は逃げることですらできずに死ぬのだ。

この前線基地では、戦闘行動中でない勤務中の兵は大抵この談話室に集まっている。基地の中心部にあたるこの場所は、緊急時における連絡網の発信源や配備の見直しに適しているからだ。

「どうかしたかダズ」

「ん？ いや、オッサンのやつ遅えと思つてさ」

無論それは階級とも無関係であり、目の前の若くしてこの前線指揮官に任命された希代の天才クレストも多くの時間をここで過ごしていた。

「大方フレッドが道にでも迷っているのだろう。あの辺りには寄り付かなかったからな。町の近くまで行って衝動的に帰りたくなるのを堪えきれなくなるとでも思っているんだろう」

「帰りたいなら帰りゃいいのに」

「そう言う訳にもいかないだろうさ。この町は彼の故郷だからな」
「……ふうん」

自分で聞いておきながら気の無い返事を返すのはどうかと思ったが、実際孤児である俺がわかる感情でもないので正直に興味なさ気な声を返した。

「それで、あのオッサンに押し付けるってことはあのひ弱そうな坊主も見込みありって事なのか？」

「気になるか？」

「ああ。なんたって歴代最年少で指揮官にまで抜擢された聡明なクレスト隊長様が、自分が育った古巣に直々に送り込もうってんだからな」

「それを言うなら君こそ我が国で唯一の素手での魔獣討伐を成功させた天才戦士だろう。あまり人の事を仰々しく扱うのはよしてくれよダズ副隊長殿」

あまり褒められすぎるのもいい気はしないのだろう、少しばかり疲れた顔でそう言って手元の書類をこちらに渡してきた。先程の坊主の事が書かれているらしいそれを適当に流し読みする。

フレッド・ニース、24歳。家族構成、両親と弟1人。実家は医者で幼い頃から両親の手伝いをし、医療の心得がある。学校には行っていないものの、自主的に勉学に励む勤勉さを持ち独学ながら豊富な知識を持つ。それと、追記で非常に合理的な考え方をするともある。

「……見たとこ、大人しく町に帰って医者でも学者でもやってた方が良さそうなんだが」

「私も最初は同意見だったよ。肉体的には特に優れた箇所は見当たらず、彼が戦場で生きていけるとは思えなかった。だから少しばかり、町を離れる前の町民たちに彼の事について尋ねてみた」

……相変わらず真面目な奴だ。そんなだから皆に天才だと持て囃

されるのだとは恐らく気付いていない隊長殿は、そのまま言葉を續けていく。

「その時少しばかり気になる話を聞いたんだ。彼が9歳の時、ある妊婦を彼女の両親が看たらしい。母子共に命の危険があり、このままでは両方とも死ぬという状況だ。これに立ち会っていた彼は悩む両親に言ったらしい。『子供が無事な内に母親を殺して腹を割いて子供を取り上げよう』とな」

思わずあぐりと口を開く。先程の気弱そうな男の、しかも幼い子供の時代に出した言葉とはとても思えない。

「彼の名誉のために言っておくが、彼は冷酷ではあっても冷酷な人間ではないよ。本人に尋ねてみたが今でも油断した隙にその時の事を夢に見ると言っていた。彼はただとても理に叶った考え方をしてそれを実行に移せる人間であるという事だ。そういう考え方でできる彼なれば、戦を肌で感じる内に優秀な指揮官になってくれるだろう。アーノルド殿に頼みたいのは、彼の精神が戦場に耐えていけるかどうかの値踏みさ。ここからは以前と違って、毎晩悪夢で魘される様ではやっていけないからな」

「……ああ、なるほどね」

まだまだ納得いかない部分があったが、とりあえずはそういう事にしておく。一番納得していない部分は、おそらく聞いてもはぐらかすに決まっているから。

指揮官が欲しい、というのはつまり、今の指揮官に不満があるか、その代えを欲しているという事だ。こいつは自分の能力を低く見積もる男ではない。ならば、自分に何かあった時の替えを欲しているという事になる。そして、つい先日に入ったばかりの人間にまでそれを求めるという事は、それが近いうちに起こるのだと思っている

のだらう。

「おい」

クレストが顔を上げる。俺は手元の書類を突っ返しながら、その目をじっと見て言う。

「死ぬなよ」

こちらの意図が伝わったのか伝わらなかったのか、クレストはふっと薄く笑みを零した。

その時、背筋にぞっと怖気が走り、勢い良く立ち上がった。何かとこちらを見上げてくる周囲を見渡し、悪寒の源泉を探す。

『鼻が効く』……と評される感覚を身に着けたのは、以前魔獣を倒した時だ。防壁をよじ登って入り込んだ小鬼と戦い殺されかけた瞬間、危険に対する勘が異常に働くようになった。この感覚を得た事により、意識が朦朧としながらも小鬼のとどめの一撃を避けて逆に致命傷を与える事が出来た。

嫌な予感が更に強くなる。そしてその方角をようやく察知し、その先にいる、扉に背を預けて茶を飲んでいる兵士に向かって口を開く。

「そこのお前！ 今すぐ扉から離れる！」

突然声を掛けられた兵士が戸惑うよりも先に、扉越しに放たれた斬撃が壁面ごと兵士の首を刎ね飛ばした。呆然とする生首と同時にティーカップが床に落ちて割れる音を立て、次いで扉が残された体を巻き添えに蹴り倒される。

突然の凶事に談話室が静まり返る。必然的に、その闖入者が床板を軋ませる音だけが辺りに響いた。驚き、あるいは怯えている兵士

たちの合間を悠然と通り抜けてそいつは俺達の前に立つ。

そいつは俺やクレストとそう年の変わらない、いやほんの少しばかり上という程度の若い男だった。自らの背丈の7割ほどもある長剣を担いでいるその男は、気だるそうな表情で懷を漁り、じゅらりと音を立てて鍵を取り出した。

「ちょっと聞きたいんだけどさ。正門ってどっち？ 鍵は手に入れたんだけど道がよくわかんないんだよね」

そう宣言した。

余りにも堂々とした侵入者に、談話室内の空気が粟立っている。誰も彼もが、大なり小なり、何らかの感情に囚われて戸惑いを隠せずにいる。

そんな中で俺はというと、やはり多分に漏れず、煮え滾るような一つの感情に支配されそれを爆発させないよう必死に押さえつけていた。

「おい」

「ん？」

返答を諦めたそいつが懷に鍵を仕舞いながら、気の無い声を上げる。俺は指でそいつの担いでいる剣を指差し、声の震えはできるだけ抑えながら告げた。

「その剣、どうした」

侵入者の体軀にまるで見合わぬ長剣。本人が持ち込んだものとは考え難く、ここに入ってからどこかで得たと見るべきだろう。

これは最終確認だ。おそらくはそうだろうが、もしそうであったならどうしようもない。あの剣を俺は知っているから。

そして侵入者はあっさりと言った。

「でっかいオッサンたちを殺して奪った。これが一番役に立ちそうだったから」

床板を踏み砕く勢いで飛びかかる。担ぎ上げられた長剣の振り下ろし、それを左の分厚く重い手甲で横に弾きながら最低限の硬さだけを重視した軽い手甲を装備した右拳をそいつの鳩尾目掛けて振りぬく。

きん、と軽い音が響いた。打撃が命中した音ではない。男には一切の装備が無い。弾かれた剣の柄を引き戻して盾に使われた。

近接戦で不利に働く満足に振れない長物を、男は地面に倒れこみながら体を回す事で自らの間合いに持ち直した。上半身を逸らすと目線のすぐ先を分厚い鉄の塊が駆けていく。それが振りぬかれた後、間合いを取られぬ内にまたそいつに飛びかかる。

瞬間、腹部に凄まじい衝撃。どのような平衡感覚を持っているのか知らないが、そいつはすでに体制を整え、振りぬいた剣の柄頭を使つて俺の腹部へ突きを放っていた。腹の中身が込み上げてくる感覚に、足が止まり、同時に背筋を悪寒が走る。頭上から迫る殺気が、俺の頭部へ放たれようとしている必殺の剣撃を雄弁に語りかけてきているのだ。

ひゅっ、と空気を斬る音、命を奪い去る音が響き、一瞬命を諦めたその時、甲高い金属音が響き、後頭部に鉄の塊がぶつかる感触を覚え、衝撃で感覚を取り戻した足で目一杯後ろに飛びのいた。

「っ……大、丈夫か！」

今さっき自分がいた場所を見ると、クレストが奴の放った刃を剣の腹で受け止めていた。頭部への衝撃はおそらく受け切れなかった衝撃で反対側が俺の頭に打ちつけられたのだろう。

二度ほど咳き込み、腹の痛みを無理矢理押さえつけてから口を開く。

「馬鹿野郎！ 俺を助ける暇があつたらそいつの首を取れ！」

軽口でも照れ隠しでもなく、本心からそう怒鳴りつけた。クレストは応えず、自分より一回り小さい体格のそいつに力で地面に縫い付けられている。側面に回り後頭部に蹴りを放つが、剣を盾に使い、更に体を浮かしてこちらの蹴りの衝撃を利用し間合いを取られる。

「う、おおお！」

吹き飛んだそいつの丁度後ろにいた兵士が掛け声と共に剣を振り下ろす。静止する暇もなく放たれたそれを、振り返りもせず手の甲で握りを叩き剣筋をずらす。気負いすぎ床に突き刺さった剣を抜くよりも速く、そいつの剣先が素早く腹部を貫き、その兵は絶命した。そいつは貫いた剣の柄を更に押し込み、柄に両手を添えて、横に降りぬいた。

「なっ……」

剣に刺さったままだった死体は振り回す力によって宙を舞い、俺に向かって投げつけられた。飛び散る血飛沫を護るため目を腕で押さえながら屈んで避ける。腕で狭められた視界の端に見覚えの無い爪先が覗き、反射的に両手を頭上で十字に組み合わせた。金属同士がぶつかり合う鈍い音が響き、衝撃と圧力に押し負け鼻先が床に激突し血の臭いが口中に広がる。叩きつけられたのは金属板を仕込んだ靴底だったようだ。頭上で剣を握りなおす気配がする。

剣先が俺の背中を貫くより速くクレストの剣閃が背後から奴を襲う。奴は体をやや屈ませてそれを避けるが、その瞬間に俺は緩んだ

拘束から抜け出し、全霊の力を込めて右拳を振り上げた。拳は確かに奴の体を捕らえ、その体を宙高くに吹き飛ばした。

だが気付く。違う、手応えが無い。奴は拳が当たると同時に自ら宙に飛び、自らの脚力と殴られる勢いを利用して空に逃れたのだ。攻撃は決まらなかった。だが、何も問題は無い。宙に浮く奴の後ろに、剣を構えたクレストが立っている。

地に足がついていなければ避けることはできない。勝利を確信し、クレストの突きを見送る。

ざすっ、という音が響いた。剣が人体を突き抜ける音ではない。クレストと、同時に俺の顔が驚愕に染まる。

奴は、クレストの突きを避けていた。天井に剣を突き刺し、それをよじ登って突きの範囲から逃れたのだ。

天井板を踏み砕き、解放された剣を握って落ちてくる。目標は渾身の突きを放ち伸びきったクレストの右腕だ。避ける事はできない。確実に殺すために体を浮かせすぎた。クレストの顔が蒼白に染まる。

「あああああ！」

無我夢中でそいつに向かって突き出した右拳が剣の柄頭を捕らえ、人を殴る用である薄い手甲が歪んだ代わりに奴の手から剣を奪い去る。武器を失ったそいつをクレストの剣が狙おうとするが、体勢を戻すより先に蹴り飛ばされた。地面に降りたそいつに駆け寄ろうとするが、無手のはずのそいつに自分が無惨に殺される光景が鮮明に浮かび、本能的に身を引いた。

「無事か！ 見えないような速さで斬られたりしてねえだろうな！」
「……助ける暇があったら首を取れ、じゃなかったのか」

仕返しとばかりに言い返してくる。何も言い返さず引き攣った笑みを返した。

今ならわかる。こいつ相手にそれをやるのは不可能だ。隙を突こうと思う度に自分が殺される光景が臉に焼きつく。やらないのではなく、できない。それだけの実力差があった。

場が膠着する。奴の獲物であった長剣は弾かれた際に兵士が拾い上げ、剣を腰に挿してはいるもののそれを抜いているわけではなく、ただ無防備に立っているだけだ。それでも誰も……この場で一番強い俺やクレストも含めた誰一人として、そいつに近付く事はできない。

「……全兵に告ぐ」

クレストが震える声を上げた。いつも余裕を保っていた隊長の変容に兵達に動揺が走る。

「剣を抜き、奴を取り囲め。ただし誰一人斬りかかるな。まずは取り囲むだけだ」

そう言つと、クレストは俺に目配せをしてきた。その瞬間に俺はクレストの意図を理解する。未だ動揺する兵達の前をゆつくりと横切り、奴を挟んでクレストの反対側に回り腰を落とした。そしてクレストの目を覗き頷き返すとクレストはそれを口にした。

「私達が奴を取り押さえる。その隙に私達ごと奴を突き刺せ」

先刻以上の同様が室内を走る。仲間ごと切り捨てろという非人道的な指示。しかも斬られるのは命令した当人とあつては仕方の無い事だろう。

「これは指揮官としての命令だ！ 浮つくな！ 冷静に考えて行動しろ！ こいつを生かせば、この基地は落ちるぞ！」

ざわめく室内に力強い一喝が響き渡り、喧騒が全て納まる。同時に今現在がそれほどの事態であり、目の前のたった一人の侵入者が、基地内……いや、国内最強の人間二人を犠牲にしても尚余りある獲物であるという事が伝わる。一人、また一人と剣を抜き、円を描く勝手に命を捨石にされた事に対する文句はない。あいつがああ言うなら必要なのだろうし、今までのやり取りでそれが安い買い物であるのも理解できる。

覚悟を決め、クレストと呼吸を合わせ摺り足で少しずつ近付いていく。

あと一步で剣が届く間合いに入り、奴が初めて動きを見せた。腰に下げていた質素な剣の柄に手を当て、抜き放つ。

瞬間、クレストは縦に構えた剣の腹に自らの肩を押し当て重心を落とし一瞬後の剣撃を耐える体勢を取り、俺は全身を駆け巡る灼け付くような凍気に悲鳴を上げた。

あれはやばい。受けてはならない。

研ぎ澄まされた六感により感じ取った脅威を相棒に伝える暇はなく、抜き放たれた剣は剣先も見せないほどの迅さでクレストの構えた剣とぶつかり、きん、という薄く小さく軽い音を立てて振りぬかれた。

ごとん、と音を立ててクレストの刃が地面に落ちる。それに続いて体がゆっくりと前のめりに倒れ、それに一拍遅れて切断された首が後ろに倒れた。

怒り、悲しみ、絶望、多様な感情がごちゃ混ぜになり、獣のように意味を成さない雄叫びを上げながら殴りかかる。奴はクレストのように剣に肩を預けて護りの体勢を取る。問題はない。それを見越した上での、装備破壊用の分厚い鉄板を仕込んだ左拳だ。クレストを剣ごと両断したその剣は、予想通り鋭さに特化した細く薄い剣だ。殴り壊すくらいはわけがない。

拳が剣の真芯を捕らえる。それと同時に、奴はあろう事か床板を

蹴り剣の腹をより強く俺の拳に押し付けた。倍化した衝撃はすべて互いの獲物に集中し、そして当然のように俺の左拳が粉々になる音が響き渡った。

絶望。最後の手札まで通用しなかった。全てが水泡に帰し、自分が今立っているのかどうかすら危うく感じる。

奴が肩から剣を離す。自らの命と、国の未来を諦めたその瞬間に、奴はその剣先を床に埋めた。そして何も持たない左手を開いたままこちらに向ける。

意味のわからないその挙動にしばし呆然とし、そしてそれを理解すると同時に、煮え滾っていた物が再び噴出した。

こいつは、俺を舐めて加減してくれているのだ。

「るあああああああああああああああああー！」

仇だとか、何のためだとか、細かい理由を全て排除した戦士としての純然たる怒り。放たれた右拳は今までの生涯で最高の迅さを誇り、己の目を持ってしても定かではない速度で駆け抜けた。

その拳を、片目をつぶったまま首を微かに傾け避けたそいつが、首と肩で伸びきった腕を軽く挟みほんの少し体を捻ったと同時に右腕が真逆の方向に折れた。

痛みに呻くより先に、前に突き出した左足を軽く払われる。崩れ落ちそうになりたたらを踏んだ所を、振りぬいた足を戻す勢いのままに鉄を仕込んだ靴底が膝を外から踏み抜き押し折りつつ、地面に縫いつけた。

崩れ落ち尻を突くとはほぼ同時に腹部に踵を捻じ込まれ、胃液が逆流した。

嘔吐し突き出した顎を爪先が打ち抜く。頭が揺れて世界が歪んだ。目も、耳も、鼻も、痛みすら曖昧になっていく中で見た最後の光景は、飛びあがったそいつが宙で何度も回転している姿だった。

もう何が何だかわからなかった。みんな死んで、こんなこっ酷く

やられて。

全てに現実感が感じられず、どこまでが現実でどこまでが夢なのか。それを思い、でも答えを出せずにいるまま、俺は自分の頭蓋の碎ける音を聞いた。

幕間：鬼神降臨（後書き）

初・バトルシーン。

2話冒頭？ あれは狩りですから……。

次もちょっとバトルが入るのでまた時間がかかるかもわかりませんが、
けっしてロリーゼたんをペロペロしたいから時間がかかっているわけでは
ありません。けっして。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：7（前書き）

どスランプで読んでくださってる皆さんに申し訳が多々ないレベルの超遅筆&文章ガツタガタガタキリバ状態……リハビリとは何だったのか

軽く誤字修正

大陸南西、国境の町及び戦場にて：7

「ひ、あつ」

倒れた兵士の手から拾い上げた剣を逃げ遅れた兵士の背中に突き立て真上に振りぬく。どさりと音を立てて地面に伏したそいつの服で剣にこびり付いた血と脳漿を拭き取りつつ周囲を見渡す。周囲にあるのは倒れた椅子や机と、錯乱して襲い掛かって来た奴等の死体のみ。生きてる人間はもう一人もない。

剣を床に突きたて、空いた手で己の胸元をまさぐる。そこにしまっておいた重々しい鉄の鍵束を取り出し、既に息絶えた兵士達に返してやった。もう十分に見せて、教えてやったのだから、これ以上持っている意味はない。むしろ動くたびに落としそうになるのに気を使う分邪魔なだけだ。

「さ、仕上げと行くか」

突きたてた剣の柄を再び握り、壁に掛けてある基地内の図案を23度見直し、よく覚えてから歩き出す。

逃げ遅れた兵士がいなか気配を探りながら進み辿りついた先は勿論、残った兵達が総力を結集して護っているであろう正門などではない。そこからほどよく近い、物見台の傍に作られた小さな倉庫だ。

誰もいない事を確認して腰を下ろし、懐から1番のお荷物を取り出す。握り拳大の黒い球体であるそれは、鋼の外殻を飛散させて周囲を破壊する魔獣の体より採取された、熱によって発火し爆発的に膨張する体液を元に錬金術をもって生成された薬剤で、固形化された事により気化膨張の精度こそ落ちたものの、ある程度の耐熱性を獲得し熱源の接触から膨張開始までに時間差を持たせた物体。早い

話が、魔獣を原料にした爆薬だ。

これを、この倉庫と一体化している外壁に穴を開けて突っ込み爆破すれば、壁面の材質や厚みから考えて人間が通れるくらいの穴を開けるのは十分可能だろう。むしろ威力を持て余して上部まで崩れ出さないかの方が心配だ。崩れた瓦礫が山積みになっただけは、外からあいつらを呼び込むよりも速く、わざわざ鍵を見せて正門を意識させてそちらに向かうように仕向けた兵士達が来てしまう。

とはいえ、今更打てる手は他に無い。今できるのはせいぜいうまい事都合よく崩れてくれる事を祈り、もしも場合は数百人を相手に1人で足止めをする覚悟を決めるくらいだ。

切り捨てた兵士から奪った剣を投げ捨てる。これも西の国で作られた中々の一品だが、煉瓦で出来た壁面を切り落とすには少々役者不足だ。腰に下げていた自分の剣を抜き、両手で軽く握ったそれを腰だめに構えゆっくりと息を吐く。

鋭く、深めに2閃。それ以上は使えない。力を誇示して残る兵の平常心を乱すため先程指揮官を剣ごと切り捨てたのと、拳士に剣を打たせた事を考えればそれ以上使えば既に疲労している剣への致命傷になりかねない。

肺腑の中身を全て吐き出し、息を止める。その瞬間、背筋にぞわりと薄ら寒いものが駆け抜け、振り返った。

「……よお兄ちゃん」

「こんにちは」

7歩ほど遠くの倉庫の入り口。黒尽くめの少女と共に居た若い男が、そこに立っていた。

俺は今すぐ逃げ出したい衝動に駆られていた。対峙してるだけで全身の毛穴から汗が噴出してくる。生まれ持った本能と、培ってきた経験が揃って危険を告げてくる。殺気を感じているわけではない。柔和な笑みの下に悪意や害意を秘めているわけでもない。むしろそ

の逆だ。この男には微塵も気配がない。

いや、それは少し語弊がある。性格には気配自体は微かながら感じている。消え入りそうな小さなものがゆらゆらと揺らいでいるような不思議な気配だ。だが、その気はこうして対峙しているにも関わらず、微塵も俺に向けられていない。虚ろに、周囲全てに向けて散漫に広がるその気配はおよそ人間の発する気配ではなく、それがひたすらに不気味で恐ろしい。

「やー、よくここがわかったね」

右手に剣を握り左手に短刀を隠し持ち、床に置いた爆薬を軽く蹴飛ばして部屋の端まで転がし、重心を落としながら努めて平静に笑いかける。こちらの動きに気付いているのかいないのか、鞘に収められた剣を片手に握るその男は表情の失せた顔でただこちらを見つめ続けている。

「一人だけ集団から離れていく足音が聞き覚えのある足音だったんで」

「えー、お兄ちゃん他人の足音とかいちいち覚えてんの？ それはちよつと引くわー……あ、ひよつとして昼間会った時からもう俺の事怪しいと思ってた？」

「疑ってたのは私の方だ」

倉庫の入り口の脇から女の声が漏れてくる。男の背中越しに黒い修道服を着た少女が腕を組み壁を背にしているのがちらりと見えた。

「えー、嘘だあ。くーちゃん絶対うまいこと誤魔化されてたでしょ」
「お前は私がお前を疑う事を過剰に警戒しすぎた。お前は私の気配を読んで近寄ってきたのに気付かせない為に、去り際、聞いてもないのに血の臭いについて言及してきただろう。まあ、あえて聞か

なかったのはお前がどう出るか確かめるためだったのだが、お前も腹芸は余り得意ではないようだな」

「うぐう……だってしょーがねーじゃん俺そういうの本職じゃねーしさー。ちえっ」

口ではこともなさげにそう言うが、内心で毒づく。己の手際の悪さと、こうして対峙していても未だ虚ろな気配を漂わせている目の前の男に。

「あなたは」

「あー、言わなくていい言わなくて。何言いたいかはわかってるからさ」

言葉を遮り、隠すのを止め露骨に戦闘態勢を取る。気付かれなければ奇襲できるかと思っただが、どうやらこいつは全部気付いていて無防備にしているようだ。目線でなんとなくわかる。なら隠そうとしても無駄に疲れるだけだ。堂々と構えればいい。

「……あなたはどうしてもあんな事をしたんですか」

「言わなくていいってのに。言われても俺、答える気ねーしさ」

会話を続けようとするそいつの言葉を再度突っぱねる。そいつは初めて表情を曇らせ、少しだけ俯く。

「最初に会った時、あなたはあんな事をするような人には見えなかった。もちろん今も。何か理由があるんでしょう？」

そう言ってそいつは縋るような視線をこちらに向けてきた。それは相手の胸の内を掻き乱す、肯定以外を許さない下からの脅迫だ。俺はふうと胸に溜まった息を吐き出す。そして一度構えを解き、

剣の切っ先を床に突きたて、左手で短刀を弄びながら答える。

「そんな事聞いてどうすんのさ。俺がはいそうですって言ったら俺を許してくれんの？　ここの兵士の皆さんや遺族達にそういうわけなんで黙って許してやってねって俺の代わりに説得する？　それとも、そうですかわかりましたって俺を手伝ってここのやつら殺して回ってくれちゃったりするわけ？」

そう言つと、そいつは再び困つたように表情を曇らせた。恐らくはちゃんとしたそれっぽい理由を述べたとしても同じ顔をしたに違いない。俺はそのまま言葉を続ける。

「理由なんてくだらない事聞くなよ。人殺しなんて、どんな理由があつても許される事じゃないんだ。だって殺された側はもう許すことも許さない事も選べないんだから。大層な理由があつたとしても、それを聞き出して満足するのは生きてる奴等なんだ。殺された当人は無関係の所で解決したらそれは卑怯つてもんだろ。だから俺は殺した理由なんか絶対に教えてやらないし、謝罪も一切しない。他人に理解された事はないけどそれが俺の礼儀だからな」

しんと辺りが静寂に包まれる。俯いているそいつの前で短刀を上に取り投げては受け止め、また投げては受け止める手遊びを繰り返しながらそいつを見ていた。

やっぱりこいつは子供だ。人間の綺麗な部分しか見ていられない無知な子供。

人殺しの理由を聞いたのも、きっと俺の是非を問う為ではなく、俺が是であると己に思わせるためだったのだろう。

気が進まない。以前にも思ったが、こんな子供が戦うのを見ると思うととてもなく気が重くなる。

そいつが苦虫を噛み潰したような表情で伏せていた顔を上げた。

俺はそちらに目を向け、同時に弄んでいた短刀を取り落とす。そして足元まで落ちたその短刀の柄尻を蹴り上げ、同時に床に突き立てていた剣を掴むと同時に体を右に捻り、顔面目掛けて蹴飛ばした短刀と同時に攻撃を放つ。

短刀の狙いは顔。刃が都合よく顔を切裂いてくれる期待はしていない。本命の剣閃を覆い隠すための目晦ました。剣の軌跡は短刀よりもやや下、切っ先が丁度首筋を通る血管を半分ほど引き裂く程度を狙って振りぬいている。

何もこれで決まるとは思っていない。ただの小手調べだ。この攻めをどう対処するのか傾向を確かめるための。

そいつの右手が飛来する短刀に伸びる。避けずに払いのけるかと思いきや、回転する短刀の柄を掌で受け止めた。そしてその顔が一瞬驚愕の色に染まった。同時に、俺も驚く。こいつは、俺が剣を振りぬいていた事にまったく気付いていなかった。

まさか、これで決まるのか？

掴んだ短刀を手放し、左手で剣を握るが、今更間に合うはずがない。剣先はもう既にそいつの首筋から拳ひとつ分ほども離れていない距離まで迫っている。

それでもそいつは下げていた左手を振り上げた。その瞬間、全身に悪寒が走り、全ての毛穴から汗が吹き出た。反射的に剣を手放したと同時に、爪の先と剣の柄の間を鞘に収められたままの剣だと思われる、目にも留まらぬ速さの何かが通り抜けていった。

馬鹿げている。いくらなんでもそれは速すぎるだろう。

胸中で毒づいている内に、目の前の男がまた驚いている。恐らくは自分の攻撃が外れた事になるだろう。その目線が俺の肩口に向けられるのを見て、宙空に残した自身の剣を手にとると同時に身を伏せる。髪を暴風が撫で、後から風を切裂く爆音が響く。伏せた勢いを利用して背後に飛ぶと、一瞬遅れてその場所に奴の剣が突き刺さった。鞘に収められたままの切れ味の存在しない鉄塊が石造りの床に鏝までめり込んでいる光景はとても非現実的で、思わず笑いさえ

こぼれてくる。

「ほう、3手凌ぐとは思ったよりも強いじゃないか」

感心したような声が投げかけられるが、それに反応している余裕はなかった。

対峙している男のあまりのでたらめさに背中をじつとりと汗が伝う。豪傑だとか天才だとか、そういう類の連中は山ほど見てきたが、こいつはそのどれとも違う。特別知恵が回るわけでもなく、戦術や絡め手、意表を突く攻撃には素直に驚き相手の先を読むなんて行為もまるでしない。技術にいたっては剣を振る動作が斬る動きではなく棍棒でも振るっているかのように叩きつけるだけと素人同然、所作から見る限りそれは鞘をつけたままだからというわけではなく斬り方を知らない風でまったく論外と言っても何の問題もないだろう。なのに、ただ見てから適当に振るった剣が何よりも速く誰よりも力強い。神速で振り切った剣の勢いを力で捻じ伏せて一瞬の内に斬り返す斬撃などは真面目に修練を積んできた人間を馬鹿にしている。とは思えない。

こいつは天才なんかじゃない、人の皮を被った化物だ。
その化物が深く深く床に突き刺さった剣を易々と片手で引き抜く。

「凄いや、どうやったら今のを避けられるんですか？」

剣を腰だめまで持ち上げながらそう口にした表情に嫌味はない。本当に、ただ素直にこちらの技量に感心している。最も、その感心事態が当人の超越的な駆動に基づいているのだから、こちらとしては素直に喜べず、漏れてくるのは苦笑だけしかない。

「……おたくほどじゃないさ、勇者様」

「気付いてたんですか？」

「まあ、初めて見た時に勘でな。ああ、俺より強いって事はこいつが、ってな」

だから戦場に來られる前にどうしても仕事を片付けたかったのだが、と今更言っても栓の無いことか。

「それがわかつてるなら剣を納めてください。あなたがいくら強くても僕を倒すのは絶対に無理です」

「断固断る」

「何故」

「理由は言わないつつつたろ」

一瞬、そいつの顔がまるで泣いているかのように歪み、そして僅かに俯き、顔を上げた時には全ての表情は消えていた。対話を諦め、頭の中の全ての余分な感情を全てはじき出し完全に集中している。もつとも、それだけをとっても常人ではそう狙って出来る事ではないのだが。

ただ立っているだけで、こちらの意識を刈り取りそうなほどの凄まじい威圧感。気を失うか、跪いて許しを請うか、背を向けて逃げ出すか。そのどれかを選べればどれだけ楽な事か。

「……それに負けるって決まったわけでもないさ」

それでも、唾と一緒に弱音を飲み下し、己の逃げ場を無くすため右手に握る相棒を掲げ、笑いながら減らず口を叩いた。

恐らくもうこいつは聞いてはいないし、きつと察してはいる事だろう。だから他人に言い聞かせるためではなく、己を鼓舞する為に、あえてそれを口にする。

「武と剣に名高き西王国で一の剣を持った、西王直属兵団の一の戦

士つてのは、要するに大陸で1番強い人間って事なんだからさ」

あんたを除けば、だけどな。

誰も聞く者のいない心中でのみ、小さくそう唱えて、かれこれ10年来になる自分より格上の存在との闘争に飛び込んだ。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：7（後書き）

ストーリーに関わる部分を書こうとすると作者の都合と物語上の流れがぐちゃぐちゃになって何言ってるのかわからなくなる
才能と技術が欲しい……寝てるだけで突然開花しろ俺の文才

大陸南西、国境の町及び戦場にて：8（前書き）

スランプ絶賛続行中

大陸南西、国境の町及び戦場にて：8

意識を極限まで引き絞り、眼を剥き耳を澄ます。相手の攻撃は正に神速、見てからでは当然、攻撃に移る初動から予測しても尚回避が間に合わない。思考を読み、目線や息遣い等の僅かな動きを全て見逃さず、攻撃の前に範囲から抜けていなければそこで終わりだ。

駆け寄る足から力を抜き、体勢低く四足で這う間一髪ほど上を敵の剣が横一文字に薙ぎ払い、四足の力で横に跳ねたすぐ後、剣が床に決りこまれた。更に瓦礫と化した床の礫を跳ね上げながらの追撃。体を逸らして剣に触れるのだけは避け、拳大の石礫が体に打ち込まれるのを歯を食いしばって堪えながら、背後に倒れ込む体に引き摺られるように剣を振るう。狙いなど無くただ一番速く振りぬける場所を全力で奔らせたその剣は振り上げた腕を半ばまで切裂く軌道で襲い掛かったが、あろうことは奴は腕を引くのではなく、飛来する剣先よりも速く歩いてその範囲から抜けた。

剣の届く間合いではないがまたすぐに距離を詰めて来ることは想像に難くない。一瞬の内に受け攻めの展開を思索し、僅かに空気が揺らぐのと同時に背を軸に足を引き、上下逆さに立つ。先程まで両足のあった場所が爆音と共に舞い上がる粉塵に覆われたのと同時に両腕で地面から跳ね上がるとそこを剣が真横に薙いで粉々に散った床石の埃が尾を引いた。

宙に浮きながら体を回し、死角を突いて後頭部に踵を叩き込む。避ける素振りはない。見えていない、気付いていない。当たる。踵が頭部に叩き込まれる一瞬前の確信は、確かにそれが微かに頭部に触れる感触の直後、有るはずの手応えと共に消失した。

ぞわりと戦慄が湧き上がる。確かに蹴りが後頭部を捕らえるのを見た。そして、気付いていなかった攻撃に触れてから頭を下げて避けるのも見てしまった。こいつは見えている攻撃には絶対に当たらないどころか、見えない攻撃に当たってから避けられるのだ。

驚愕に硬直していた思考が活動を再開すると同時に、既に相手が次弾の構えに入っている事に気付く。見えていなくても直接触れた事でこちらの位置を把握したのだ。

実力の差等という今更解りきっていた事で動きを止めた自分を罵倒しながらそいつの手元目掛けて足を伸ばす。それがそいつの体に届くより先に、振りぬかれた剣の根元が爪先に触れ、凄まじい剣圧に微かに引っかかっただけの足先に引き摺られ宙を何度か回りながら背後の棚に叩き込まれた。

全身が粉々に砕かれたかのような激痛。喉の奥から込み上げる血反吐を吐き散らしながらも、構えた剣先で相手を捕らえ続ける。この絶好の起にもそいつは攻め込んでほなかった。冷たい瞳でこちらを見下ろしながら、僅かずつ距離を詰めてくる。

腰を上げ、地に足をつけると同時に激痛が走る。どうやらほんの少し引っ掛けられただけの左の爪先はそれだけで砕かれてしまったようだ。ああして軌道を逸らさなければ天井まで跳ね上げられていたとはいえ、この代償は余りにも高い。ただでさえ極限まで精神を集中してなんとか避けられていたのに、この足ではもう長くは持たまい。それに今ので少しばかり物音を立てすぎた。おそらく正門に集まっている兵士達の何人かはここに誰かいるのに気付いただろう。誰か一人でも確かめにくればそれで終わりだ。百かそこらならまだしも、500を超える兵を続けて相手をしていくのは……まあ、目の前の相手と戦うのに比べたら随分と気楽ではあるものの……厳しい物がある。

状況はほぼ詰みに近い。この状況から目的を達成するには、正門から兵が向かってくるよりも先に、目の前の自分よりも遥かに強い化物を殺害するしかない。今まで生きてきて最も絶望という言葉の似合う状況と言っていいただろう。

しかし、それでも止まるわけには行かず、俺は切札を切る。

懐から一本の投げナイフを取り出す。他国産の量産品で、刀身に紅い彫り物までしてある武器としては最低級の粗悪品だ。が、これ

こそが確かに俺の切札の一枚なのだ。

開き直り、咆哮と共に前に踏み出す。折れた足の痛みを文字通り踏み越えながら、ゆったりとこちらを見据えるそいつに向かって左手の投げナイフを放る。

投げる、ではない。一度足を止め、下からふわっと何かを投げ渡すかのように柔らかくそいつの目の前に放る。

そいつが宙のナイフに視線を向ける一瞬に覚悟を決め、眼前の敵から完全に意識を外しナイフだけに意識を集中する。

ナイフを放った左手を突き出しながら脳裏に描く。その刀身に刻まれた図形と古代文字の意味を。手を離してようが事象を想起。叫ぶ。

「輝け
Glitter！」

刀身に刻まれた真紅の紋が浮かび上がり、その名に従い眩く煌々と同時に全身から力が抜けていく。他人の築いた術に血を塗りこめ無理矢理精神に繋ぎ、門外漢でありながら身の程を超える魔法を用いた代償だ。意識が跳ぶかと思うほどの虚脱感を、折れた足を地面に叩きつける激痛で強制的に現実呼び戻す。

目の前の相手が唐突な光の瞬きに確かに眼を奪われているのを確認する。無理矢理起こした術を更に強制的に破棄。頭と胸を襲う釘を打ち付けられるような鈍痛を堪えながら左手を剣の鍔に添え、留め具を外す。目釘が外れ、鍔が落ち、刀身を水平にした剣の下半分が分離した。

二刀一対。これが最期の切札であり、西王国の誇る鍊鉄技術の集大成である世界最高の剣の本当の姿。

腕を交差させ、逆手に握った左の手で右上方から首筋を突き、順手に握った右の手で左下方から脇腹を斬り上げる。

相手は未だ視力を回復させていない。当たる前に避けるのは不可能。また、剣の軌道から当たってから避けるのもまた不可能。前、

後、左、右、上、下、いずれに避けようとどちらかの剣が体に沈む。

左右の剣が同時にそいつの肌に触れた。瞬間、きんと甲高い音が響く。左右の両の手、どちらにも体に切り込む感触は無い。そいつは、目が眩んだまま鞘に納められた剣の半ばを握り、剣先で右の突きを払い、柄と鐔で左の切り上げを引つ掛け止めていた。

策を行使し、嵌め、隙を作り一方的に全身全霊の攻撃。完全に目論見通りに進め、尚倒すことは叶わない。

だが、それでもまだ絶望はない。予想通りかつ予定通りだ。

俺は両手に握る剣をその場に残して1歩後ろに飛ぶ。右手で腰にあるそれを抜き、未だ完全に視力の戻らぬそいつに、黒く小さく、無骨なそれを突きつけた。

拳銃。未だ開発途中であり、射程が短い上に一丁一丁がまったく異なる癖であらぬ方向へと弾を飛ばす欠陥兵器だ。

だが、その癖も同じ物を使い続け、完全に把握できたのなら問題は解消される。

これが切札ならぬ、奥の手。まさしく正しく、最後の手段。

狙いは首と胸。この銃の癖は距離が離れるほど右下方に逸れる事だ。西から東に抜ける際の幾十もの銃撃戦の経験が反射的にそこに当たる場所へと銃身を向ける。

息を止めると音が止んで色が消える。余分な景色が崩れ落ちていき、やがて時間すらもが静止して自分の意識と引鉄に掛けた指だけが稼動を許されている。

集中の極致。剣閃の応酬では至れなかったそこにこんな時になつてようやく踏み入った事に溜息をつきたい衝動に駆られるが、生憎と呼吸は自由になっていなかった。

凍りついた世界の中、唯一視界に映る白黒の人影をじつと見つめる。

どうなるにせよ、これで御仕舞い。

引き金にかけられた指をゆっくりと絞り、同時に世界が動き出す。

空気が爆ぜる音が辺りに広がった。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：8（後書き）

主人公チートすぎワロタ

というか冗談抜きで強すぎて戦闘が書きづらい……誰だよこいつこ
んな強くしたの！ ふざけんな！

大陸南西、国境の町及び戦場にて：終

続けざまに弾頭を排出した銃口から微かな煤けた臭いと硝煙が昇る。

照準、射程、軌道の予測、全てが完璧だった。完全に虚を突いた銃撃は確かに真っ直ぐ人体の急所二箇所には僅かな間すら置かずに、剣撃など比較にならない速さで襲い掛かった。

避けることも防ぐことも不可能。後はただ死ぬまでの僅かな時間を崩れ落ちた床の上でのた打ち回って過ごすのみ。

のほ、だった。

「……冗談だろ」

無意識に喉から掠れた声が漏れる。

そいつは平然と俺の前に立っていた。傷一つなく、血の一滴も流さず、悠然と。右手に持ち直した、鞘にふたつ、小さな鋼の玉をめり込ませた剣を構えて。

「……まっすぐ飛ばないから使い物にならないって、言ってたじゃないですか」

非難めいた声色で、視力の戻り始めた目と、剣先をこちらに向けてくる。

「どうやったんだよ、さすがにそれは尋常じゃないって域すら超えてるぞ」

『嘘は言っていない』、等と軽口を叩く気も起きず、ただただ疑問を投げかけた。手を止め、言葉を投げかける事。それはつまり、

戦い放棄したという事だ。それに気付いてか、そいつも答える。

「目の前で空気の弾ける音がしたんで、咄嗟に」

「……銃弾の速さって音とそう変わらないはずなんだけどな」

単純明快、かつ常軌を逸したその答えに思わずはは、と笑いすらこぼれた。ひとしきり笑った後で、次いで負けを宣言する。

「止めだ止め。切札も、全力も、この奥の手まで出し切ってこれじやいくらやつても勝ちの目なんざ微塵もねーよ」

片手で銃を弄びながら、ようやく足が折れてるのを思い出して壁を背に座り込んだ。相手の理不尽なまでの強さよりも、それに届かなかった自身の不甲斐なさが胸に重い。

「残念ですけど、もし反応できなかったとしても僕には効きませんよ。これ、魔物の体から作った物でしょう？」

そう言いながらそいつは鞘に穿たれた弾丸に触れた。いや、触れたというのは間違いだった。正確には、触れる寸前で弾丸が沸騰するかの様に煮え立ち、鞘から零れ落ちて床に落ちるまでの間になくなって消滅したのだ。理解不能なその光景に思わず眼を見開く。

「こつという体質なんです、僕は」

そいつはそう、何故か少し寂しそうに笑った。

俺はもう笑いすら出てこずにただ溜息をつき、胸中で呟く。これが勇者か。流石にここまで来ると魔王が可哀想になってくる。

「さて、じゃあすっぱり殺って頂戴な」

銃をしまいながらそれを口にする。戦闘中も眉一つ動かさなかったその表情がまた露骨に曇った。戦ってる時もそう解りやすければまだ助かったのに、と溜息をつき、口を開く。

「やりあう前にも言わなかったっけ？ あんだけやらかした俺を誰も許そうとは思わないし、俺も許されようとは思わない」

「それでも、死ぬことは無いじゃないですか」

「無くはねえよ。人の命はそんな軽くない」

「ならあなたの命だって軽くない」

「屁理屈言つなよ」

「屁理屈はあなたでしょう」

死なせないの一点張りで、一步たりとも退いてくれない。いつそ剣があれば自分で首を掻つ切るなりするのだが……いや、無理だろう。目の前にいるのは弾丸よりも速く動く人間だ。この期に及んで不審な動きをすればその瞬間に両手足を押し折られるくらいはするかもしれない。

「話し合うのも結構だが、ここの兵達がやってきたようだぞ。そいつは元より、私たちも侵入者である事を忘れるなよ」

と、そこでずっと環の外にいた少女が声を上げた。耳を澄ませてみると確かに恐る恐ると近寄ってくる足音が聞こえる。

まずい、もう時間が残ってない。

「頼むよ、俺はここで死んどかないと涉らないんだ。殺すのが嫌なら殺してくれとは言わない。お願いだからここで死なせてくれ」

折れた足を動かし、手を突いて額を床に擦り付ける。狭まった視

界の端で、勇者の足が踵を返すのが見えた。

「嫌だ。僕は誰も死なせたくない。どんな理由があっても命を奪っていいはずがないんだ。納得ができないなら、僕がさせます」

そう言つて、勇者は扉に向かつて歩き出す。恐らく本気で、俺を助けるために彼らと話し合うつもりなのだろう。こんな人殺しの助命のために、下げなくてもいい頭を下げ、受けなくてもいい罵倒を受け、背負わなくてもいい悪名を背負つてもきつとその意思を貫くだろう。それはとても立派な事で、素晴らしい事なのだろう。

だが、不要ないんだ、そんな物、俺には。

ぎしりと奥歯を噛み締める。時間が無い。兵達の気配は既に扉の正面まで移っている。怯えからかそこで立ち止まっているものの、勇者の方から扉をあければ、もうその先はそうなってしまう。

この状況を全て打破できるものが欲しい。きっと、何かあるはずなんだ。なければいけないんだ。

その時、視界の端にそれが飛び込んできた。よく知っているはずのそれが何なのかしばらく理解できずに思考が止まる。

そして、獣のように口の端を吊り上げ、歯を剥きだしに笑い、ゆつくりと銃を掴んだ。

「……無理だつて言つたじゃないですか。それを誰に対して向けても、僕は撃つ前に止められます」

背後でその気配を感じ取つたのだろう。勇者はこちらに背を向けたまま、柄を握る手に力を込めてそう告げる。その言葉はまったくもって大袈裟ではない確かなものだろうが、それでも俺は笑つていられる。

「だろうな。でもこつちなら違う」

そう言つて、俺はそれを左手に持ち替え、銃口を部屋の隅っこに転がっている黒い球体へと向けた。瞬間、勇者が振り返り、その意味を理解し、息を呑んで顔を青くする。

俺の銃口の先が捕らえていたのは、俺が持ち込んだ爆薬だった。

「この位置じゃ爆発の衝撃は四方に散つて大した威力は出やしない。この倉庫ごと碎くのは無理だ。衝撃は爆炎を伴つて弱い方、弱い方へと向かつていく。この倉庫で唯一外へ繋がる扉の方に。んで、今まさにそこからここに入ろうとしてる何の罪もない兵士達にもな」

唯一、俺の手に残つた物で人間の命を奪える武器は銃だけだった。だがそれを向こうに向けても弾丸は受け止められ、自殺しようとする分に向けても、致命傷を受けれる場所に向ける間に腕が銃自体を破壊されただろう。弾も銃も、落としてしまえば何の意味もない。だからこそ、勇者は自信と余裕を持っていた。

だが、こうなれば別だ。形のない物は剣では防げない。ひよつとすれば、彼ならば爆風ですら避けきるかもしれないが、それができるのは彼だけであり、後ろにいる少女は勿論、外にいる至極普通の兵達などには到底できる事ではない。

勇者が飛びかかつてこうとする気配を感じ、瞬時に引鉄を落とした。また、何もかも全てが遅くなる感覚がやってくる。そして気付く。これは……少なくとも今回ののは、集中等ではないただの幻の類だと。

止まっているはずなのに、あいつの事よく見えるのだ。子供のように純粋なあいつが、悲しみに染まりきつた顔をこちらに向けながら少女を抱えて外へ走っていく姿が。

「悪い、ごめんな」

無意識の内に、自分の口から主義に反する言葉が漏れて……。

空気が震え烈火が舞い踊った。

真っ赤に染まった視界が白く濁り、転じてぶつりと闇に染まる。体は凄まじい風の壁に押しやられ、耳は音を失いどちらが上か下かすらわからないまま壁だか床だかに叩きつけられた。折れたか千切れたか、両手と片足は感覚が無く、体の表面と肺には灼けつくような大気が纏わりつく。

よかった。これなら俺は長くは無い。

憂慮が解決すれば、肉の焼ける感覚だけが全身を支配した。その苦痛はあまりに度を越しすぎ、現実感がない。

それでか、ふと脳裏にあの子供の顔が蘇った。誰も彼もみんなが幸せになれるはずだと本気で信じているであろう、誰よりも強く、でも誰よりも脆そうなあの子供。

『最後にひとつ、勇者様の前に長年最強やってたお兄さんがひとついい事教えてやるよ』

喉は焼かれ、音を失い、きちんと言えているかどうかはわからない。そもそもそれを伝える相手すらここにはいない。

それでも、きっとそれは誰かが言ってやらなきゃいけないと思っ
て。

『世界で誰よりも強い程度じゃ、助けられるものなんて案外そう多くないんだわ』

少しずつ薄れていく意識の中でたぶんそれは最後まできちんと言えた……ような、気がした。

大陸南西、国境の町及び戦場にて：終（後書き）

ストーリー勧めようとするのがどうやって直るのだろうか

大陸北西部の町にて：1

それが夢である事には目の前の光景を見た瞬間に気付いていた。その二人が並び立っている光景を見るのは有り得ない事なのだから。月の光も差し込まない闇夜に、血塗れの廃城で男が二人向き合っている。黄金こがねの刀身を煌かせて立つ気弱そうな男と、漆黒の剣を半ばから折られ仰向けに倒れる男。それは大陸を震撼せしめし魔王と、その脅威から全てを救った勇者。その決着の瞬間だった。

「勝てるつもりはなかったが、これほどまでの差があるうとはな」

そう言つて、倒れた魔王がくつくつと自重の色調が多分に混じるくぐもった笑い声を上げる。そう思つのも無理からぬ事。惨敗どころではない、勝負にすらならなかった。揚々と斬りかかった一太刀を真つ向から打ち碎かれ、それに気を取られている隙に気付けば血を吹いて倒れていた。力の差は歴然でありながらも、手加減をされた事に気付く程度の力があり、その笑いは相手の出鱈目さ加減よりも、己の道化ぶりの方へと向けられていた。

魔王はひとしきり笑うと、激しく咳き込み唾と共に血の塊を吐きだす。そして二度深く息を吸い、吐いた。魔王は倒れたまま、しかし凜然とそれを告げる。

「さあ斬れ。それで全て終わる」

そしてそのまま瞳を閉じた。何もかも諦めて受け入れたように、あるいは全てやり通して満足したように。その表情は今から殺されるとは思えないほど。大陸の人口の6割を虐殺した男とは思えないほど。とても穏やかなものだった。

荒い息を吐きながら、勇者がゆっくりと歩み寄る。一步、また一

歩。間合いを越えても尚、その足は止めない。

勇者が立ち止まったのは魔王の頭上。その瞳が開かれていたのなら、真っ直ぐ視線を交錯させる位置だ。

静寂が辺りを包む。風すらもが息を潜めて二人の行く先を見守っているかのように静けさが広がっていき、ただ時が過ぎていく。

どれほどの時間が経ったのだろう。勇者の腕が上がり、掲げられた黄金の剣は。

がたん、と馬車が揺れ目を覚ます。

「……」

寝起きでぼやけた視界で周囲を見渡すが、先程まで見ていた景色はそこにはない。視界一面に殺風景な景色が広がっているだけだ。夢だったのだから、至極当然の事だ。

殆ど無意識に奥歯を噛み締める。夢というもののほど腹立たしいものはない。嫌な記憶を避けよう無く思い出させる癖にそれを責められる相手が存在しないのだから。

半ば八つ当たり気味に荒い運転をした御者を睨みつける。背に突き刺さる視線に気付いたそいつは、疲れた顔を無理矢理歪ませ苦笑した。それがまた別件で腹が立つ。

視線を逸らし、異様なまでに濃く青い空を見上げながら思う。

あれから、随分と経ったものだ。

感慨、などというものは自分にはないと思っていた。しかし、胸中でそう唱えると同時に、胸の内を何かが吹き抜けていくような不快感を覚え、ひよっとしたらこれがそうなのかと自問する。最も、それに答えられるのは自分だけであり、そしてやはりそんな物は馬鹿げていると断じるのが自分という存在なのだが。

小さく溜息をつく。あんな夢を見たからだろうか、心中に酷い虚無感が込み上げてくる。全て崩れ去ってしまえばいいという思いと、己が消えてしまえばいいという願望が浮き上がっては弾けて霧散し、また集っては消えていく。

その様子を見かねてか、御者台の男がこちらに顔を向け口を開く。

「イヴ。さつきから少し変だけど、どうかした？」

穏やかな気弱そうな男。己の方がほど弱りきっている癖に、ただ他人の事ばかり気にする男。出会った時からまるで変わらないその在り様がどうにも腹が立つ。

馬車の荷台を風が吹き抜ける。風を受け広がり靡く長髪を手で抑えながら、気に食わないそいつに告げた。

「お前は黙って前だけ見ている、下手糞」

そう言ったか言わないかの間、また馬車が大きく揺れた。

時は、未だ新暦1年。

西王国が仕掛けた戦が終わりを告げてから二月が経った頃、勇者と私の旅はまだ続いていた。

大陸北西部の町にて：1（後書き）

短く小出しにしたいして書いてないのを誤魔化す高等な技法

という言い訳の手抜きではなく、ここを逃すとまたちよどいい区切りを掛けるまでにやたら時間がかかりそうなので速めに区切っておくだけです

本当に手抜きじゃありません、本当です

大陸北西部の町にて：2

その後、私達は西の国を真つ直ぐ横断し、既に北西、大陸最高度を誇る山岳の国へと足を踏み入れていた。

遅々と、しかも度々疲労に足を止めながら、ではあるものの馬車は軋む音を立てながらゆつくりと山道を進んでいく。単純に速さで言えば恐らく徒歩とそう変わらないであろう老馬の歩みにはいつまで経っても慣れる事ができず、古びた馬車の荷台の上で小さく溜息をつく。魔獣を繋いでいた以前の馬車と比べるのは間違っているだろうが、それにしてもこれはあんまりだ。かつて世界を救い、今またたった一人で国家間の戦いを止めた勇者様に対する謝礼がこれかと思うと……正直、少しばかり気味がいい。乗り心地の悪さを耐えられる主たる理由がそれだった。

その、当の本人は未だに暗い面持ちでただ進むべき道を見据えている。付き合いの長さ故に解るが、随分と疲れ果てているようで、普段遣える気も遣わず、黙ってひたすらに前を目指し進んでいく。

憔悴の理由は己の冷遇などではないだろう。元から他人からの礼など求める男ではない。この老馬もオンボロ馬車も、ただ差し出されたから受け取ったに過ぎない。あれが無様に女々しく落ち沈むような理由はただ一つ。先の西王国の起こした戦乱と、その顛末についてしかあるまい。

あの男が爆死した事は、西王国の誇る最強戦力が単身で敵国に潜入し出自を偽り騙まし討ちをしかけた事実と合わせて大陸全土に伝わった。当の西王国を含む大陸中の人民は噂に名高い西王直属兵団の長がそのような卑劣な策を行った事に驚愕した。それを指示したとされる西王ただ一人を除いて。

報を受けた西王は激昂し、西王国の要する全軍に対し、その死の原因を作った国境の町の兵達と勇者を討ち果たせと号令を掛けた。従わぬ者は貴族だろうと将官だろうと一切の区別なく一人残らず放

逐され、足りぬ資材を調達するために全国民には常軌を逸した課税が為された。

控えめに見ても暴挙としか言えないその愚行に多くの民が亡命を求めて北へ南へと逃げ惑い、西王国は混乱の渦へと落ちていく。勇者はこれを自らの行いの招いた事だと自責し、西王国の王都へと足を進めた。

だが、その騒乱は勇者が王都に辿りつくよりもずっと速くに決着してしまった。死んだあの男の部下達、西王直属兵団の本隊総勢72名が暴走する王の首を刎ねた事によって。

勇者が王都にたどり着くと、討ち取られた西王の首を掲げた72名の兵達が出迎え、王と上官の暴走を止められなかった責任を取るため、自らの首を剣で突いた。手近に居た何人かは勇者の手によって阻まれたが、剣を奪われた彼らはそれでも死ぬ事を諦めず、自ら舌を噛み千切り、残された罪の無い民達は助けてやって欲しいと末期に請いながら死んでいった。

それにより、西王国の中核を為していた王、戦力、主要貴族の全てが国内から消滅した事により、西王国は滅亡した。多くの死者を出しながらも、片方の国が滅んだ事によって戦は終わりを告げたのだ。

が、勇者を追い詰めるのはここからだ。

せめてもの償いとばかりに、瘦せた老馬一匹を受け取り進路を北に向けた勇者が見た物は、北西の国境に積み重ねられた元西王国民の屍だった。南西の国以上に西王国と反目していた北西王国は難民の受け入れを拒否していたのだ。

腐臭の漂うその光景に打ちひしがれつつも、勇者は北西王国への交渉に向かい、時には武力を用いながらも北西王との謁見の約束を取り付ける。勇者の目的はあっさりと成った。北西王は国境付近を納める領主と指揮官の首を勇者に差し出し、愕然とする勇者に対し、両人が独断で難民の虐殺を行ったらしい事について謝罪し、現時点で生存している難民を順次受け入れると約束した。

僅かばかりの金子と馬のいない古びた馬車を受け取った勇者は疲れ果てながら国境に舞い戻った勇者を待っていたのは、真新しい死体の山。難民たちの殆どが、飢餓で。疫病で。寒さで。肉体を病み、精神を蝕まれて死んでいた。聞けば、北西王国が直接殺した難民は元々北西王国側と交渉をしていた二人だけだったという。それとほぼ時を同じくして、順調に避難が進んでいたはずの南西側でも難民の半数が死亡していると通達が来ていた。死者の7割ほどは歩いてる途中で息絶え、2割は死んだ者に縋りついたまま足を止めるほど後追いに近い死に様。最後の1割は、無事に国を抜け、安堵した途端に倒れたまま動かなくなった者達だそうだ。更に加えて言うと、逃げ出すよりも前にひっそりと死んでいた人間も、国民全人口の数割に及ぶ程度にはいたらしい。

何てことは無い。誰に殺されなくても、もう既に一切の余力がなかっただけの事だった。案の定、僅かに残った北西国側の難民達は手近な町に着く途中に一人残らず死んでしまった。南とは違う気候の厳しさに擦り切れた肉体を晒し続けたのが生死の境目だったのだろう。

かくして、新暦最初の大事変となった西王国の動乱は、旧暦を含めても有数と言えるおおよそ40万の犠牲者を出して決着した。

風の噂では、燃え滓しか残らなかった最初の戦犯への処罰として、焼け跡から掘り出された宝剣は折られた後、海に捨てられたという。それを聞いたら当人がどう思うだろうか、等と益体の無い事を考え、すぐ、そもそも当人が死者は語らないと主張していた事を思い出してかぶりを振った。

「イヴ」

ふと、勇者が擦れた声を上げた。目は向けない。どうせ見たところで、背を向けたまま丸くなって俯いている姿が目映る事は解り切っている。返答もせず、ただ黙ってその言葉の続きを待つ。

「僕は、どうすればよかったのかな」

その問いはやはりまた解りきった物で、私は目を背けたまま溜息をつく。

過ぎた事を今更、いつまでも。全く持って腹が立つ。少し考えれば解る事で、自分でももう解っているだろうに。

「知るか」

そう思ったから、いたって真面目に、素直に、実直に、考えて出した結論をそのままぶつけてやった。勇者は何も答えず、ただ馬の荒れた息遣いと馬車の軋む音だけが木霊する。その反応のない反応に、やはりそもそものが手遅れの茶番であつた事に気付いているのだと確信した。

冷静になつて考えてみればわかる事だ。西王の錯乱の末の重税で民草が衰弱したにしては、彼らが死に至るのは余りに速い。多くの臣民が反抗し混乱した国内で、徴税だけが順調に進んでいたはずがない。国民の避難もすぐに始まつていた事は、逃げ出す人々を実際目にして確認している。国民達は、財を奪われる前に逃げ出していたはずなのだ。それなのにも関わらず多くの人間が衰弱死していたという事は、要するに西王国民達は最初から……どこからが最初なのかは知らないが、少なくとも王の豹変よりずっと前から、死ぬ寸前まで疲弊していたのだ。

王が暴君として覚醒した、等というのは国が滅んだ後に他国の同情を引き、難民を受け入れさせる為。既に滅ぶ事が避けられぬと知り、出来る限り死を有効に使おうと仕組んだ猿芝居だ。

そこから遡れば、南への進軍の理由も察しがつく。貧窮の末に近い未来死に瀕するであろう民を救うには、どうしても今すぐにモノが必要だった。しかし、他所の国へ助けを求めるわけにはいかない。

程度の差はあれど、長い戦でどこも疲弊しているのは一緒なのだ。それどころか、自身では生きていく事ができない等と自ら公にすればそれを狙って攻撃を仕掛けられるかもしれない。もう央国の押さえないのだ。可能性は低いとは言っても、無視できるものではない。実際、北西の国が難民の受け入れを拒否したのも、敵対視しているからというよりは難民を保護する資金を惜しんでの事だろう事を考えれば、その発想は大きく間違ったものではないと言っている。それならば、力ずくで奪えばいい。それなら物資も手に入り、力を誇示して他国からの攻撃も抑止できる。大義が無くても問題などない。今しばらく、民の命はほんのひと時だけ伸ばし、物資が溢れる他国へと逃げ出させる準備さえ整えば後はどうでもいいのだ。殊更暗君を演じ、表面上で民を圧していれば世界の憎悪は命じた王個人に向く。後は順当に全世界へ宣戦布告、手元に残ったわずかばかりの兵と共に討たれれば、悪政を敷く王から逃げ延びた哀れな民達は生き延びる事ができるだろう。……実際はそう上手くはいかず、尖兵は討たれ、筋書きを内乱で自壊するように変える事になってしまったが。

また、ふと考えた。奴が今居たとしたら救えるはずの人間を救えなかった事を悔やむだろうか、救おうとした人間を救わせなかった勇者を詰るだろうか。先刻無意味と断じた事と同類の思考だったが、放棄するよりも先にあっさりと答えが出る。奴はきつと、そんな事よりも今救うべき人間を救おうと動き始めるだろうと。救えなかった事を悔やみながら、救わせなかった者を恨みながら、きつとそれでも振り切って今やれる事をやるだろうと。

「……ああ、だからか」

そこまで考えて、長く胸につかえていた疑問が氷解した。

ヒトはやれる事をやっていくしかない。やれる事をひとつひとつ、着々とこなしていく事でのみ、前に進める。それが正しい道なのだ。

だから私は、やり方もわからないままに、ただやり^{皆を救おうと}たい事をしようとするあの馬鹿^{勇者}が嫌いなのだ、と。

大陸北西部の町にて：2（後書き）

モノローグでだいたい全部解決させる必殺技。書きあがって見てみたら流れが強引すぎて卒倒しかねない諸刃の剣。素人にはオススメできない。玄人はこんな事しない。ぐぎぎ。

……やっべ、気付いたらまだタイトルの町についてねえ

大陸北西部の町にて：3

些か唐突ではあるものの、私は今いるこの北西の国の在り様について思い起こしていた。

北西の国は両隣である西の国、北東の国と同じく自己生産能力が極端に悪い。土の悪さに吹き抜ける潮風、そして凍える寒さが緑の萌芽を拒んでいる為だ。

必然、糧を得る為には他国から大量の食料を買い付ける必要があり、三国はそれぞれにその対価と成り得る一点に特化した技術を追求した。西は大陸最高の鍛冶技術、北東は大陸唯一の魔道院。そして北は畜産業だ。家畜を飼うだけと侮るなかれ、その妙技は魔王の台頭により凶暴化し人を襲い始めた獣達を、それでも半数程は平然と飼い慣らし続けたという驚異的な実績がある。

しかし、隣国とは違いそれでもまだ国を潤わすのには財貨が足りなかった。上質な肉の安定した供給は確かに他国では真似ができないものであったが、哀しい事に、両隣二国の物とは違い、絶対必要な物というわけではなく、替えも利いてしまうのだ。

だから北の国は、鍛冶の国や魔道大国と呼ばれる二国とは違い畜産の国と呼ばれない。外貨を得るために特化させたもう一つの特色の方。つまりは、旅人の国と呼ばれる。

要は発想の転換。外から持ってこれないならこちらから取りに行けばいいだけの話だ。北西の国はこの国、どの町でも役所や酒場で細々とやっているような、仕事の斡旋という物を国が自ら国家規模で行った。内部の物を消費せず、僅かではあるが外貨を流入し、僅かずつだが貧困に喘ぐ生活から抜け出していった。

ようやく人並みな暮らしができる程度まで行き着いた時、今度は外から人が入り込んできた。主に何らかの理由で住んでいた場所を追われた者を中心とした、力はあるが職が無いという連中だ。労働力の確保という観点では悪い話ではなかったが、元々国民を養う事

がでぎずに始めた事業であり、無闇に人員を増やしては元の木阿弥となつてはしまわないか。

受け入れるか、突っぱねるべきか慎重に議論を重ね、前者を選んだ。そうして北西の国は旅人の国と呼ばれるに至つたのだ。

そういった成り立ちの国であるから、国民は様々な国の出身者が揃い、見た目から北西の国の民だと判別するのはまず不可能と言える。また、そういった類の人間は大概がいわゆる『腕自慢のあらくれ者』であり、王都近辺ならさておいて今通つているような辺境にいるような輩はおおよそその類の人間だ。加えて、特にその気の強い人間は他国では犯罪者として扱われ逃げてきた人間も多くちよつとした事で暴力沙汰に発展したり、更には貧窮が原因で再び犯罪に手を染める事も稀にだがある。

「だからよお兄ちゃん、怪我したくなかつたら俺らが優しく忠告してやつてる内に有り金全部と後ろの女置いてきなつてんだよ」

要するに、今この馬車を取り囲んでいる連中はその類の最たるもののの中の稀な例という事だ。

馬車の前に3人、脇に1人ずつ弓を構え、後方……つまり私の目の前には、下卑た笑みを浮かべた男が2人の計7人。女連れの優男一人に対しては人数も装備も少し物々しすぎる。恐らくは元々7人で行動していて通りかかった者を手当たり次第に襲うつもりだったのだらう。それで勇者を引き当ててしまうのだから全く持つて哀れな奴等だ。

「嬢ちゃんよう、アンタの男ビビつちまつて声も出ねえみたいだぜ」
「あんな腰抜け捨てて俺らんとこ来なよ。イイ目見さしてやんぜ？」

ヒヤハハ、と品の無い笑い声を上げる2人組。間合いの外から踏

み込んでこないのは慎重なのではなく、ただ単にこちらを侮っているだけなのだろう事がその隙だらけのマヌケ面からありありと察する事ができる。

「おい」

声を上げると、笑い声がぴたりと止んだ。知性の欠片も感じられぬ顔を見たくないなので視線を逸らしているが、おそらくはこちらを見ているのだろう。そいつらをきっちりを無視したまま、続けて口にする。

「先に言っておくが、こっちに手を出すなよ」

そう、はつきりと言い聞かせた。

品性の無い二人組はそれを聞いた途端、全身に余りにも解りやすい怒気を帯びる。

「んだその口の利き方は。こういう時は『何でも言う事聞くから手を出さないでください』だろうが」

腰から肉厚のナイフを抜き、逆手に握り荷台に踏み入ってくる。本気で突き立てるつもりだ。脅しではなく、またそれができる事自体を脅迫に用いようとするわけでもない、ただ激情のままとりあえず刺そうとしている。

腰掛けていたこちらの襟首を掴み上げ、掲げたナイフを振り下ろす。軌道からして狙いは顔面か首筋か。こんな見るからに貧乏所帯の旅人を捕まえて、実質唯一の金蔓となる女を一時の感情でふいにしようとするとはつくづく度し難い。

小さく溜息をつき、襟を掴むその指の一本を握り逆側に捻じ曲げた。小気味のいい音が立ち、力の抜けた手から抜け出し、その

間際にナイフの軌道上に置いてくる。体重の乗った肉厚の刃は止める事叶わず……いや、持ち主の呆然とした表情からすると、恐らくは止めるという思考すら浮かばずに真っ直ぐそこに向かい、ぞりりと音を立てて指を三本根元から切り落とした。正常な思考を取り戻されるよりも先に、そいつ自身の腕の影に入り込み、拳を開いて死角からの掌打を顎に打ち込む。盛大に頭部を揺らされた男はぐりんと目を剥いて荷台の中に倒れこんだ。

「こ、このアマ！」

残っていたもう一人が怒りに顔を赤く染めて襲い掛かる。手に持っているのは櫂の棍棒か。一瞬なんとも渋い武器を好んで使うものだと思っただが、握りも構えも出鱈目な所から見ると、こいつは仲間内でも一番の下っ端でただ単に一番安い武器を押し付けられただけなのだろう。拳動も遅く、読みやすい。後を取るまでも無く先に急所に一撃を入れれば御仕舞いだ。

一瞬の後、相手が踏み込んでくるであろう場所にあたりをつける。身長差から考えて最も打ちやすく効果的なのは鳩尾か。急所ではあるが一瞬で意識を奪える場所ではない。念入りに踵を叩き込むべきだろう。

そう考えて前に一步を踏み出した時、腹部が焼けるような痛みに襲われ図らずも動きが止まる。止まったその体勢は丁度、無造作に打ち下ろした棍棒が最も威力を発揮する位置だ。

上体が落ちすぎて避けは間に合わない。衝撃を最小限で受け流そうと右手を頭上で斜めに構え、それと同時に棍棒がその破壊力を存分に振るおうとした。

瞬間、棍棒が根元から粉碎した。ほぼ同時にそれを握っていた男の掌の中心部から真っ赤なものが飛び散り、丸くくりぬかれたように穴が開いた。

男が悲鳴と共に地面に崩れ落ちる。腹を押さえながら馬車の前方

を見ると、前にいた3人と両脇で弓を構えていた2人は、それぞれ違う姿で地面に伏している。そいつらの真ん中で、左手にいくつかの小石をつまんだ勇者が暗い面持ちで地面に転がって絶叫する男を見下ろしていた。はつきりとは見えなかったものの、棍棒と掌を貫いたものは、おそらくあの小石で相違あるまい。

とりあえず、気を失っている男と掌を押さえて咽び泣いている男を揃って荷台から蹴落としてから勇者に向き直り、その目をじっと睨みつける。

「言っただはずだ。こっちに手を出すな、と」

そして、一度口にしたその言葉を再度勇者に投げかけた。

「ごめん。でもまだ怪我が治ってないし、つい」

「負傷しているからこそだ。こんなお遊びのような相手ではなく掛け値なしの窮地に陥った時、自分の体がどの程度の稼動に耐えられるかわかっていなければどうにもならん」

申し訳なさそうに顔を伏せる勇者に鼻を鳴らして背を向け、未だ直りきらぬ腹部の火傷を服の上から押さえつける。もうあれから二月も経つというのにこの有様。想像以上に深刻なようだ。蹴り技全般に加えあまり体を捻るような拳動はできないだろう。

「それよりも、まだ町には着かないのか。予定より2日遅れているぞ。まさか迷ったというわけではあるまいな」

「イヴじゃあるまいし、予定よりも進むのが遅いだけだよ。そろそろ……ほら、見えてきた」

血の脈動に合わせて疼く痛みを顔に出さぬよう、平静を装いながら荷台に腰を下ろして尋ねた言葉に、再び馬車を動かし始めた勇者

が少々聞き捨てなら無い言葉を交えながら答えた。いちいち突っ掛かるのも面倒で、その言葉をあえて聞き捨て進路の先を覗き見る。薄らと掛かる霧の向こう、確かに山や岩場とは違う、人工的な形の影が見えた。

「ふむ、これなら昼には着きそうだな」
「いや」

その言葉に勇者が首を横に振った。と、同時に馬車が動きを止める。何事かと勇者に目を向けると、黙って馬車の前を指差した。指の先には息を荒げて座り込んだ老馬の姿。

「たぶん、夕方まで掛かるんじゃないかな」

苦笑いを浮かべた勇者がそう告げると胸の裡になんとも言い難い感情が去来し、腹にあてていた手を頭に添えてはあと深く息を吐いた。

大陸北西部の町にて・3（後書き）

まだ町に以下略

さっき気付いたけど最終章だけ話じゃなくて章になってたので修正しました

大陸北西部の町にて：4

結局町に着いたのは空が朱色に染まり始める少し前だった。予定よりも随分と遅くなってしまったが、入り口に着くなりへたりこんだ馬を見ていると苛立ちよりも無事に辿り着けた安堵感が勝る。

一先ず馬を適当な場所に繋ぎ、町の中に向かう。魔王との戦で随分と打撃を受けたような傷痕が所々見当たるが、央国跡地に程近い場所にある町としては随分とましな方だろう。他所の国では央国と隣接するような場所にあつた町は大概が滅ぶか復興を諦めて逃げ出さざるを得ない程まで傷つけられる。それがこの町ではまともに人が住めるだけでなく、ある程度の活気まで見て取れるのは素直に驚嘆に値するだろう。

が、微かな違和感が口を衝く。

「すぐ近くであんな連中が出た割には随分と治安がいいようだな」

王都から遠く央国への順路からも外れた北西の国の町となれば、路上を柄の悪い男達が肩で風を切つて歩きふとした事で言い争いから喧嘩になり、時には命の取り合いにまで発展する事もあるというのが大方の人間の想像しうる姿であり、実際それは大体合っているにも拘らず、街並みの中で目に映るのはかつて通つた南西の国の町々どこか似た弛んだ空気を纏つた人々のみ。時折いかにもという風体の人間も見掛けるの、そいつらも覇気というか、毒気が無い。昼間遭遇したような輩がうろついてるとまでは思わなかったが、ここまで大人しいと安心よりも違和感が勝る。

いつそ昼間の奴等が追手を差し向けてきてくれないか、とまで考え出した所で宿屋に着いた。

「1部屋空いてますか？」

勇者がそう言うのと、気だるそうに本を読んでいた髭面の中年は顔を上げ、勇者の顔を見て目を大きく見開き、しばし呆けてから慌ててこくこくと首を縦に振った。差し出された台帳に勇者が名前を書いている間も、それを返して代金を払い背を向けてからもじつとそれを見つめている。

「あれは恐らく気付いているぞ」

戻ってきた勇者にそう告げると、勇者は驚きもせずに頷いた。

当然といえば当然か。先の戦では最初から表立って動いていた分、魔王討伐の時よりも顔が売れた。しかも今居るのは辺境とはいえ当のその国だ。気付かれても何も不思議ではあるまい。むしろ、今までそれらしい素振りを見せた人間が居ない方が不思議だったと言えるだろう。こいつはどれほど勇者としての風格がないのかが伺えるというものだ。

「それで、お前は今から小金稼ぎに依頼を探してくるのか」

「うん。あまり贅沢を言うつもりはないけど、やっぱり馬車に屋根くらいはないと少し困るから」

そう言つて勇者は苦笑しながらどこか遠くを見つめる。恐らくは北西の国の横断の為に買い込んだ保存食が3日後の雨で全滅してしまった時の事でも思っているのだろう。それが特に見るべき所もないこの町に態々立ち寄った理由だった。

「イヴ、それじゃ僕は行くけど決して宿からは出ないでね。もし出なきゃいけないような事があっても宿が見えない場所に入っちゃ絶対に駄目だよ」

「お前は私を馬鹿にしているのか。いいからさっさと行って来い」

そう告げて、何度も心配そうにこちらを振り返ってくる勇者の顔に向かつて手近にあった紙屑を投げつけ追い払う。それ自体は軽く掴み取られたものの、勇者が観念したように宿の外へ出て行くのを見届け、大きく息を吐く。

「さて、それでは町を見て回るとするか」

そして勇者の忠告を完全に無視した言葉を口にした。脳裏に勇者の顔が浮かぶが、何ら後ろ暗い思いは抱かない。

そもそも奴は大袈裟なのだ。確かに幾度か自分が何処に居るのかわからなくなつた事はあるものの、それはほんの数度の事であるし、そもそも私の責任ではない。道を忘れた私ではなく、私に忘れられる道の方に問題があるのだ。

胸中で自信を持ってそう呟き、外への扉に手をかけた。

結果、迷った。

「ふむ、この町も中々没個性的な風景をしている」

すっかり朱色に染まり、夜闇が訪れ始める時。やはり、というか毎度の如く覚えられなかった道の感想が口から漏れ出た。

実際は道が覚えられないというよりは、覚えた道を辿ると見覚え

の無い場所や、違う所にあるはずの場所に出るのだが、重要なのは今現在見知らぬ場所に居るという事であり、それは些末な事だ。

目の前には葉の狩れ落ちた背の高い木々が連なっている事から、町外れである事は間違いないようだ。がそれ以上の事はわからない。とりあえず町の中心に向かっていけばそのうち元の場所まで戻れるだろうが、今までの経験からして辿りつくのは恐らく朝までかかるだろう。口から小さく溜息が漏れる。

と、その時だった。背後から大きく、鈍く、散漫な、しかし大きな殺気が立ち昇っているのに気付く。振り向くと、そこにはいかにもという風体の男達が10人以上も集まってその不恰好な殺気を向けてきている。よく見てみれば、そのうちの2人には見覚えがあった。その2人は両方とも片手が歪に変形し、血の滲んだ包帯を巻いている。

「よ、ようやく見つけたぞてめえ」

「もう1人はどこ行きやがった！ あ、あいつの手にも俺と同じ風穴開けてやる！」

そう目を血走らせすぎて血涙を流す2人は、昼間に撃退した盗賊だった。見覚えはないが、他にも肩や顎、腕に包帯を巻いているのが5人いることからして間違いないだろう。

「……この町の道も、お前らの顔のように覚えやすい風景をしてくれていればいいのだがな」

思わず口を衝いたが、そう言うてからこんなくどい顔をした道のある町には長居はしたくないと思いなおし、こちらの意図を図りかね激昂する一団の前で溜息をついた。

「まあま、とりあえず落ち着けお前ら」

その中から一人、くどい顔付きが並ぶ一団の中、一際異様な風体の男が前へ出る。そいつは長い革のコートに無理矢理縫い付けたベルトに幾つもの多様な武器を挿し、長く腰まで伸びた前髪で顔を覆い、唯一覗く異様に犬歯が鋭く伸びた口元とぎよろりと大きく見開かれた右目は不気味に歪んで笑みを作っている。

「やあやお嬢さん、始めまして。俺はこいつらの頭を張ってるモンなんだ」

「だろうな。後ろの有象無象とは少し違うようだ」

男が口元を更に歪に歪め、立ち込める殺気は勢いを増して霧のように周囲を覆っていく。

「そんでさ、お嬢さんはうちのしたつぱ達に酷い事したよね。ああいや、その事を謝れって言いたいわけじゃないんだ。ただちよつとそのお詫びとして言う事聞いてくれればそれでいいんだよ。ふたつあるから好きな方選んでいいよ？」

口調だけは穏やかに陽気だが、言葉と共に殺気を吐いているかのよう、その牙が上下に揺れる度薄気味悪さが色濃くなってゆく。

「じゃあ1つ目。これから俺達が飽きるまでずっと俺達の慰み者になった後で人買いに売られる事」

黙って立っているのを肯定と取ったのか、もしくは最初から答えを聞くつもりがなかったのか、こちらに向けて人指し指を立てながらそう告げてくる。そしてそいつは、ゆっくりと中指を立てむしろこちらが本命だとも言いたそうな、非常に楽しそうな嗜虐的な笑みを浮かべながらそれを告げた。

「2つ目。指先から20回に分けて切り落とされ、残った首と胴体を民家の壁に打ち付けられていかしたオブジェになる事」

言いつつ、もう片方の手では震える体を押さえるようにぎゅっと自分の胸元を掴んでいる。あの有様ではこちらが答えるまで待つていられるのか甚だ疑問だ。

「さあ、好きな方を選んでよ。どっちも嫌なら1つ目の後で2つ目とかどうだい、どっちも味わえてお得だよ」

「ふむ」

そう言われ、顎に手を当てしばし黙考する。

考えているのはどちらを選ぶのか、では当然なく、相手の戦力だ。後ろの奴等は全員が昼間の連中と大差なく論外。数こそあるものの戦力として数える必要はないだろう。

問題は目の前のこいつだ。雰囲気から察するに、結構な実力と修羅場を抜けた経験を持っているだろう。加えて、コートに括りつけられた獲物は全て飾りではなく実用品だ。多様な武器を使って変則的な戦い方をするに違いあるまい。少なくとも、辺境で盗賊をやらせているような腕前じゃないのは確かなようだ。

「勝てない相手ではないが素手で戦うなら無傷は難しいか」

「ん？ 何？ どっちだった？」

小声で呟いた為、相手には何を言ったのか聞こえなかったのだろう。顎に当てていた手を下ろし、改めてそいつの顔を見ながら口を開く。

「どちらも断る。だから速く殺しにかかってこい」

腰を下ろし、構えを取る。同時に、目の前の敵がぶるぶると震えながらその獣染みた顎を開き、猛々しい……いや、禍々しい咆哮を上げた。

「よおしっ！ それじゃ特別に2つ目の後1つ目だ！ 今日とは久々のお楽しみだあ！ ひやはははははは！」

そう言っ て両手に剣とフレイルを掴み、真円を描いた瞳を向けてくるその姿は狂人という言葉すら生易しい。腕を抜きにしても係わり合いになりたくないが、だからこそ丁度いい。

「昼間は奴に邪魔されてろくにやりあえなかったからな。今度は私が満足するまで付き合ってもらおう」

こちらの言葉を理解しているのかいないのか、狂人が最早人の言葉を為していない叫びを上げながら地を蹴り迫る。腰を落とし、神経を集中させてそれを待ち構え……。

次の瞬間、そいつと私の直線状に何か巨大な物が勢いよく投げ込まれ、突き立ったその前で慌ててたたらを踏んで立ち止まった。思わず舌打ちをする。この機、この時に都合よく現れてこうする男を一人知っているから。

それが飛んできた方向に顔を向けて、未だ敵の前にも関わらず思わず呆けた。

「そこまでにしてもらおう」

想像していたのと違う声が辺りに響く。それも当然だ。そこにいたのは、私が思っていたのとは違う人物だったのだから。

背が高く、肩幅の広い大柄なその男は、青と白を基調とした軍服

を身に纏っている。年の頃は青年というには遅く、中年というには少し速いくらいだろうか。ひどく冷たく落ち着いた顔をしているからか、見た目から推察される年齢よりも随分と老成して見える。腰に大きな剣の鞘をつけている以外は一切の飾り気がない。質素、あるいは堅実。もしくはその両方の言葉が似合う、そんな男だった。

「……何、連れの男ってこいつ？」

勢いを止められた狂人は不機嫌そうにそれを指し示しながら背後の味方に問うが、そいつらは揃って首を左右に振った。それを見て、更に機嫌を損ねた風に突然現れたその男を半眼で睨みつける。

「君さ、誰？ 無関係の人が首突っ込まないでくんない？」

「私はこの町の者だ。無関係ではあるまい」

殺気を多量に含んだ澱んだ空気の中を平然と歩き、投げつけたそれを手に取った。持ち上げられてから気付いたが、それは幅広の長剣だった。大きく、厚く、硬く。まるで持ち主の在り方を映しているかのような無骨な剣だ。男はその切っ先をゆっくりと狂人に向ける。

「そしてこの町の治安の維持を任されている。大人しく退くのなら今回は見逃そう」

そう告げる顔に恐れは無い。濃霧のように立ち込める殺気の中でも、冷えた鉄の塊の如く揺るがずに敵を見据えている。

一方で、狂人はまるで対照的に揺らいでいた。煮え滾っていたと言っても違いはない。先程までの歓喜とは違う憤怒からの震えが全身を走り、奥歯は割れそうなほど強く噛み締められている。

「俺さ、君みたいなの嫌いなんだよ。自分が正しいって信じきってるその面、昔殺してやった上官とそっくりだ」

あからさまに見て取れる激情とは裏腹に、声だけは静かに牙を剥き腰を落として戦闘態勢に移る。逆手に握った剣の剣先とフレイルの鉄球の棘が土にゆつくりと跡を刻みながらにじり寄る。

それすらもまるで意に介さず、男はただ事務的に尋ねた。

「退くかどうか。それだけ答える」

「退くわけねえだろバカが！」

叫び、一転して野獣のように飛びかかる。中々に速い。1歩で己の間合いまで踏み込み、同時に右手のフレイルを頭部目掛けて振り下ろす。それに反応して男は胴を真横に薙ぐように長剣を振るうが、それは誘いだ。それしかできないように距離を詰め、左手に握った剣で体を庇っている。

がぎん、と金物同士がぶつかり合う鈍い音が響く。振りぬかれた長剣は、やはり相手の剣に阻まれ肉に届く事はなかった。後から放ったのに先に当たる剣速と、その斬撃がもたらす大の男の足が地から離れるほどの衝撃は驚嘆するに値するものの、敵の攻めを止める事は叶わずに鉄球は真っ直ぐに男の頭部へ向かっていく。

男は空いている左手を頭上に翳した。が、いくら腕で庇っても鎖によって十二分に遠心力を得た鉄球は止まらない。普通に考えればもう致命傷は免れないはずだ。

しかし、結果は違った。いや、結果というよりも、そもそも過程が違ったのだ。男は腕で頭を庇うのではなく、振り下ろされた鉄球を伸ばした左手で掴み取り、衝撃を完全に殺しきった。その行動に狂人は驚愕した。それを隙というのは些か酷という物だろう。

小さくこじんまりとしていた男の気配が急速に膨れ上がる。内側に押し込められていた鋭く、小さく、代わりに極限まで収束された

濃密な殺気が。みどり、という異音は外に向けられたそれらが空気と擦れ合った音か、もしくは一切の無駄なく鍛え抜かれた筋肉が今正に全力を振るおうと引き絞られた音なのかははっきりと判別できなかった。

狂人の両足が地面から浮く。剣撃を受け止められ一度完全に勢いを失ったはずの剣は、その刃を受け止めた剣ごと相手の体を持ち上げていた。我に返った狂人が慌て出した所で、足が地から離れた以上はもう遅い。片手で握られたその剣は、そのまま背後に半回転して降りぬかれ、中空に投げ出された狂人は凄まじい速度で10歩以上離れた巨木の幹に背中から打ち付けられ体を直角よりも更に激しく折り曲げ口から赤いものを吐き出してから地面に落ちた。口からはみ出たそれは血ではない。圧力に負けてせり上がってきた胃が、裏返り丸ごと口から漏れ出ている。狂人はぴくりとも動かず、目や鼻から僅かだけ赤い血を漏らして即死していた。

啞然とする盗賊達の前で、男は掴んでいた鉄球を放り捨て何度か手を握っては開く。棘が刺さり多少の出血はあるものの何ら問題なく動くようだ。その手を剣の柄に添えると、呆然としていた盗賊達是我に帰り、悲鳴を上げながら各々の方向へと逃げ去っていった。男はそれを追わず、全員がいなくなったのを見届けてから剣を鞘にしまい、血の止まらぬ掌を布を縛りつけた。

強い。純粋な戦闘能力ならいざ知らず、肉体の強度で言えば間違いない大陸でも最高峰の人間だろう。ただの力技しか見れなかった剣技も立ち居振る舞いからして素人のはずはない。先の戦で見届けたあいつには届かないだろうが、それでも大陸でも指折りの剣士なのは間違いないだろう。

剣を収めたそいつがこちらに振り向く。何と言すべきか。

戦え、というのではないだろう。盗賊を追い払うのとは訳が違う。益がないどころか、町の人間と争いを起こせばいらぬ苦勞を背負い込む事になるし、第一目の前のこれは正直万全でも手に余る達人だ。負傷を押して戦えるほど甘い相手では全く無い。

有難う、というのもない。相手は善意かもしれないがこちらはせっかくの機会を奪われたのだ。態々感謝をする謂れはない。

考えている内に男が目の前まで歩み寄ってくる。果たしてどうするべきか。残された僅かな時間に答えが出るはずもなく。私はとりあえず、今最も重要な事を口にすることにした。

「すまんが、ここから宿までの道を教えてくれ」

大陸北西部の町にて：4（後書き）

2話続けたの盗賊虐待。しかも今度は上げて落とす。やめてげてよ
お！

大陸北西部の町にて：5（前書き）

区切るべき場所を間違えた為、更新早めの文章量少なめ

大陸北西部の町にて：5

数歩先すらもはつきりとは見通す事のできぬ暗い夜闇の中、前を歩く男について見覚えの無い道を歩いていく。

道を教えると言ったのに態々町中の宿巡りに付き合うとはなんとも面倒見のいい暇な男だ。と、最初は思ったものの歩きながら何度もこちらに振り向き何かを伺うように顔を覗き込むその姿を見て、それが違う事に気付く。

そうだ、こんな時間に街中を1人で出歩き柄の悪い集団と徒手で格闘しようとする余所者の若い女など怪しいにも程がある。特に罪を犯したわけではないから捕まえたりはしないだろうが、居場所くらい突き止めておこうと思うのは至極当然の事だった。

「ふむ、今まで2人だけで旅を？ この時機に西から抜けてくるとは、何かそうしなければならぬ理由でも？」

こうして時折思い出したかのように詮索をしてくるのもその想像を裏付ける証拠と言える。

「私は連れ回されているだけだ。理由がどうか目的地がどうか聞かれても答えられん」

そう答えると、そいつはふむと声を漏らし前を向いて思索に入った。核心に触れる部分を適当にはぐらかしながら離れているうちに勇者が未成年の少女を連れまわして戦場を渡り歩く住所不定の男という事になってしまったが、あながち嘘とは言えないはずなので責められる謂れは一切無い。それによって勇者とこの男がどうにかなるとしてもそれは当人同士の問題だ。

と、そんな事を考えている内に次の宿に辿り着く。全体像はよく

見えないが、小さい火種が照らし出す正面の入り口付近の造型はどことなく見覚えがある。間違いなく私の探していた宿だ。多分。

「イヴ！」

声と共に宿を照らしていた光源が近付いてくる。聞き覚えのあるその声はランプを携えた勇者だ。こちらの姿を確認して安心したという様子で駆け寄ってきている。

「だから言っただじゃないか、君は角を曲がったら自分がどこにいるのかわからなくなるんだから広い町と夜中は一步の動いちゃ駄目だつて」

「お前は私を愚弄しているのか。それから近い、もっと離れろ」

子供扱いという言葉すら生温いその言動に苛つき握る拳に力を入れ殴りたい衝動を押さえ込みながら1歩退く。それに気付いているのかいないのか、そもそもこちらの話を聞いているのかいないのか、勇者はこちらに構わず喋り続けている。

「失礼」

と、そこに横でやりとりを見ていた男が口を挟む。ようやくその男の存在に気付いた勇者がそちらを向くと、男は勇者の顔や服装を何度か見直し、もしか、という顔で口を開いた。

「貴公は勇者殿ではないですか？」

「はい、大体の人は僕をそう呼びます」

正体を看破された勇者はその問いをあっさり肯定した。名乗らずに見破られたのはこれで2度目だが、今回はほんの少し前に随分と

目立った事もあり、さほど驚く事はなかった。元々隠す意味も特に有りはしないので、そういう反応をするのも当然だろう。

「あなたは？」

「はっ」

問い返された男はぴつと姿勢を正し敬礼を取る。

「この町の警備をしている者です。勇者殿のお噂はかねがね聞かせていただいております」

その行動に、勇者も慌ててぎこちなく礼を返す。そういう扱いをされるのに慣れていないのであろう、横から見ていても明らかな狼狽が感じられる。

一方で男の方はかつて世界を救った英雄を前にしてもまるで動揺していなかった。あるいは私から聞き出した事柄からある程度の推察はついていたのだろう。それほどにその姿は堂々としていた。知らぬ者が見ればどちらが勇者なのか間違はなく間違われるであろうほどに。

「少しお話をお聞かせ願えないでしょうか？　こんな夜中にご迷惑かと思いますが、勇者殿がどのような道程を越えてきたのか知りたいのです」

「は、はい。受けた依頼が始まるまではまだ時間があるんでそれまでならいいですけど……」

そう言いながら、ちらりとこちらに視線を向ける。『こいつ、また勝手にどこか行かないかな。もっとちゃんと言い聞かせた方がいいよな』。そう、不安げな視線がありありと語っていた。その視線に、舌打ちを返したいのをなんとか堪えて口を開く。

「わかった。今度はお前が帰ってくるまで宿から出ん。町はもう十二分に見て回ったからな」

業腹だが、実際に一度街中を迷い歩いた身ではその視線を突つばねる事もできない。それを聞いた勇者はやや気の抜けた表情で頷くと、男の方に向き直り話を始めた。

二人に背を向け、宿の中に入る。単なる世間話にまで付き合うほどの義理は持つてない。そんな興味の無い事に付き合うくらいなら部屋で寝ていた方がずっと有意義だ。

割り当てられた部屋に入り、ベッドに横たわる。扉か窓か、どちらからかはわからないが微かに勇者の声が漏れ聞こえている。その言葉の意味を出来る限り理解しないよう意識をぼかし、目を閉じた。聞くな。聞こえるな。眠ってしまえ。耳に届く雑音を掻き消すように必死に己に言い聞かせる。眠気はまるでないが、問題など無い。自分の意に沿わぬ行動など、新暦以来ずっと続けている。

眠りに落ちろ。何度も何度も、かつての苦渋を思い出さぬよう、かつて味わった辛苦の味を噛み締めながら唱え続けた。

大陸北西部の町にて：5（後書き）

次回辺りからそろそろ物語の核心に触れるかな……どうだろう触れないかな……触れるといいな……

大陸北西部の町にて：6（前書き）

核心には触れられなかったよ……

大陸北西部の町にて：6

ああ、糞。現状を認識すると同時に、汚い言葉が漂い消えた。

目の前に見えるのは亡央国、王城跡地、魔王城。紛れも無い、思
い出すのを忌避していた過去の記憶に他ならなかった。

思い出すまいと意識しすぎたのが逆に仇になったか。

外聞もなく溜息をつき、唾を吐き捨て手近な物を蹴り飛ばしたい
衝動が襲うがそのどれも叶わない。この夢には自由になる体が無か
った。視覚、聴覚だけがそこを俯瞰するようにゆらゆらと漂って見
下ろしている。

「待たせたな」

何処からか声が上がると、玉座の横に座り込んでいた若い男が物
陰に視線を向けた。忘れも間違いもしない勇者だ。現在と比べると
やや陰鬱な顔付きをしているそいつは、ぺたぺたと足音を立てて物
陰から姿を現したそれを見て、阿呆のように口を開いて動きを止め
た。

「……何だ、その顔は」

「……君こそ、その格好は？」

お互い、3拍ほど間を持たせての問い掛けだ。

物陰から現れたのは、明らかに丈の合っていない長すぎる真っ黒
なローブで全身を覆った少女。要するに、あの日の私だ。こうして
傍から見ても、その顔からは目の前で呆けている男を好ましく思っ
ていないのがありありと見て取れる。その私は仏頂面のまま腕を組
み、鼻をふんと鳴らす。

「あのような格好で外を出るわけにもいくまい。着れる物はこれしかなかったのだ」

「それなら僕の服を貸そうか？ それよりは丈の合った奴があると思うけど」

「断る。私は黒以外の色を身につけるつもりはない。そもそもお前の所持品を身に纏うなど怖気が走るわ」

眼下の私がそう言つて憎悪すら滲む視線を向けると、勇者はそれから逃げるようにふいとその陰気な顔を背けた。私は忌々しげに舌打ちをし、フードを被り勇者に背を向けた。

私……過去の己の影ではなく、今これを見てる私の意志は感嘆する。改めて見れば、お互い随分と変わったものだ。私はあそこまで敵意満面だったか。常に苛立ち、万物全てを呪いそんなほどの敵意を勇者に向けているのが見て取れる。それもこの頃なら仕方が無いと理解はできるものの、こうして外から眺めてみるとそう思わざるを得ない。

奴はああも笑わない男だったか。何か後ろ暗い事でもあるかのように、時折私に視線を向けようともして目と目を合わさぬように振舞っている。これについては何とも言えない。奴が今のようにな駄に笑うようになったのは何時頃だったのか思い出せない。今現在目の前でこうして鎮痛な面持ちで俯いているにも関わらず、どうしてか奴は最初から笑っていたような気さえする。

と、その時唐突にずきんと頭が痛んだ。ないはずの部位に痛痒を感じるという違和感が意識を夢から現実へと無理矢理引き戻していく。

白く染まっていく視界、薄れ掠れ、遠ざかってゆく音。その中でかつて己の放った言葉だけは鮮明に耳に届いてくる。

「勇者よ。私は己の責務としてお前に付き従う事に依存を挟む権利は持たぬ。だが、お前が魔王を殺した事を私は一生忘れず許さない

事だけは覚えておけ」

そして、それに勇者がなにがしかの答えを返そうとした瞬間に、それはぶつりと途絶え全ては漆黒に包まれた。

「……」

瞳を開けると、天井の木目が霞んだ視界一杯を埋め尽くす。雲が途切れ、月と星が照らす夜は真夜中にも関わらず宿に戻った時よりもずっと明るい。

むくり、と体を起こそうとして腹部に痛みが走り、片手を壁につけて恐る恐ると起き上がり、溜息をついた。

「一体、私はどうしたというのだろうか」

憤慨より戸惑いが強く、呟き片手を胸に当てた。その胸の内側、血の奔る心の臓ではなく精神の裡に黒い泥のような物が宿っている。恐らくはそれが近頃の自身の変調の原因なのだろう。そう推察はするものの、肝心のそれが何なのか全くわからない。

夢。意識化での妄想。あるいは無意識下での理想。もしくは過去の記憶。私はそんなものに縋るような性質ではない。奴との旅で昔と変わった部分があるとして、改めて省みてもそれに間違いは無い

はずだ。

ふと、そこで己の思考に疑問を覚える。縋る。ほとんど無意識に紡いだ言葉だったが、それこそ己が本来自然と使うに値しない言葉ではないか。

有り得ないと思うと同時に、しかしそれとは裏腹に胸に当てられた手は吸い寄せられるかのように下方へと落ち未だに疼く腹部の火傷の上をなぞった。その爛れた傷痕は未だ完治することはなく、また治る兆しもまるで見て取れない。

心根が弱い方向へ傾いてると過程すれば、考え得る物はこれしかないだろう。しかしそれは同時に、認めたくない物を認めざるを得ない事を意味していた。

「この私が傷を負って不安がるか」

自嘲するように口の端を歪めるが、喉からは乾いた息遣いだけが漏れ出てくる。

やはり私は変わった。随分と弱く、情けなくなってしまった。かつてならばどんなに手酷い傷を受けようとも心が弱い方へ流れる事など無かった。あるいは、それに気付いて憤慨せずに笑うような事もしなかっただろう。

長く人間と触れ合いすぎたからか。いや、それは違う。他者に影響されて流されるような性根ならば、それはきつと最初から強くなどなかったのだ。

腹を押さえていた手を目線まで持ち上げじっと見つめる。改めて見つめたその腕の何と白く、細く、弱々しい事か。この枯れ枝のような変わり果てた腕では多くを失って行くのも当然か。

「次は一体、何を失くすのやら」

握り締めた拳が軋む。

いい、構うものか。誇りも自尊心も、旅の前にとくに失くしてしまっている。今更己の弱さを呪い恥じる必要などない。ただ、最後に残った一つだけを護っていけばそれでいいのだ。

その時、扉から小さく2度乾いた音が響く。

「誰だ」

反射的に声を上げた。こんな夜更け、態々この部屋に来るのは勇者しかない。だが、ここに勇者はいない。いても奴は部屋に入る前に戸を叩くような神経を持ち合わせていない。ならばそれは勇者ではないという事になる。そして、勇者でないのならばその来客は本来ここを訪れる理由の無い、見知らぬ何者かと言う訳だ。

ちらりとベッドの脇に目を向ける。そこにあるのは鞘に収められた長剣。由来も名もない無銘の剣だが、今私が持つ唯一の武装だ。片手をそつとその柄に添えながら返事を待つ。

「私です。少し宜しいでしょうか」

扉の向こうから返ってきたのは聞き覚えのある声だ。数度やり取りをしただけの相手ではあるが、流石につい先程に顔を会わせた相手を間違える事は無いだろう。

「……構わん、入れ」

確かにそれは知っている相手だ。とはいえこんな時間に部屋まで押しかけられる理由には一切の心当たりが無い。呼び込みながらベッドの中にそつと剣を忍ばせた己の臆病さは、我ながら侮蔑して然る。他人であれば声高に詰る所だ。

扉が静かに開き、そこから男が1人入ってくる。その姿は脳裏で思い描いた通り、盗賊達を一蹴したあの男であった。あれからそれ

なりに時間が経っているにも拘らず、衣服から装備に至るまで何一つ変わらないままにそこに立っている。

「一体何の用だ。まともな人間ならとくに寝ている時間だぞ」
「失礼。しかしどうしても確かめたい事がありまして」

そう言っ頭を下げる男に、微かな違和感が過ぎる。口調や態度が違った時と違っているからか。しかし、不審者であった当時と勇者の連れである事が判明した今とでは対応が違うのは当たり前前のだ。そう断じ、頭から薄い靄のような違和感を振り払う。

それよりも、今は目の前の男の言葉が気になった。私が何か言っただというわけではあるまい。それなら勇者と逢うよりも先にその場で問い質していただろう。ならば勇者が何か言っただのか？

ベッドに隠した剣に触れる手がじつとりと湿る。男は疑るような視線を向けながら、2度、3度ほど何かを躊躇うように言いよどむ所作を交えながらその口が自信なさげに開かれる。

「……私と貴女は、以前何処かでお会いした事はありませんでしたか？」

「……は？」

その全く予想だになかった言葉とそれを口にした事を後悔するかのように伏目がちになる男を姿を見て、今までの生の中でも最も気の抜けた間抜けな声が喉から漏れ出した。

勿論、その言葉の意味を理解できないわけではない。今までそういう経験をした事は無かったが、それに類する事柄は暇潰しに手にした書物で読んで、地面の通りの意味合いではない事も承知している。

そう、つまりこれは所謂口説き文句というものだ。
脳裏ではつきりと言葉にすると、可笑しさを堪えきれず息が漏れ

た。

「悪いが、覚えが無い。お前の記憶違いだろう」

「いえ、確かに見覚えがあるような気がするのです」

動揺しているのか、意味が破綻している。確定と不定を同時に並べられて、どう返答を返せというのだ。

「それはいつ、何処の話だ」

緊張に強張った体が弛緩していく。同時に、思い悩んでいた事柄も不思議とどうでもよくなったように胸が軽くなった。姿勢を楽に直すと左の掌にごつごつとした感触が返り、剣をベッドに忍ばせていた事を思い出す。安らぐには邪魔なだけのそれからそつと手を離そうとしたその時。

「8年前、央国王城玉座の間」

告げられたその言葉に、心臓の鼓動が部屋中に響き渡るほど大きく脈を打った。

とは言っても、そんな物はただの錯覚だ。外部に音が漏れるほどの稼動をさせる力は心臓には有りはしない。ただ精神的動揺が殊更それを大きく感じさせているだけの事なのだ。

しかし、それは要するに、自身で感じられるほどの動揺を顕しているという事である。

全身を押し潰す圧迫感と、体の深奥まで深々と氷柱を突きたてられるような悪寒に襲われ、離しかけていた剣の柄を掴みベッドから引き抜く。大きく拍動した心臓が今度は竦みあがり動きを止めようとするほど重厚で鋭利で濃密な殺気を放つそれは、すでにその豪腕で抜き放った剣を振りかぶっていた。

大陸北西部の町にて…6（後書き）

次回こそは……

大陸北西部の町にて：7

飛び退ると同時に先程まで腰掛けていたベッドが轟音と共に両断される。巨漢と呼んで差し支えない体で素早い拳動、不意を突かれなくても納刀したままでは反撃は間に合わなかっただろう。

床を転がり振り向くと同時に窓に体を投げ出す。硝子突き破る一瞬の後に、蹴り飛ばされたベッドの半身が爪先を掠め壁にぶつかって爆音と共に砕け散った。

投げ出された地面を転がって衝撃を受け流し、立ち上がると同時に剣を抜く。先程自分が飛び出した窓を見ると予想に漏れず奴が飛び出して来ている。その両手に剣を構え、底冷えするような冷たい視線をこちらに向けながら。

しかし、飛び降り様に切りかかるには随分と距離が足りていない。あれでは4歩近くも間合いを外れてしまう。距離を見誤ったか？ いや違う。明らかに間合いの外に落ちるとわかっていながら奴の殺気は些かも衰えてはおらず、その剣を握る腕は異様な筋肉の盛り上がりを見せている。

そこで気付く。奴は元から私を狙っていたのではない。上空から襲いかかるのに剣を下段に構えているのは道理に合わない。

剣を手元に引き寄せ、腹部の傷の痛みを気力で押さえ込みながら全力で後退する。兎にも角にも髪の毛先1本ほども距離を取らなければ命に関わる。

なんとか2歩ほど余分に距離を取ると同時に、奴が地面に降りる。だんつと稲妻が落ちるような音を轟かせながら歯を食いしばり。

「はっ！」

短く力強い咆哮と共に、落下する全衝撃を全て飲み込んだ長剣の跳ね上がりが宿の前の石畳を粉々に粉碎し、大小様々の礫が迫って

くる。その数、負傷し得る大きさ、勢いで体に直撃する物だけを考えても8つはある。

剣を目前に構え、とりわけ命に関わる頭部へ向かう礫を弾く。それ以外は後ろに飛び退りながら体を丸めてやり過ごすしかない。

「っ、う……！」

多くの礫は体に当たるすれすれの所を通り過ぎていったが、左肩と右腿に鈍い痛みが走る。特に左肩の礫は打った直後に痺れが走るほどの威力を持っていた。痺れはすぐに肘を伝い指先まで伝播する。まずい。この様ではまともに剣を振るう事もできない。

奴が駆け出そうと重心を移すのが見えた。その瞬間、それに背を向けて全力で走り出す。

とにかく時間を稼ぐ。最低でも左腕……いや、指先の感覚だけでも取り戻さねばどうにもならない。

走りながら敵の姿を肩越しに覗き見る。流石に走力においては体や剣の重量の分だけこちらに分があるようで、僅かずつではあるが距離は開いていく。上手くいけば相手をせずともこのまま逃げ切れるかもしれない。

と、そこで背後の殺気が唐突に鋭くなったからか、あるいは何か風を切る音が聞こえたからか、とにかく肌が粟立つのを感じて体を硬直させる。その矢先に曲がろうと思った路地の壁が突如として飛来した岩の塊によって爆散した。目と鼻の先を通り過ぎた致命に至るに十分な暴威に首を回して後ろを覗く。そいつは恐らく、腕に手甲でも仕込んでいるのだろう、石壁を殴り崩してその破片をこちらに向かって投げつけた。狙いはこちらというよりも、今から逃げ込もうとした先。

踵を返し、爆音を背にしながら再び大通りを走り抜ける。当たるかどうかわからない攻撃よりも、意図を読んでの牽制で重圧をかけつつ自分の思うとおりに動かすのを選ぶ辺り中々いやらしい。おか

げで全力で走りつつも背後の相手にまで気を配らなければならなくなった。かといってずっと振り向いているわけにもいかない。聴力を限界まで澄ませ、その足取りで動きを読む。

そして、ふと違和感が湧き上がる。歩調はただ走っているだけの物だが、足音が先程よりも僅かに近くから聞こえる。

速度を落とすのを覚悟で振り向き姿を確認すると、確かにそいつは前よりも近付いてきていた。

先程立ち止まった分距離を詰められたか？ いや、それなら前に振り向いた時に気がつくはずだ。

それがどうしてか解ったのは、もうしばらく経ってからの事だった。

息を荒げながら振り向くと、その姿が更に近付いてきている。その間、何ら特別な事は起こっていない。ただお互いに前に向かって足を進めていただけだ。

ならば答えは自ずと一つに絞られる。単純に、奴が少しずつ速度を上げているのだ。遅いのは動き出しの初速だけ、一度勢いが着いたならば、後は単純に脚力の問題になる。勿論、巨体を動かし続けるのはそれ分だけこちらよりも余分に体力を使うだろうが、そもその体力に差が着いていればその差は無為に帰する。肺に灼けるような熱さを感じているこちらに比べて、後方で追い立てるその男の表情の何と涼しげな事か。

そもその投石も、小難しい理屈などなく直線を走ってさえ居れば必ず追いつくという単純明快な自負によるものだったのだらう。現に今、互いの距離はあと3歩ほどで致命の傷を負わせる事が可能なまでに縮められている。

「っはあ、っ……！」

喉から堪えきれない苦渋が漏れ、自覚できるほど体が沈む。限界だ。これ以上こいつの前を走り続ける事はできない。しかし左手は

まだ感覚が戻らず、ここで足を止め斬り合えばまず闘いにもならずに殺されるだろう。

ならば、どうするか。答えは簡単だ。足を止めて斬り合わずに逃げればいい。

可能かどうかは5分だが、迷っている時間はない。息苦しさを噛み殺しながら最後の力を振り絞り、民家の壁の近くにあつた水瓶を飛び越え、空中で前に回りながら剣でそれを碎き散らす。

「む……！」

水瓶の中身が巻き上がり、その飛沫に左手を翳して顔を庇う。着地と同時に振り向きその頭部に向かって剣を横に薙ぐ。が、片手で振るつたとはいえ体の回転の勢いをつけたはずのその一閃は右手一本で構えた長剣の鏑により皮一枚も傷つけられずに止められる。

軽々と剣を止めたそいつは右足を振り上げる。丁寧に刃と鏑でこちらの剣が下方へ振れないように対処しつつ。

問題はない。本番はここからだ。振り上げられるその丸太のような足に全神経を集中する。

できるはずだ。視界と両手を封じれば次に使うのは脚という所までは読めていた。後はただ実行するだけ。できるはずだ。1度、この目で見ているのだから。

蹴り上げられる脚。その脛の辺り目掛けて踏みつけるように蹴りを放つ。脚にも鉄を仕込んでいたのか踵に硬い手応えが帰ってくるが、問題は無い。これは攻撃ではないのだから。

脛に添えた片足を突っ張り、蹴られる勢いを利用して背後に飛ぶ。先の砦で勇者と戦ったあの男が見せた回避法だ。見事に上手くやりおおせたものの、心中には後悔しかない。今飛んでいる速さは走っている時と同じ速度で、飛んでいる高さは民家の屋根よりやや低い程度。これで石畳の上を転がされるようならやはり大打撃は免れない。

絶望に襲われる中、唐突に視界が開けた。何かと辺りを見れば、どうやら町の外れまで来ていたらしい。周囲には枯れた木々が生い茂っていた。

幾重にも折り重なった枝が体を叩くと同時にめきめきと音を立てて折れ、背中から地面に叩きつけられる。更にはそこはどうやら坂になっていよう、落ちた勢いで硬直した体は無防備に坂を転がり落ち、何度か地面を飛び跳ねた後に巨木の幹に打ち付けられてようやく動きを止まる。

「っ、が、げほっ、はっ……あ！」

全身を何度も打ち付けられ長々と転げまわった不快感から血反吐の混じった咳と吐瀉物を吐き散らした。それに加えて酷使した肺腑が空気を思うさま吸い込もうとするものだから、口内に残った吐瀉物が喉に詰まりそうになりまた咳を漏らす。

あの男、よくこんな事をやりながら剣を持ち続けられたものだ。

全身はまるで粉々に砕けたように痛む。鮮烈すぎるその痛みは失せていた左腕の感覚をも取り戻させていた。

立ち上がり、そこで剣を手放していた事に気付く。自分の間抜けさを呪いつつも、剣を持って転げまわり自分の体に突き立てるよりはましかと思いつき、痛む体を引き摺りながらそれを捜す。幸い落ちてきた道を少し上るだけで見つかった。枯れ枝を縫うように挿した月明かりが照らし出す場所に落ちていたのは、十分幸運と言っていいたろう。

その柄をのろのろと掴み上げ、自分の落ちてきた方向を見上げる。随分と長い斜面に枯れ葉が敷き詰められている。遙か向こうに人影のような物が揺らいでいるが、いかにあの男とも言えどもここを

走り抜けてくるのは不可能なはずだ。敷き詰められた枯れ葉は腐りかけ、しっかりと踏みしめなければすぐ足を滑らせるだろう。巨体と装備で重量を増している奴なら尚更だ。

「さて、どうするか……」

選択肢はおよそ3つに分けられるだろう。1つ、とにかく下方へ逃げ距離を取りこちらの姿を見失った隙に隠れる。2つ、斜面を横に逃げ生い茂る枯れ木で剣撃を阻みながら相手が疲労するのを待つ。3つ、動いたと見せかけてこの場で待ち伏せ、油断をさせて背後を突く。

遠くに見える人影はもう動き出している。悠長に選んでいる時間はない。すぐ決断しなければならない。

そう、己を急かす言葉すらも悠長であつた事を思い知る。

黒い小さな人影は遥か頭上で地面を蹴った。木々の枝を押し折りつつも真っ直ぐこちらに向かってくる。啞然とその姿を眺めるこちらと、その視線が絡み合うと同時にそいつは剣を手近な巨木を続けざまに切り落として勢いを削ぎ悠然と地面に降り立った。あれだけの事を行いながら傷一つ無く、息一つ乱していない。

それは最早、ただ感嘆と共に息を漏らすしかない、余りにも鮮やかな力技だ。

眼前の敵がゆっくりと剣を持ち上げる。眼前の敵に圧倒されている自分への戒めに唇の端を噛み、口内に広がる血を飲み下しながら腰を落とす。問題はない。体は酷く痛むものの、戦闘を行う為に必要な器官は既に復旧してある。……勝てるかどうかは別としてだが。

「もう一度聞こう」

静かな、まるで何かを押し殺すかのように不自然すぎるほど静かな声が男の口から漏れ出てくる。

「私を覚えているか？　あるいは私でなくてもいい。この服装に見覚えは？」

「すまんが、まるでない。8年前は人間を外見で判断する趣味は持ち合わせていなかったのだな」

「そうか。ならいい。貴様にそこまで望むつもりもない。ただ私が覚えていればそれでいい。そこまで変わり果てても尚あの日と何ら変わらぬそのおぞましく漆黒い瞳の底を」

それで言葉の応酬は終わりとばかりに、男は全身の筋肉を軋ませる。

目の前の男に見覚えが無いのは本当だ。だが、よくよく見れば身に纏ったその軍服には覚えがある。かつて暇潰しに読んでいた本に載っていた、伝統ある中央の騎士団の軍服だ。ならば、覚えていないだけで確かにその男とも出会ったことがあるのだろう。その事に多少の申し訳なさを感じながら、左手を剣の柄に添える。

そして亡国の騎士が牙を向く。押し殺した憎悪と、悔恨と、憤慨と、歓喜と、使命感をその瞳の奥に滾らせて。

対話は既に終わっている。ならばこれは一方的な宣言だ。

「ようやく貴様を斬れる時が来たぞ、魔王」

呼ばれなくなって久しいかつての名が、枯れた森の中に響いて消えた。

大陸北西部の町にて：7（後書き）

ようやく触れたけどさんざ引っ張った割にはありがちな設定

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6353v/>

勇者の旅は終わらずに

2011年10月20日19時06分発行